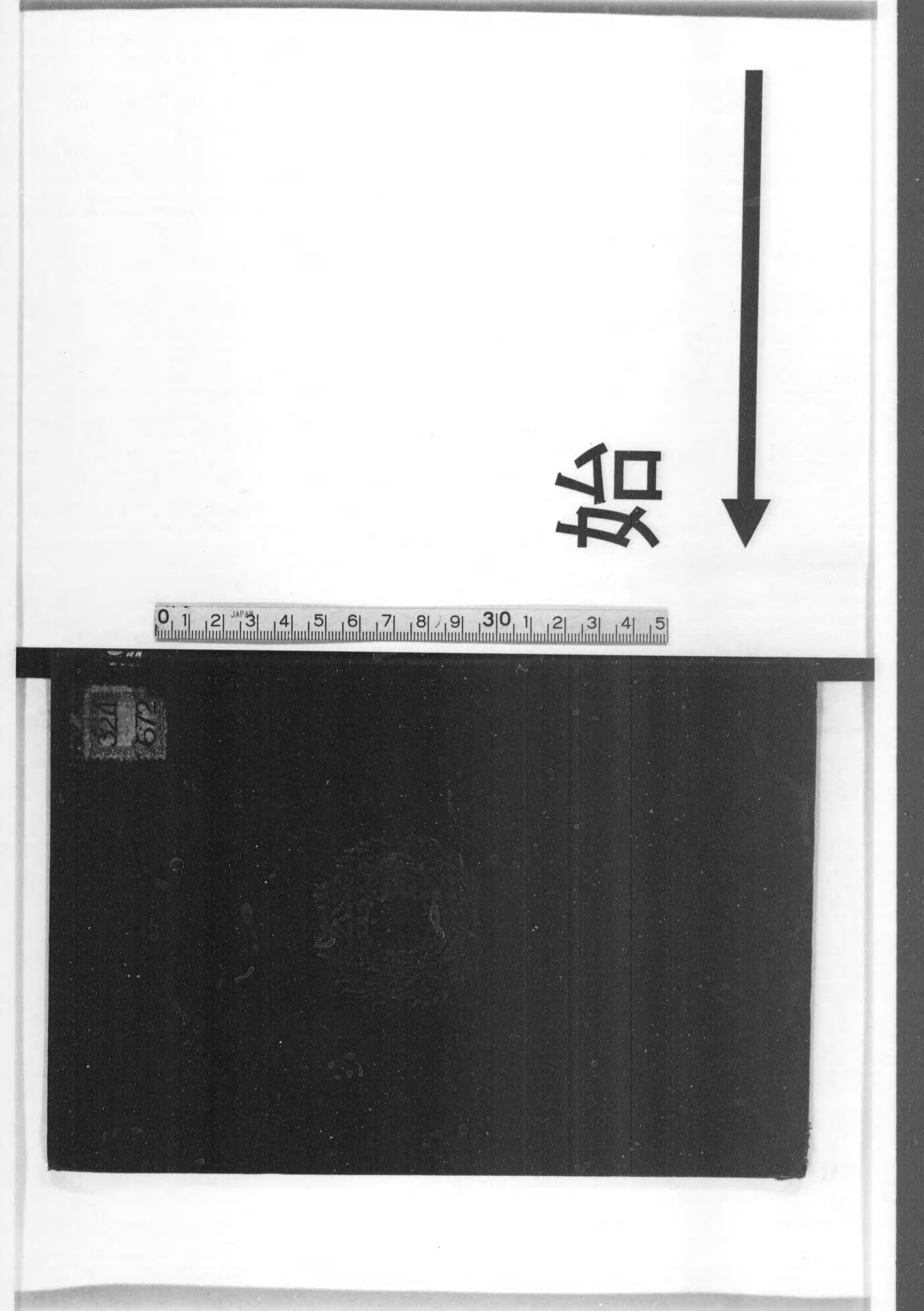

祝
JAPAN

324
672

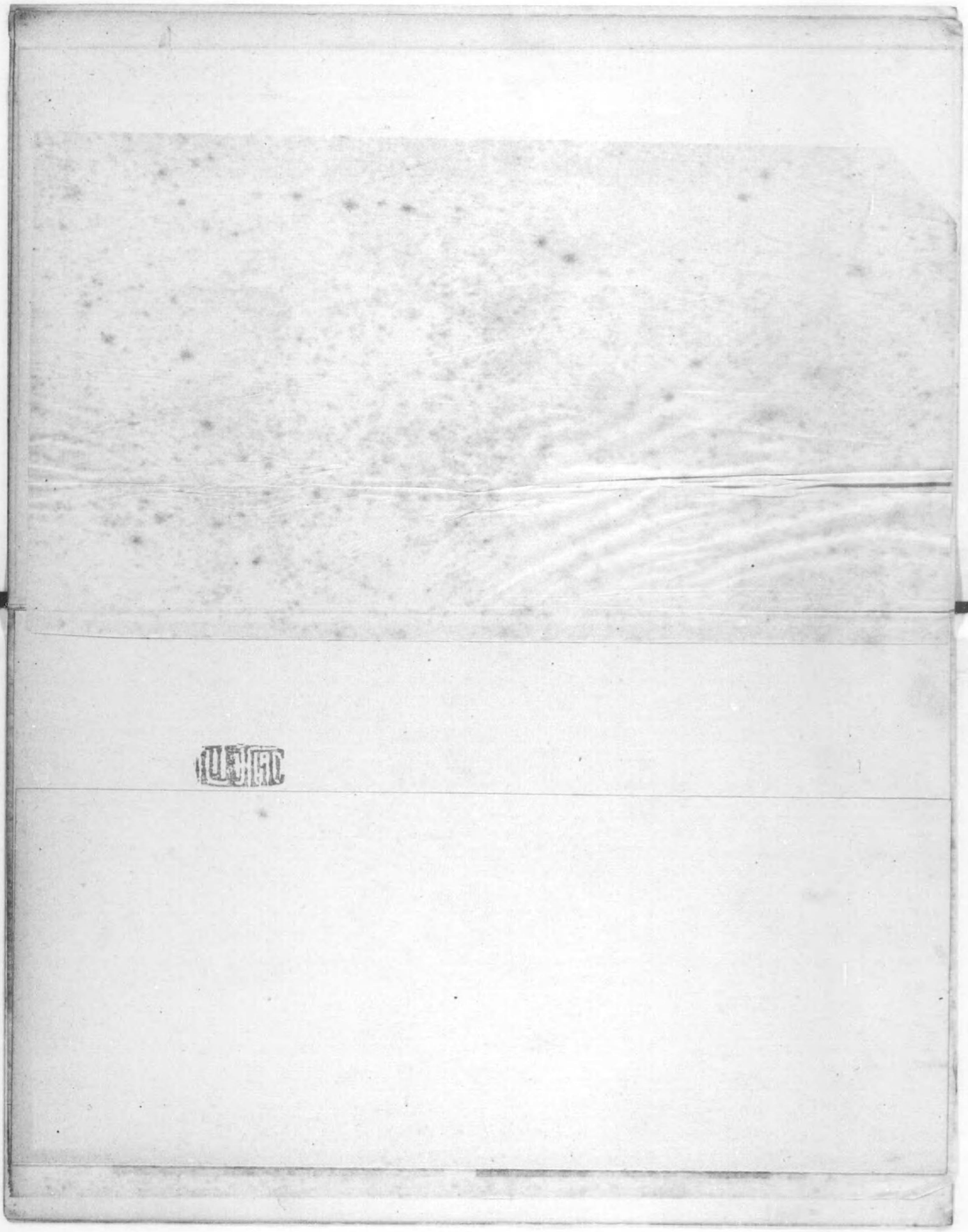
324-672

川合梁定著

浮土三部經和解

京都　宗粹社發行

大正
11. 5. 23
内交



衆聖齊瞻仰

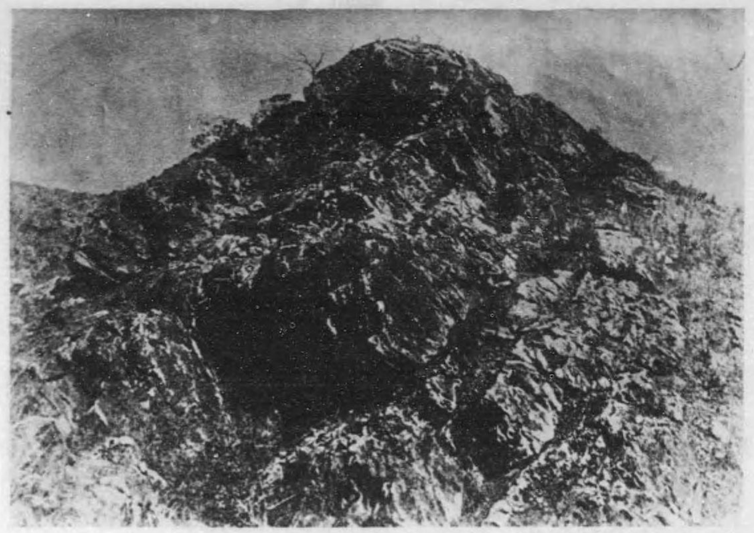
諸尊偏讃揚

華頂山孝奉敬

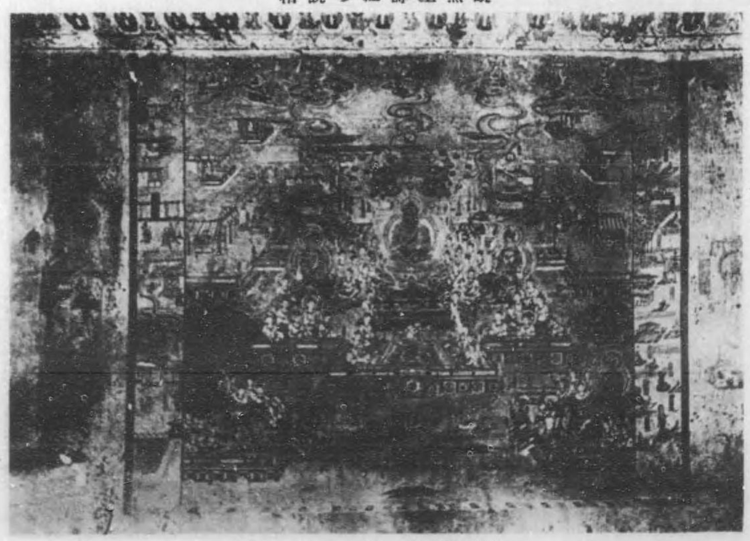
淨土現前

露光量違いの為重複撮影

無量壽經を說給ひし靈鷲山



觀無量壽經の說相

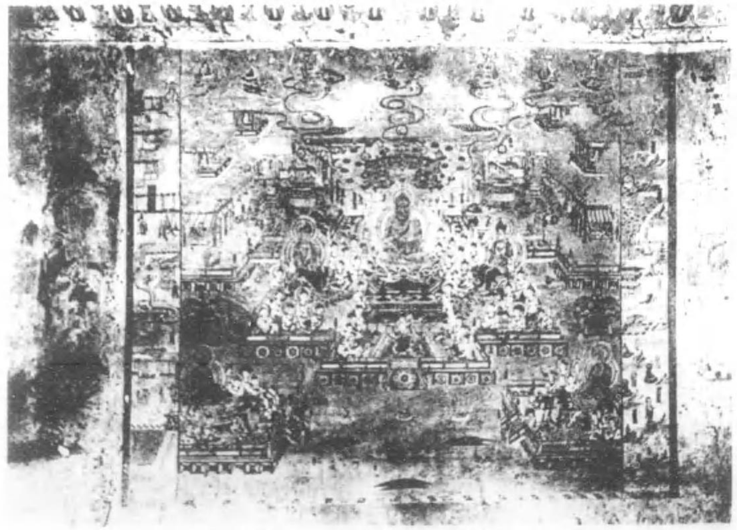


（燉煌千佛洞壁畫）

露光量違いの為重複撮影

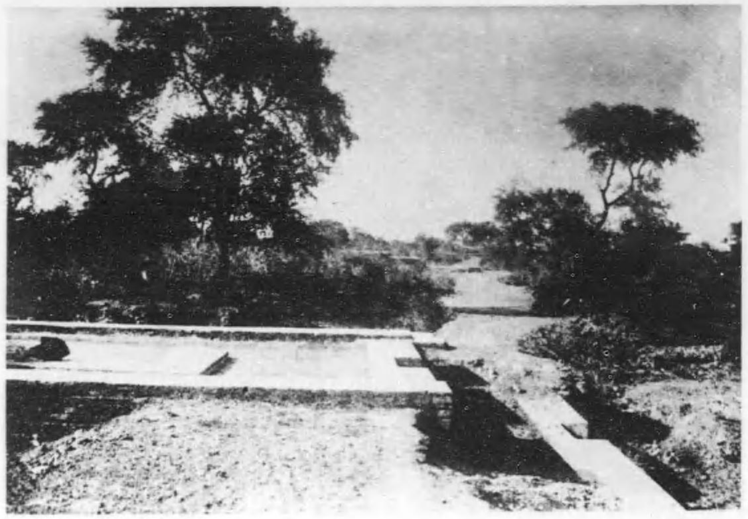
無量壽經を說給ひし靈鷲山

觀無量壽經の說相



(敦煌千佛洞壁畫)

阿彌陀經を說給ひし祇園精舍の遺址



須達長者祇園精舍を經營する圖

（バルフウト塔欄格の浮彫）

緒言

本書、淨土三部經和解は、我が宗粹法話創刊二十五年記念出版の一として發行したので、由來三部經には註釋末疏尠からねど、多くは專門の研究書類にして、往々難解に苦しむ處である、是に依て一般信徒の讀み物として普通智識の程度に於て、最も平易に爾かも信仰的に諒解し易き書を得たしとの、多數信徒の聲に對ゑて其要求希望に應ずべく著述したのである。

是に依て本書は、あまり多くの註釋末疏を參考せず、其最も簡易なる義山上人の隨聞講錄に據て、專ら通俗に和解せむことを期したので、或場合には該講錄を其儘ま述べ書きしたやうな處もある。

さてこそ經文傍訓の如きも差支無き限り、普通漢音を以てして强ひて所謂る『お經讀み』を爲さず、亦た說明和解に於ても成可く議論と考證と、且つ專門語を避けたのである。

けれども著者の不敏なるや、筆路澁滯して其意を盡さず、說明あまり簡短に過ぎて痒き處に手が屆かず、和解に和解を要する如きもの多きは、深く自ら慚愧に堪へず最も遺憾とする處にして、隨て誤謬も亦尠からざるべく、俱に再版の時を俟て補正を期するので、若夫れ本書に依て假令ひ少數にても、三部甚深の妙旨を諒解して、入信念佛する人を得ば著者の本懷是に過ぎぬのである。

本書の發行に就て、總本山門主大僧正の題字を賜はりたる光榮と且つ亦た小野玄妙、藤堂祐範兩師の佛蹟其他寫眞資料を寄せられたる厚意を感謝す。

大正十一年五月一日

著者　卍　翁　梁　定　識

淨土三部經和解目次

佛說無量壽經卷上

淨土正依の三部經……一
宮中講經の濫觴……一
題號の由來……二
飜譯の年代と譯者の傳記……二
耆闍崛山の集會……三
王舍城　耆闍崛山　及び其現況
三十一聖……六
大乘菩薩の來會……一三
十六正士
具諸菩薩無量行願……一六
六波羅蜜　四攝法　四無量心
八相示現生天下天及び託胎……一八
出胎相……一九
佛生地の現況

修學及び聘妃……二一
出家相（見老病死　入山學道）……二三
佛陀伽耶靈蹟……二六
降魔及び成道相……二八
轉法輪相（鹿野園の現況）……二九
入涅槃相（涅槃地の現況）……三五
菩薩の勝德三輪說法……三七
福智の行德（四無畏）……四一
三解脫門……四二
自利の證德……四四
世尊の悅豫……五〇
過去五十三佛……五七
佛の十號……六一
法藏比丘の發心出家……六二
同比丘意志告白の讃佛歌……六三
同比丘の五劫思惟……七三
同四十八願……七六
第一無三惡趣……七七
第二不更惡趣……七八
第三悉皆金色……七八
第四無有好醜……七九
第五宿命智通……七九
第六天眼智通……八〇
第七天耳智通……八一
第八他心智道……八二
第九神境智通……八二
第十速得漏盡……八三
第十一住正定聚……八四
第十二光明無量……八五
第十三壽命無量……八五

第十四聲聞無數……八六
第十五眷屬長壽……八七
第十六無諸不善……八七
第十七諸佛稱揚……八八
第十八念佛往生……八九
第十九來迎引接……九三
第二十係念定生……九四
第廿一三十二相……九五
三十二相の名目
第廿二必至補處……九六
第廿三供養諸佛……九八
第廿四供具如意……九九
第廿五說一切智……九九
第廿六那羅延身……一〇〇
第廿七所須嚴淨……一〇一
第廿八見道場樹……一〇一

第廿九得辨才智……一〇一
第三十智辨無窮……一〇三
第卅一國土清淨……一〇三
第卅二國土嚴飾……一〇四
第卅三觸光柔軟……一〇五
第卅四聞名得忍……一〇六
第卅五女人往生……一〇七
第卅六常修梵行……一〇八
第卅七人天致敬……一〇九
第卅八衣服隨念……一一〇
第卅九受樂無染……一一一
第四十見諸佛土……一一一
第四十一諸根具足……一一三
第四十二住定供佛……一一三
第四十三生尊貴家……一一四
第四十四具足德本……一一四

第四十五住定見佛……一二五
第四十六隨意聞法……一二六
第四十七得不退轉……一二七
第四十八得三法忍……一二七
四誓偈……一二八
大千の感動空中の讃言……一二五
法藏比丘の精進努力……一二七
極樂淨土の實現……一三四
同淨土の七寶莊嚴……一三七
同淨土の不寒不熱……一三九
阿彌陀如來の威神光明……一四一
十二光佛……一四三
光明の利益……一四四
念佛追善……一四五
極樂淨土の七寶樹……一五三
自然の音樂……一五七

道場樹……一五七
瓔珞と寶網　微風徐動無量法音
和雅の音樂……一六一
講堂精舍宮殿樓觀……一六三
八功德水……一六四
水音の說法……一六八
十力無畏　十八不共法
百味飲食……一七五
自然の德風溫凉柔輭……一八四

佛說無量壽經卷下

正定衆……一八九
三輩往生其一上輩……一九二
其二中輩……一九四
八齊戒
其三下輩……一九六
無量菩薩の往生願求……一九九
釋迦牟尼佛及び諸佛の讃歎……二〇〇

觀音勢至二菩薩……二一五
菩薩の自行捨戒忍……二二三
同自行精進禪惠……二二五
同勝德六和敬……二三五
何不力爲善……二四一
易往而無人……二四三
三毒煩惱の一貪欲……二四四
有田憂田有宅憂宅……二四五
無田亦憂無宅亦憂……二四八
三毒煩惱の二瞋恚……二五一
同三愚痴……二五六
生死無常……二五八
邊地往生……二七七
五惡の一殺生罪……二八一
同二偷盜不義……二八八
同三愛慾邪婬……二九七

同四口業の罪……三〇二
同五飲酒と愚痴……三〇九
小微大惡……三一二
尊聖敬善仁慈博愛……三二五
天下和順日月清明……三二二
佛の重誨……三三四
阿難尊者の見佛……三三九
胎生と化生……三四二
佛の五智……三四四
十三佛國菩薩の往生……三五三
念佛大利無上功德……三五七
特留念佛……三六一

佛說觀無量壽經

題號の由來……三六九
飜譯の年代と譯者の傳記……三六九

耆闍崛山の集會……三七〇
大比丘衆千二百五十人　菩薩三萬二千
阿闍世太子の暴惡……三七一
惡友調達　父王頻婆娑羅王の幽閉
韋提希夫人飲食を大王に供す……三七二
頻婆娑羅王の受戒聞法……三七三
阿闍世の暴惡母を殺さんとす……三七五
月光及び耆婆の諫言……三七六
阿闍世太子母を幽閉す……三七七
韋提希夫人阿難目蓮の來教を請ふ……九七九
釋迦牟尼佛の來化……三八〇
日蓮侍左阿難在右　護世諸天在虚空中
韋提希夫人救ひの道を求む……三八一
世尊の放光金臺を現ず……三八三
韋提希夫人極樂淨土を欣求す……三八五
世尊の微笑と大王の得益……三八七
自然增進成阿那含
阿彌陀佛此を去ること遠からず……三八八
三福の淨業……三八九
世福　戒福　行福
三世諸佛淨業正因……三九〇
說淸淨業……三九一
諸佛如來に異方便有り……三九二
定善十三觀の一日想觀……三九五
其二水想觀……三九七
苦空無常無我の音
其三地想觀……三九九
其四寶樹觀……四〇二
其五寶池觀……四〇四
其六　樓觀……四〇九
其七華坐觀……四一三
無量壽佛住立空中　觀音勢至侍立左右
其八像想觀……四一四
是心作佛　是心是佛
其九眞身觀……四二一
光明遍照十方世界　念佛衆生攝取不捨　佛心とは大慈悲是なり
……四二八

其十觀音觀……四三四
千幅輪相
其十一勢至觀……四四一
其十二普想觀……四四七
其十三雜想觀……四五〇
散善三輩の上輩上品上生……四五四
一者至誠心　二者深心　三者回向發願心
同二上品中生……四六〇
同三上品下生……四六五
同中輩中品上生……四六八
五戒　八戒齋　四諦　三明六通
同二中品中生……四七一
沙彌戒　具足戒
同三中品下生……四七四
同下輩下品上生……四七五
大乘十二部經首題名字
同二下品中生……四七九
僧祇物　現前僧物　不淨說法
同三下品下生……四八四
令聲不絕具足十念

韋提希夫人及び侍女の聞法得益……四八八
經名自題……四八九
念佛する者は是れ人中の分陀利華なり……四九二
觀音勢至爲其勝友　當坐道場生諸佛家
念佛附屬……四九三
耆闍崛山の複說……四九六

佛說阿彌陀經

題號の由來……四九九
飜譯の年代と譯者の傳記……四九九
祇園精舍の集會……五〇一
祇園精舍の建立緣起　舍衞城と祇園精舍の現況
長老十六羅漢……五〇四
菩薩の來會……五〇六
極樂淨土と阿彌陀佛の實在……五〇七
今現在說法
極樂淨土の名義其一……五〇八

同其二……五〇九
極樂淨土の功德莊嚴其一……五一〇
七寶池　八功德水
同其二……五一三
同其三……五一四
種々奇妙の鳥　五根五力七菩提分八聖道分
阿彌陀如來の名義……五一八
光明無量　壽命無量
極樂淨土の功德莊嚴其四……五一九
阿鞞跋致と一生補處……五二〇
諸上善人俱會一處……五二二
少善根福德因緣……五二三
執持名號……五二六
多善根多福德
我見是利……五二七
六方諸佛の證誠東方世界……五二九
出廣長舌相　說誠實言
同南方世界……五三一
同西方世界……五三三
同北方世界……五三四
同下方世界……五三七
同上方世界……五三九
一切諸佛所護念經……五四一
應當發願願生彼國……五四四
一切世間難信の法……
劫濁　見濁　煩惱濁　衆生濁　命濁
歡喜信受作禮而去……

宋西園寺藏

佛說無量壽經和解

正く往生淨土を明すの敎とは、三經一論是なり。三經とは一に無量壽經、二に觀無量壽經、三に阿彌陀經なり。或は此三經を指して淨土三部經と號す。唯是れ彌陀の三部なるが故に淨土三部經と名く。彌陀の三部は是れ淨土正依の經なり。

〔選擇本願念佛集〕

佛說無量壽經和解

淨土正依の三部經

○

佛說無量壽經上下二卷は、佛說觀無量壽經一卷、佛說阿彌陀經一卷と俱に、淨土三部經と總稱する其一にして、釋迦牟尼佛一代の說敎を遺された一切經七千餘卷の中には、阿彌陀如來の慈悲誓願や念佛功德やを讃へられたのが多い、けれども其れを主要として說かれたのが此の三部經で有るから、是を淨土敎の正依として此の無量壽經を以て根本最初としてある。

宮中講經の濫觴

無量壽經には多くの漢譯を傳へて在れども、正依の經典としては康僧鎧三藏の飜譯に係るものを依用ので、爾も其經典は我朝に於ける宮中講經の濫觴にして、舒明天皇の十二年五月五日惠穩法師に勅して宮中に於て講ぜしめられ、次で　孝德天皇の白雉三年四月三日同法師をして再び之を講ぜしめられたが、此時には沙門惠資を論議者とし、其他の沙門一千人を聽衆として、六日間の講讃が續けられたと日本書紀にも記載て在る。

題號の由來

佛說無量壽經卷上

【和解】 此の經典の題號にて、佛說とは釋迦牟尼佛の直說なりとの義にして、無量壽經とは梵語の阿彌陀を飜譯すれば壽命無量と光明無量との二義有りとしてある中で、此の經典にては其れを無量壽佛と稱し、此の經典の主要として其の無量壽佛なる阿彌陀如來の、發心修行及び慈悲誓願の事などが說かれて在るので、斯く題號とせられたのである。

亦此の無量壽經は上下二卷の經典なるに因て雙卷經とも號し、亦た大無量壽經といふのを略して大經とも稱せらる。

飜譯の年代と譯者の傳記

曹魏天竺三藏康僧鎧譯

【和解】 此の經典飜譯者の名稱にて、曹魏とは支那後漢の後に起りし國號にして、當時支那には魏蜀吳の三國が在つたが其中で魏を以て正統として、其帝姓が曹氏であるから曹魏と稱するので天竺三藏とは其の曹魏の時代に天竺卽ち印度より來りし三藏との意味にて、三藏とは經律論の三に通達して學德優秀なる高僧の稱號にて、康僧鎧は其人名である。

譯者康僧鎧三藏は印度の人にて、傳道の爲めに支那に來り、曹魏の時代洛陽の白馬寺に於て、此の經典と郁伽長者所問經とを飜譯した、時に嘉平四年壬申にして、我朝の神功皇

后の攝政五十二年に當るのである。

耆闍崛山の集會

我聞如是一時佛住王舍城耆闍崛山中

【訓讀】 我聞く是の如きを、一時、佛王舍城の耆闍崛山の中に住して

【句義】 我聞く是の如きとは經典を傳持し佛弟子阿難尊者の言辭にして、佛とは釋迦牟尼佛、王舍城は印度摩訶陀國の都城、耆闍崛山は其都城の東北に在る靈鷲山を云。

【和解】 是より此の經典の本文にて、釋迦牟尼佛が涅槃に入給ふた後、多くの佛弟子たる諸大羅漢が集會て、一代五十餘年間の說敎を分類編輯せられた、それを結集と名け、第一第二と數回それが催ふされて、現在許多の經典が遺されたが、其結集の時最も佛に親近せし阿難尊者が坐に登りて、釋迦牟尼佛當時の說敎を在りし昔の其儘に複說した、是を聽きたる諸大羅漢は、佛か阿難か、阿難か佛か、釋迦牟尼佛再び茲に出ませしかと想ふばかりに感嘆して、寸分も佛說に違はざる事を證明記錄された、此複說の劈頭に阿難尊者の發したのが、我聞如是亦は如是我聞の言で有つて、それは佛說たる事を證せん爲めに演べたので、尊者曾て釋迦牟尼佛入涅槃の時に、經典の首には如何なる言を置く可きかを問ひて、

それには如是我聞の四字を置けとの佛答を得て居たから、扨こそ斯くは演べたので、是に依つて經典の首に大抵此の四字が有るのである。

王舍城

王舍城は梵語の矩奢揭羅補羅城の漢譯にて、それを王舍城と譯したに就ては、二三の異說が有つて何とも決し難い、けれども其一說に依れば、摩訶陀國當時の國王を頻婆娑羅王と云ひ、上茅宮を都城として居たが、民家度々火を失して災害亦た尠からぬ、それで防火の意味を以て布令を發し、若し火災を發す者有らば其罰として寒林に遷すといふ事を宣言した、寒林とは死屍を棄る塲所で不祥の地として忌嫌はるゝ土地である、其後生憎く火を失したのが國王の宮中で有つたので、頻婆娑羅王は布告の責任を重じ、我其罰を受けんと て、彼の忌はしき寒林に居を遷した、すると之を知つたのが隣國の國王吠舍釐王で、豫て頻婆娑羅王を攻めんとして居たので有るから、好機逸す可からずとして俄に師を催して寒林を襲はんとした、その情報に接した上茅宮の城民等は斯く憐み深く義理堅き國王をば、寒林如き土地に於て攻亡させてはならぬと、我も吾もと家を遷し日ならずして要害堅固なる城邑とした、卽ち國王先づ舍を建たと云ふ義を以て王舍城と名けられたのである。

耆闍崛山

耆闍崛山は山峰の形狀が鷲に似て有るとて、漢譯して靈鷲山とも鷲蜂とも稱し、王舍城の東北に當り支那里數にして十四五里の所に在り、釋迦牟尼佛一代多くは此山にて說敎し給ふたので、當無量壽經は卽ち此山に在しての所說にして、觀無量壽經も亦た此山にて複說された、斯く淨土敎に因緣有る靈鷲山や王舍城は、現今如何なる有樣であるか、最近印度佛蹟巡禮者の紀行に依れば左の如く記してある。

王舍城及び耆闍崛山の現況

輕便鐵道王舍城停車塲の在る所は、佛在世頻婆娑羅王の築ける新王舍城の城內で、停車塲と云つても村落から隔つた原の中の小さな一軒家である、王舍新城の城壁は尙殘つて在れども、塲內は唯だ野草の離々たるのみで、北方を望めば城外に村落が在り、南を觀れば上茅宮城の北廓、俗稱イプラギリ、ヴイパラギリの兩山が東より西に連り、兩山の接する所峽間自然の關門を爲してあるのが、舊城卽ち上茅宮城の北門にして、外城の周圍三十餘哩に亙るといふ。

靈鷲山は海拔約一千呎、上茅宮城々址より觀て高さ八百呎を出でず、其高さに於て必ずしも周圍の丘陵に對して群を拔くものでは無い、山腹斜に一直線の道が有る、是ぞ佛在世に頻婆娑羅王の造りし石階で、其中段と上段とに直徑一間半も有らうと思はるゝ赤煉瓦の丸き卒堵波の跡がある、是こそ往年大谷光瑞師も指摘された退凡下乘の塔址に相違無い、頻婆娑羅王の造道は山の八合目あたりで絕えて居て、其右手に小谿を隔て巨岩參差として屹だつて在るが、王の造道が此邊で絕えてあるから見て、或は此巨岩の邊

りが世尊説法の所では有るまいかと思はれる、山頂より展望すれば北方摩揭陀の平野は眼下に展開せられ、王舍新城の址は此山の西に連るラトナギリより北に突出たヴイプラギリの蔭に隱れて見る事が出來ぬけれども、山脈一起一伏して殆ど同じ高さを保つて東に走り、一面灌木の綠を布た上茅城址は手に取る如く、其背後に高きウダヤギリの山を越えて南方遙に平原の霞に包まれて橫はれるを看るのである。『卷頭寫眞參照』

與大比丘衆萬二千人俱一切大聖神通已達

【訓讀】 大比丘衆、萬二千人と俱き、一切の大聖神通已に達せり

【句義】 大比丘とは羅漢果といふ證を得た佛弟子一切大聖神通已達とは神通自在なる大聖者なりとの義。

【和解】 此時靈鷲山に集會せるは多くの人數で有つたが、爾かも證を得て神通に達し、大聖者と呼ばるゝ比丘が一萬二千人有つた、但し一萬二千人とは其大數で元より限定した數では無い。

其名曰尊者了本際尊者正願尊者正語尊者大號尊者仁賢

【訓讀】 其名を、尊者了本際、尊者正願、尊者正語、尊者大號、尊者仁賢。

【和解】 尊者とは神通已に達せる大聖尊稱にて、神通已に達せる大聖尊者の集會が一萬二千人と云ふ程の多數で有つたが、其中で上首たるのが以下三十一人にて、了本際とは漢譯にして梵名を阿若憍陳如と云ひ、一切諸法の本性を了知との義に依つて知本際とも譯して有て、釋迦牟尼佛出家の當時次の四人と俱に入山苦行せし人で成道最初の佛弟子である、正願は威儀第一を以て稱せられ、其梵名には異說が有て阿濕婆恃亦は跋提とも云ひ、正語は口の四過無きを以て斯く譯されたが梵名は婆沙波である、大號の梵名は摩訶男と云ひ、美名普く聞ふるに依つて大名とも譯せられ、仁賢は跋提梨迦にて小賢とも譯してある以上を五比丘と稱し了本際と俱に鹿野園に於て釋迦牟尼佛成道最初の敎化を受けて證果を得たる佛弟子である。

尊者離垢尊者名聞尊者善實尊者具足尊者牛王

【訓讀】 尊者離垢、尊者名聞、尊者善實、尊者具足、尊者牛王。

【和解】 離垢の梵名は輪提陀亦は毘摩羅と云ひ、寺舍を掃除せし功德に依て心の塵垢を離れたりとて淨除とも譯せられ、名聞の譯義は未詳なれども梵名を夜耶と號し、死亡婦人

に對して不淨觀を修し證果を得たとの一說がある、善實の名義も亦未詳で、梵名を凡耆亦は須菩提とも稱し、佛塔を供養せるに依て常に人間に生じ、遂に羅漢果を得た其內實の德を以て名を彰すともしてある、具足も梵名未詳にして或は樹提なりとも云ひ、受戒の功德を具備せるに因て名を得たとも傳へてある、牛王は牛主亦は牛呵とも稱し、梵名は憍梵波提にして過去世に牛となりて人の勞作を助けたるが、其餘習に依て證果を得た後にも尙ほ牛の呵が如き癖が有て誹謗する者が多い、其誹謗を避けんが爲に釋迦牟尼佛の命令で、常に忉利天上に在たと云ふ。

尊者優樓頻贏迦葉尊者伽耶迦葉尊者那提迦葉尊者摩訶迦葉

【訓讀】 尊者優棲頻贏迦葉、尊者伽耶迦葉、尊者那提迦葉、尊者摩訶迦葉。

【和解】 釋迦牟尼佛當時の印度には豪族として迦葉姓が多かつたが、其中で三人兄弟が有て長兄の迦葉は尼連禪河の上流優樓頻贏村に住して五百人の弟子を有して居た、それが優樓頻贏迦葉にて、伽耶迦葉は次兄にして禪河の中流伽耶村に住して三百人の弟子を有し

末弟の那提迦葉は下流の那提村に在て二百人の弟子を有し、各火神に事へる外道であつたが、釋迦牟尼佛成道の最初鹿野園にて五比丘を敎化し、次に此三迦葉を敎化して弟子とされたと傳へてある、摩訶迦葉は王舍城の附近摩訶裟羅陀村の富豪尼拘盧陀竭波の子にして、母が庭園を散步中畢鉢羅樹の蔭で產れたので畢鉢羅耶那を譯して樹下生と名け、亦面容端正にして金像の如くなりとて飲光とも譯してある、師を求めて諸國を巡歷中王舍城外那羅村の多子塔にて釋迦牟尼佛に會見し、四諦十二因緣の說敎を聽て證悟を得た、佛弟子中の重鎭であるから摩訶卽ち大迦葉と稱するのである。

尊者舍利弗尊者大目犍連尊者劫賓那尊者大住尊者大淨志

【訓讀】 尊者舍利弗、尊者大目犍連、尊者劫賓那、尊者大住、尊者大淨志。

【和解】 舍利弗は舍利子とも稱し、其母の名が舍利といふに因て、其儘舍利の子として呼ばれたので、佛弟子中に於ける智慧第一の稱が有た、大目犍連は略して目連と云ひ、之を譯して萊茯根と云說と愛胡豆と云說とがある、舍利弗の親友にして神通第一を以て稱せ

られた、最も孝心深き人で釋迦牟尼佛は其母の苦を救はん爲めに盂蘭盆經を說給ふたのが現今毎年七月に行はるゝ盆會の濫觴で、後に尼犍子外道の毒手に罹つて害せられた佛弟子中の殉教者である、劫賓那は漢譯して房宿と云ひ、星に禱て得た子であるからとも、亦は出家の當時釋迦牟尼佛と同宿して證果を得たので此名が有るとも云、大住の梵名は迦旃延にて、文飾亦は思勝とも飜譯せられ能文にして議論に長じ、其母良人に死別の後此兒を愛して家に住り、肯て再び嫁せざりしに因て、斯く大住とも呼ばるゝ、大淨志は淸白の法を志して他に所樂無く、閑居を好みて修道せりとて名を得たが、梵名は賴吒和羅なりとも云。

尊者摩訶周那尊者滿願子尊者離障尊者流灌尊者堅伏尊者面王

【訓讀】尊者摩訶周那、尊者滿願子、尊者離障、尊者流灌、尊者堅伏、尊者面王

【和解】摩訶周那には兄弟二人有て兄を般特と云ひ路邊生と譯し、弟を周利般特と稱し繼道と譯してある、母は長者の女にして路傍に於て兄を產し、繼ぎて弟も路邊に生れたから斯く譯せられたので、弟の方は有名なる愚人で有て三月尙ほ一偈を記憶する事能は無つたと傳へてあるが、此處に上首として列せられたは、此兄弟二人の中何れなりや決し難い、滿願子は辯舌を以て稱せられた富樓那にして、其父滿江の梵天に禱りて得た子で有るからとも、亦た其母が寶を盛滿たる器を懷中に入ると夢て姙しに因て名けられたとも云ふ、離障の梵名は阿那律にて亦は阿菟樓駄とも云ひ、天眼第一を以て稱せられたが、其天眼に障礙無き義に因て離障と譯せられた、流灌の梵名は孫達羅難陀にして釋迦牟尼佛異腹の親弟であるが、孫達羅とは妻の名にて、他に牧牛難陀と稱するのが有るから、それに對して妻の名を冠したので、亦た流灌と譯せられたのは、過去世に於て浴室を建て諸人に施せし功德を以て、面貌端正なるを得たからである、堅伏は樹提であるとも亦は優婆離なりとも云てあるが、精進堅固にして諸の惑障を降伏せる德に因て名を得た、面王は善容とも云ひ、天冠の相とて貴人の相貌有るに因て名けられ、其梵名を薄拘羅と稱し精進第一の譽があつた。

尊者異乘尊者仁性尊者嘉樂尊者善來尊者羅云尊者阿難皆如斯等上首者也

【訓讀】 尊者異乘、尊者仁性、尊者嘉樂、尊者善來、尊者羅云、尊者阿難と曰ひ、皆斯の如き等の上首たる者なり。

【和解】 異乘は戒德が優れて行力超異せりとの義に依て名けられたが、梵名は未詳である、仁性の梵名は尸利羅と云ひ亦は須菩提と云説もある、貧民救濟の善業に因て名を得た嘉樂は牧牛難陀と稱し善歡喜と譯せられたが、それを嘉樂と呼ぶのは歡喜の意味に於ける別名である、善來は莎訶陀にして佛法に來歸すとの義に因り、羅云は普通に云ふ羅睺羅にして邪輸多羅妃の產む所で釋迦牟尼佛の嫡子である、それを羅云といふのは覆障の意味で、母の胎内に在る事六年の間覆障られたと云義を以て名けられ、阿難は釋迦牟尼佛の從弟にして生々世々、忍辱の行を修し、容貌端正なるに因て人見て歡喜し、自己も亦た忍辱なるを以て常に歡喜すとの義に因て歡喜亦は慶喜とも譯して有る、二十餘年の久しき常に釋迦牟尼佛に近侍して多聞第一を以て稱せられ、許多の經典は此人の傳持に依て結集られたが、現今多く行はるゝ施餓鬼の法も亦た此人の致請に因て說かれたのである。

以上三十一人は神通已に達せる大聖者として、多數の羅漢比丘中の上首であるから、是を三十一聖とも稱してある。

又與二大乘衆菩薩一俱

【訓讀】 又大乘の衆〳〵の菩薩と俱にき。

【句義】 大乘とは小乘に對して云ひ、衆菩薩とは多數の菩薩を云。

【和解】 前の三十一人及び多數の比丘衆は神通已に達せる大聖なれども、菩薩に比ぶれば尙ほ法位の劣れる小乘の聲聞と云ふので有て、それより高く優れし法位を大乘の菩薩と稱し、彼を江河に泛べる舟筏に比すれば是は大海を渡る巨船にして、菩薩とは菩提薩埵を略せる梵語で、覺有情とも道衆生とも譯してあるが、其菩薩も亦た多く集會されたる列名左の如くである。

普賢菩薩妙德菩薩慈氏菩薩等此賢劫中一切菩薩

【訓讀】 普賢菩薩、妙德菩薩、慈氏菩薩等の、此賢劫の中の一切の菩薩となり。

【和解】 普賢とは其德普遍なるが故に名けられ、妙德とは文殊菩薩にして、慈氏とは彌勒菩薩である、賢劫とは千佛出世ある現在世にして、過去世千佛の時代を莊嚴劫と云ひ、未來世千佛の時代を星宿劫と稱するので、一切菩薩とは普賢妙德等の菩薩を初めとして現

在賢劫中の一切の菩薩が來集されたのである。

又賢護等十六正士

【訓讀】又賢護等の十六正士あり。

【和解】賢護とは梵語の跋陀波羅菩薩にて善守とも云ひ、十六正士とは其賢護菩薩等の十六菩薩にして、正士は菩薩の別稱にて大士とも云ふ、當經には賢護菩薩の外は略してあれども思益經に載せれたる列名左の如く、跋陀波羅、寶積、星德、帝天、水天、善力、大意、殊勝意、增意、善發意、不虛見、不休息、不少意、導師、日藏、持地の各菩薩である。

善思議菩薩信慧菩薩空無菩薩神通華菩薩光英菩薩慧上菩薩智幢菩薩

【訓讀】善思議菩薩、信慧菩薩、空無菩薩、神通華菩薩、光英菩薩、慧上菩薩、智幢菩薩。

【和解】善思議とは正き智慧に達して爾かも佛の智德を信ずる故に名けられ、信慧とは智慧信心有りて永く疑網を斷つが故に、空無とは眞空の理を證て更に妄想煩惱の塵勞無しとの義に因り、神通華とは神通自在にして爾かも其の精華を得たりと云義、光英とは福德

智慧の光り勝れたるに因り、慧上とは般若の靈智超出たる意味にて、智幢とは道智高く現はるゝ事幢の如く諸の邪魔を摧破との義に因て名を得られた。

寂根菩薩願慧菩薩香象菩薩寶英菩薩中住菩薩制行菩薩解脫菩薩

【訓讀】寂根菩薩、願慧菩薩、香象菩薩、寶英菩薩、中住菩薩、制行菩薩、解脫菩薩。

【和解】寂根とは諸根清淨なりとの義に因り、願慧とは悲願廣大にして普く有緣を照すが故に、香象とは法海の底を極めて徹底する事象の如くなりとの義に因り、寶英とは功德の聖財を以て身心を莊嚴するが故に、中住とは常に中道に住して有無の二に執着無き義に因り、制行とは諸惡を制止して諸善を嚴行するが故に、解脫とは諸の結縛を滅除して自利々他俱に自在なりとの義に因て名を得られたのである。

以上十四菩薩の得名意義は、纔に其一端を表顯たに過ぬので、唯是だけに限定た意味にはあらず、此他各無量の勝德を圓滿具備されて在るのである。

皆遵普賢大士之德

【訓讀】 皆普賢大士の德に遵へり

【和解】 普賢大士とは普賢菩薩にして、列擧されてある多數菩薩の上首として、多數の菩薩は各勝れし德を有すれども、爾りとて尙は上首普賢の德に隨順との意味で、普賢の德とは左記の十種の行願にして、一禮敬諸佛、二稱讃如來、三廣修供養、四懺悔業障、五隨喜功德、六請轉法輪、七請佛住世、八常隨佛學、九恒順衆生、十普皆廻向の行と願とを圓滿に具足せる德を普賢行願と稱して、多數の菩薩は皆な其德に遵はるゝのである。

具諸菩薩無量行願一安住一切功德之法一

【訓讀】 諸の菩薩の無量の行願を具へて、一切功德の法に安住せり。

【和解】 是より以下は各其菩薩の德を讃へられたので、無量行願とは菩薩に六波羅密と四攝との行があり、亦四無量心といふ願が有つて之を菩薩の自行內證の德と云ひ、其功德を完備せるを一切功德の法と稱し、其一切功德に缺けたる處無きを安住せりと云ふ、六波羅密とは六度の行とも稱し、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六にして、すべての布施の行を檀那波羅密と云ひ、あらゆる戒行を持つのを尸羅波羅密、如何なる事にも忍耐

の心あるを驃提波羅密、苦に堪へ勞を厭はず倦む事無くして退かぬを毘梨耶波羅密、一心安定して動かされざるを禪那波羅密、正しき智慧を有して迷ひ無きを般若波羅密と云ふので、波羅密とは梵語にして涅槃寂靜の彼岸に度るの行なりとて是を六度と譯してある、四攝と云ふのは布施、愛語、利行、同事の四で、布施とは身も命も財も法も惜まずして施す事檀波羅密に異らず、愛語とは都ての愛すべき溫和き言語を以て人に接し、利行とは献身的に他を利益する行業を云ひ、同事とは自他の差別を爲さずして社會公共の事業に盡す、所謂同情心犧牲心と云ふよりも、より以上に廣大なる意味を以て、一切衆生を攝化利生の事である、四無量心とは慈悲喜捨の四にして、慈とは樂を與へ、悲は苦みを救ふ意味で、喜とは此の拔苦與樂を以て他を歡喜せしめ、自己も亦喜悅する義、捨とは親疎遠近善惡好醜の差別を爲さず、一切平等に功德を施し得させること無量無邊にして、更に盡ざる義に因つて無量心と名けられた、是が菩薩の行と願とで有つて、其無量一切の功德を完備せらるゝのである。

遊歩十方一行一權方便一入一佛法藏一究竟彼岸一於一無量世界一現一成等覺一

【訓讀】 十方に遊歩して權方便を行じ、佛法藏に入て彼岸を究竟し、無量の世界に於て等覺を成ずることを現ず。

【句義】 遊歩十方とは自由に十方世界に至る意味にて、權方便とは巧妙なる手段方法、佛法藏とは佛法の眞理、彼岸とは涅槃の意義、等覺とは成等正覺の意味で佛果を證する義である。

【和解】 無量行願の德を完備された菩薩は、其德を以て他を化益せんが爲に、あらゆる十方の世界に到ること、自由自在にして吾等が遊歩を爲すが如く、爾も權方便なる便宜と方法と最も巧妙なる手段とを以て、其世界に有る一切衆生を敎化せられ、遂には佛法藏の眞理に達し常樂涅槃の妙果を究めて、等覺を成ずるとて佛の位地に進まるゝ、其間の年數は三阿僧祇百大劫と云ふ程なる生々世々を經て、無量の修行功德を積まねばならぬのである。

處兜率天弘宣正法捨彼天宮降神母胎

【訓讀】 兜率天に處して正法を弘宣し、彼の天宮を捨て神を母胎に降し。

【句義】 兜率天とは覩史多天とも云ひ知足亦は喜足とも譯してある、天宮とは兜率天中の高幢天宮を云ふ。

【和解】 是より以下は諸の菩薩が等覺を成じて佛位に進み、一切衆生を敎化せんが爲めに、世に出らるゝ化儀に八相示現と云ふ事が有つて、それをば現在の敎主である釋迦牟尼佛の出現に就て說かれたので、諸佛の出現には大抵同一の軌道を踏まるゝ、其化儀を八相示現と稱し、生天下天、託胎、出胎、出家、降魔、成道、轉法輪、入涅槃の八としてあるのが普通で、此無量壽經には尙其他に修學と聘妃との二相が有る。

さても前佛涅槃に入給ふた後、其次の佛世尊として出現さるべき候補者を補處の菩薩と稱するので、我釋迦牟尼佛も既に無量行願多劫の功を積み德を累ねて、當に出現せらるべき卽ち補處の菩薩として、兜率天の高幢宮にて諸の菩薩の爲に正法を弘宣て在つたが、今や出現の時節到來せるを觀て、彼の天宮を捨て淨飯大王を父とし、摩耶夫人を母として神を其母胎に降し給ふた、是を生天下天及び託胎の相とするのである。

從右脇生現行七步光明顯曜普照十方無量佛土六種震動
擧聲自稱吾當於世爲無上尊釋梵奉侍天人歸仰

【訓讀】右脇より生じて現に行こと七歩したまふに、光明顯曜て十方を照し無量の佛土六種に震動せり、聲を擧て自稱したまはく吾當に世に於て無上尊と爲るべしと、釋梵奉侍し天人歸仰す。

【句義】六種震動は種々なる震動、無上尊は當に得らるべき佛位、釋梵は釋提桓因と大梵天王等を云ふ。

【和解】此一段は出胎相にて、時に佛母摩耶夫人は其父善覺長者の邸に在つたので、四月八日の曉に嵐毘尼園と名けられた長者の庭園に徜徉ながら、無憂樹の華を採らんとて右手を擧たる其脇腹より何の苦痛も有ること無くして、いと安らかに太子を出產給ふたが此太子こそ當來の佛世尊なる釋迦牟尼佛にて、行くこと七歩を現し給へば光明普く顯曜わたりて、無量の佛土震動しつ、爾も太子は聲を擧て、吾當に世に於て無上尊と爲るべしとて、當來に成佛せらるべき其宣言を爲し給へば、此時四大天王等は天の繒にて太子の身を受け寶机の上に置奉り、釋提桓因は寶蓋を執り梵天王は白拂を持つて左右に守護し、許多の龍神は一溫一凉淸淨なる水を降して太子の身を灌ぎ、各く歸仰の誠意を表した、斯かる奇瑞の報せらるゝや、父大王は云ふにも及ばず卿相百官相師梵士の輩までも、先を爭ひ馳集りて皆萬歲を祝しつゝ、太子を名けて悉達と號した、悉達とは吉財の意味で此時國內に種々吉祥の瑞相が現はれたに因つて、それをば祝福されたのであつた。此誕生の月日をば四月八日と傳へてあるのは、最も多き普通說で、三月八日、二月八日亦は三月十五日等の異說も尠からぬのである。

佛生地の現況

佛生地なる嵐毘尼園は中印度の迦毘羅國で、初說法の鹿野園、入涅槃地の拘尸那城、成道處なる佛陀伽耶と俱に、往昔は四大塔處と呼ばれた靈蹟なれども、現今では種々なる異說が有つて尙未定の佛蹟である、最近佛蹟巡禮者の紀行に依つても、當時半獨立國を爲し居る子バル國の領內で、タウリハワと云ふ子バル官憲の所在地より西北約二哩の處に、チロラコートと呼ぶ廢址が在る、それが劫比羅伐卒堵波の跡で、それより東南十四哩の處が嵐毘尼園に當ると云ふ說と、高楠博士や河口慧海師等の說にては、ショウラットガンジの西方二哩の處にバリガワと稱して赤煉瓦の遺址有る處が其れなりと云ふのと、尙二三の說が有つて未だ何とも決定されぬと記してある。

修學聘妃相

示二現算計文藝射御博綜道術貫二練群籍一遊二於後園一講二武試藝一現レ處二宮中色味之間一

【訓讀】 算計、文藝、射御を示現し、道術を博綜し群籍を貫練し後園に遊びて武を講じ藝を試み、宮中色味の間に處することを現す

【句義】 算計は數理算術、文藝は文學と禮樂、射御は射術と馬術、道術は當時印度の仙術を云ふ。

【和解】 此一段は修學と聘妃の相にして、生れながらにして聰明なる悉達太子は、夙に禮樂書數等の所謂六藝に通達して、射術馬術は云ふ迄も無く仙道世俗あまたの書籍を讀破して各其奥義を究められたが、十七歳の時には父大王の命に依つて耶輸多羅妃を迎へんとて、常に講武の場所として有る迦毘羅城の後園で、提婆達多等と弓を試み力を角べて更に勝つ者無かつたので、遂に妃をば娶り給ふた、傳ふる處に依れば耶輸多羅は第二の妃で、此他に尚ほ第一の夫人と第三の夫人が有つたと云へば、宮中色味の間に在つて翠帳紅閨歌舞管絃の遊宴に、榮耀榮華の歡樂に耽り給ふと見えたのである、けれども太子は鵝鴨の水に入つて水に溺れぬ其の如くに、毫も愛執の念慮無きのみならず、樂は苦の因さながらに却て之を悲劇と觀て、如何にして此悲劇の夢より覺めんかと、それのみ思案に暮れて居られた。

見老病死悟世非常棄國財位入山學道

【訓讀】 老病死を見て世の非常を悟り、國と財と位とを棄て、山に入て道を學す。

【和解】 是よりは出家相で、父大王や近侍の臣等は思案に沈む太子を慰めんとて、城外の出遊を勸めて某日迦毘羅の東門より車を出し奉りて、郊外指して往く道にて生憎老人を見給ふたので、其老衰の態に驚き、次に南門を出ては病人を見て苦痛せるを憐み、其亦次には西門を出て死人の家を過ぎ、眷屬別離の悲哀を見ては、あはれ父王近臣の心遣ひも水の泡にて、宮中榮華の歡樂さへ夢中の悲劇と觀せる太子は、茲に世間の無常を悟り、そも如何にして自も他も此の老病死苦を脱せんかと、尚も悲愁を增すのみで有つたが、扨亦次には北門より出て出家沙門の姿を見て、解脱の道は唯一つ出家學道の外無しと堅くも決心されたので、國と財と登るべき王位も棄て夜にまぎれて、密に宮中を出給ふたは、年紀十九歳の時にして四月七日の夜半で有つたが、附隨へる者とては馬丁車匿の唯一人にて、犍陟と名けられたる白馬に跨り、駒の足搔を急がせて檀特山の麓なる苦行林へと着き給ふた、此出家の年月を十九歳としたのは普通の説で、二十九歳と傳へたのも、二月八日、三

月八日亦は三月十五日と云ふ説も有る。

服乘白馬寶冠瓔珞遣之令還捨珍妙衣而著法服鬋除鬚髮端坐樹下勤苦六年行如所應

【訓讀】 服乘の白馬寶冠瓔珞、之を遣して還さしめ、珍妙衣を捨て法服を著し、鬚髮を鬋除し、樹下に端坐して勤苦すること六年なり、行所應に如ふ。

【和解】 苦行林へと着き給ふた太子は、金銀珠玉を以て飾られたる、寶冠瓔珞珍妙の衣服を解きて車匿に託し、父大王や養母の憍曇彌夫人や且つ耶輸多羅妃への形身として贈り還し、自ら佩刀を執つて鬢髮を鬋除し、獵師が捧げる法服を着して、茲に日頃の煩悶が解決近くなりしを歡び、前途に輝く光明を認めたりしが如くにて、馬にも馬丁にも別れを告げ、尙ほ山深くも分入りて、或は阿蘭、迦蘭等の仙人に仕へ、或は一麻一米の勤苦を積むこと六年間、爾も苦行は必ずしも正法の本意ならず、元是れ外道仙人の法では有るが、それすら辭せず忍ばれたは、頓て正行に到るべき前提としての方便で有るから、之を行所應に如ふと云ふのである。

現五濁刹隨順群生示有塵垢沐浴金流天按樹枝得攀出池

【訓讀】 五濁の刹に現じて、群生に隨順をもつて、塵垢有ることを示して金流に沐浴す、天樹枝を按じて攀て池を出ることを得せしむ

【句義】 五濁の刹とは濁り多き國土と云ふ意味、群生は一切衆生と同意義にて、金流は印度の尼連禪河にて多く黃金を產出せるに因つて此名有りと云ふ。

【和解】 是より以下は成道相で、勤苦六年の苦行は、たしかに身心の鍛錬では有つたけれども、未だ解脫の道では無いからとて、疲瘦憔悴たる身を山より下りて尼連禪河の金流に浴して。濁る浮世の群生なる身心の塵垢を洗はんとせられたが、衰弱疲勞の極度なれば、あはれ水中に溺れんと爲し給ふたを、阿斯那樹神の助けに因り、其樹の枝に取すがりて、やをら水中より出る事を得られた。

靈禽翼從往詣道場吉祥感徵表章功祚哀受施艸敷佛樹下跏趺而坐

【訓讀】 靈禽翼從ひて道場に往詣り、吉祥の感徵あつて功祚を表章し、哀で施艸を受け佛樹の下に敷きて跏趺して坐す。

【句義】 靈鷲は靈鳥、道場とは證果の道を得べき場所、吉祥は人名にて、佛樹は菩提樹。跏趺は結跏趺坐の略にて、結跏趺坐とは普通に云ふ坐禪の形。

【和解】 尼連禪河の金流を出ては、何れの處にか我大菩提を證すべき道場や有ると、それを求めて往かるゝに、許多の靈鳥翼從ひて、其道すがらに牧女の捧げる乳糜を受けて、頓て前正覺山へと登り給ふた、けれども此處は恰好の場處で無い、爾も天に聲有りて、此より西南十四五里、畢鉢羅樹の下に金剛坐あり、去來の諸佛咸な此坐に於て正覺を成ず、との告を得たので、更に再び坐を起つて其畢鉢羅樹下へと到り給ふた、畢鉢羅とは梵名にて此樹下にて大菩提を證られたに因つて菩提樹と譯してある、さても樹下には麗しき草を持たる人が居たので、其名を問へば吾は吉祥と云へる者、請ふ此麗草を受給へとて供養を爲した、名も麗しき吉祥こそ、過去の功德の因行に因つて、今や正覺の果福を開くべき、最も祚福き感徵で有ると、卽ち其吉祥草を受けて、菩提樹下なる石上に敷き、我若し無上正覺の大菩提を得ずんば、寧ろ此身を碎かるとも誓て此坐を起つ可からずと、結跏趺坐して動じ給はぬこと金剛の如くであつた。

此菩提樹下の金剛坐こそ、四大佛蹟の其一で昔は摩掲陀國の成道處、今は有名なる佛陀伽耶の靈場にて、最近巡禮者の紀行には左の如く記してある。

佛陀伽耶の靈蹟は印度鐵道伽耶停車場の南七哩の處に在つて、伽耶の町より南へ往けば砂平に水淺き、ファルグと呼ぶ河に至る、此ファルグは尼連禪河で、其對岸遠からざる丘陵こそ、ブラグボヂ鉢羅笈菩提山にして卽ち前正覺山である。

佛陀伽耶靈蹟現在の菩提樹は高さ三十餘尺、無論佛在世のものでは無からうが、其樹下に石壇を造り以て當時の金剛坐を記念して在る、金剛坐に接して其東方に佛陀伽耶大塔が聳へてあるが高さは六十尺で四面幾段にも層龕を造り、下部層龕の中央には佛成道の姿を刻んだ極めて美はしい石像が安置して在る。

前正覺山は裾野より觀て高さ僅に三四百尺の、灌木茂れる丘陵で、其頂上より眺むれば伽耶町は西北に當りて尼連禪河の彼方に横はり、北を望めば平野の上を伽耶よりキウルに至る鐵道線路が通つて有つて、茲に眼を轉ずれば西南遙に尼連禪河を隔て、伽耶大塔が立て居る、山頂少し下つた處にタマリンドと呼ぶ大樹が有つて、其處に世尊が一時禪坐されしと云ふ天井高く弓狀を爲した八疊敷程の石窟が遺つて有る、さては禪河の其邊りには牧女の供養を受給ふた乳糜林や沐浴金流の址なんど、種々の傳へはあるけれども未だ確定されては居ぬ。

奮大光明使魔知之魔率官屬而來逼試制以智力皆令降伏得微妙法成最正覺

【訓讀】 大光明を奮て魔をして之を知しむるに、魔官屬を率て來りて逼試みたれども、制するに智力を以てして皆降伏せしめ、微妙の法を得て最正覺を成じたまへり。

【和解】 此一段は降魔相と成道相とで、さても其後、愈成正覺の時が來たので、先づ大光明を以て魔界に之を知らしめ給ふた、此光明こそ魔軍に對する宣戰の布告にして、あらゆる障礙や妨害に打勝べく投せられたる彈丸で有つた、是に驚きたる魔軍の一團は此の成道正覺を妨ぐ可く、許多の眷屬を率ゐ來りて種々なる手段を廻らして、逼め試みんとはしたれども、到底菩薩の智力には敵し難く終に制伏されたので、茲に菩薩は勝利者として微妙の法を感得し、最正覺なる無上の證果を得て佛世尊の位に就き釋迦牟尼佛とは成り給ふた、卽ち佛陀伽耶の菩提樹下金剛寶石の上にして、時に佛壽三十歲十二月八日の曉天で有つた、此の佛成道の年月にも二十九歲と云ふ說、二月八日、三月八日亦は三月十五日、四月八日等の異說が有る、けれども佛壽三十歲十二月八日と云ふのが、最も多く行はれて

居る普通說である。

釋梵祈勸請轉法輪以佛遊步佛吼而吼

【訓讀】 釋梵祈勸して法輪を轉ぜんことを請ふに、佛の遊步を以し、佛吼を以て吼す。

【句義】 轉法輪とは佛の說敎、佛吼も同く佛の說敎にて、或は獅子吼とも云ひ、其威嚴有つて徹底せるを獅子の聲に譬ふ。

【和解】 是よりは轉法輪相にて、佛成道の後尙暫くの時日の間は坐を起ち給はは無かつたが、釋提桓因や梵天王等が祈勸して轉法輪を請ふたに因り、扨こそ說敎し給ふ事となつた轉法輪とは說敎の意味で、車輪の物を運轉し且つ摧破するが如く、一切衆生の迷惑業結を摧き破りて、正しき道に運び入るとの義に因るので、それに三輪說法と云ふ事が有つて、三輪とは身口意の三つの說敎にして、此處に佛の遊步とあるのが、其身輪の說敎卽ち佛身の德であつて、行化亦は遊化と稱して佛が處々に到り給ふに、佛身を見る者皆各に利益を受る事を意味し、佛吼を以て吼すとは、獅子王の聲に譬へられたる口輪、卽ち佛の聲音と辯舌を以て爲し給ふ說敎の德である。

鹿野園の現況

釋迦牟尼佛は斯くして金剛坐上を起ち、先づ鹿野園に到りて尊者了本際、尊者正願等の五人に對して初めて佛の正法を說き聞かせられた、是を鹿野の初轉法輪と云ふので、其後三人の迦葉や舍利弗等を敎化され、其弟子等を併せて一千二百五十人の茲に佛敎々團は成立したのであるが、此初轉法輪の靈蹟なる鹿野園に就て、最近巡禮者の紀行に記す處左の如くである。

波羅奈國の鹿野園は、佛陀伽耶の成道處より西方約百三四十哩を距る、ベレナスの郊外北方三哩の處に在てサルナートと呼んで居る、鹿野園の南七八町許り道路の左側に古き卒堵婆の廢址が有つて、其上に赤煉瓦八角の塔が立て有る、是れが了本際等の五人が遙々尋ね來給ふた釋迦牟尼佛を迎へた故跡で、迎佛塔婆の址なりと傳へて居る、迎佛塔址より七八町にして鹿野僧伽藍の舊蹟に達す、其處に高さ百餘尺下部の直徑八十餘尺のダメクと稱する大塔がある、ダメクは達磨研葛羅卽ち法輪の說で有るとの說で、昔は名工の手になつた佛像が安置されて有つたらしい、此ダメク塔の西北から西に亙りて昔の伽藍遺址が有る、英印政府の考古局は西曆一千九百四年から六年へ掛けて、此地の發掘を試み幾多珍稀の彫刻物を掘出して居る。

扣法皷吹法嬴執法劍建法幢震法雷曜法電澍法雨演法施常以法音覺諸世間

【訓讀】法皷を扣き法嬴を吹き、法劍を執り法幢を建て、法雷を震ひ法電を曜し、法雨を澍ぎ法施を演べ、常に法音を以て諸の世間を覺せしむ。

【和解】此八句は佛吼を以て吼し給ふ佛の聲音說法の德を喩へられたので、皷は軍陣に兵を集めて進ませる物で有るから、進んで惡を破り善を集むるに喩へ、嬴は螺にして法螺は兵を整理する具で有るから、惡を改めて善に導くに喩へ、劍は物を斷つべき器で有るから、疑網を斷ちて迷惑を解くに喩へ、幢は旗幢にて外道邪見の敵を破りて、佛敎正法の幢を建つるに喩へ、雷も電も俱に驚き覺ませるもので有るから、佛の法音に因つて迷ひの夢を覺ますに喩へ、雨はすべてを潤すに因つて、枯木の如き無信の徒にも菩提の芽を出さしむるに喩へ、施は貧を救ふの義で有るから、功德の法財乏しき者にも法福を與ふるに喩へられ、是の如き聲音の說法にて一切世間を覺醒さるゝのである。

光明普照無量佛土一切世界六種震動總攝魔界動魔宮殿

衆魔慴怖莫不歸伏

【訓讀】 光明普く無量の佛土を照し、一切世界六種に震動するに總て魔界を攝して魔の宮殿を動ず、衆魔慴怖て歸伏せざること莫し

【和解】 此一段は重ねて佛身の德を說かれたので、佛身の光明普く無量の佛土を照せば一切の世界六種に震動して、特に魔界を驚覺せ給ふに因つて、衆魔慴怖て佛德に歸伏するのである。

摑裂邪網消滅諸見散諸塵勞壞諸欲塹

【訓讀】 邪網を摑裂して諸見を消滅し、諸の塵勞を散じて諸の欲塹を壞る。

【句義】 摑裂は裂き破ぶる意味、諸見と塵勞は見惑思惑と云ふ煩惱、欲塹とは五欲の煩惱の深きを塹坑に譬ふ。

【和解】 前段は魔道に對する佛身の德で有たが、當段は外道と凡夫に對する佛吼音聲の德で、佛の說敎に因ては邪法を以て正きものなりとして居る外道の邪見、卽ち諸見とある見惑の煩惱を消滅させて正見に導かるゝので、其邪見の解き難きを網に喩へて、それを引裂き破り給ふを邪網を摑裂すると云ひ、次には凡夫の貪欲愚痴などの五欲の迷ひを塵に喩へて、其迷ひの煩惱を思惑と云ひ、それが塹坑の如くに深いのを壞りて、迷ひの夢を覺さるゝのである。

嚴護法城開闡法門洗濯垢汚顯明淸白光融佛法宣流正化

【訓讀】 法城を嚴護り法門を開闡き、垢汚を洗濯して顯明淸白ならしめ、光く佛法を融して正化を宣流す。

【和解】 佛敎の正法を城に喩へ亦た門に喩へて、其正法の門を開きて前段の如き外道の邪見に對し、進で邪見の敵を滅すと俱に、退きては其侵入を防ぐを、法城を護りて法門を開くと云ひ、亦凡夫に對しては煩惱の垢汚を洗濯て、それを淸白ならしめ、是等邪見の外道凡夫をして正法に歸依せしむるを光く佛法を融すと云ひ、其正しき敎化が不斷に絕ざるを正化を宣流すと云ふ、此一段も亦佛吼音聲の德である。

入國分衞獲諸豐膳貯功德示福田

【訓讀】 國に入て分衞して諸の豐膳を獲、功德を貯へて福田を示す。

【句義】 分衞は乞食と云ひ、普通の意味に於ける托鉢にて、福田とは善事の功德を生ずる義を田地に譬ふ。

【和解】 此一段は亦た佛身の德にて、佛身諸國に入りて分衞として托鉢を爲し給へば、佛身を見る者皆な無上正眞の信心を發し、各功德を得んが爲めに、競うて美はしき食物の供養を爲すを、諸の豐膳を獲ると云ひ、其善事に因てあらゆる功德を生み出すを福田を示すと云ふ。

欲レ宣レ法 現二欣笑一 以二諸法藥一 救二療三苦一 顯二現道意無量功德一 授二菩薩記一 成二等正覺一

【訓讀】 法を宣んと欲して欣笑を現じ、諸の法藥を以て三苦を救療し、道意無量の功德を顯現し、菩薩に記を授て等正覺を成ぜしむ

【句義】 三苦は苦々、壞苦、行苦の三、道意とは菩提心にて道心とも云、記は記莂と稱して證明記錄とも云可く、菩薩の爲めに當來の成正覺を證明さるゝ意味。

【和解】 佛が法を宣んと爲給ふには慈悲心を以て、先づ其聽衆に親みを與へんとて、溫顏微笑を爲し給ふを欣笑と云ひ、其欣笑を現して宣給ふ法には、苦を拔きて樂を與ふる功德が有る、それを藥に喩へて、其法藥を與へて苦々壞苦など云へる一切苦みの根本を救療せられ、亦た道意とある菩提心を發させて、無量功德を得る樂を與へられ、爾も菩薩に對して當來成佛の記莂を授けて、それを證明さるゝのである。

示二現滅度一 拯濟無レ極 消二除諸漏一 植二衆德本一

【訓讀】 滅度を示現して拯濟すること極無し、諸漏を消除して衆の德本を植しむ。

【句義】 滅度は涅槃と云ふ意、諸漏は欲漏、有漏、無明漏と云如き種々なる煩惱の意味にて漏とは漏落として衆生をして生死の迷ひの中に沈落しむる義に因り、德本とは涅槃に至るべき因を云。

【和解】 此一段は八相最後の入涅槃相にて、釋迦牟尼佛一代の敎化に正に說くべき事は說き度すべきものは度して、拘尸那揭羅の城外、跋提河の邊り沙羅雙樹の間に於て、肉身の死滅を示現し給ふを入涅槃、卽ち滅度と云ふので、其滅度を示現るゝに就ても、生有れば必ず死あり、會ふ者は必ず離る、世はすべて常住ならぬ義を敎訓せらるゝ意味が有て、此涅槃の一相に因ても拯濟とて、救はるゝ者が多いのを極り無しと云ひ、爾も生死の迷ひ

入涅槃地の現況

より脱し難きは諸漏と云へる各種の煩悩を去難きが故で有るから、それを消滅させて滅度涅槃に至るべき因を作らしめらるゝを、衆の德本を植ゑしむと云ふのであるが、此釋迦牟尼佛入涅槃の年月にも亦異説が有て、佛壽八十歳、七十九、八十一歳、二月十五日、二月八日、或は八月十五日、三月十五日等と傳へて有る、けれども普通の説としては、八十歳二月十五日と云ふのが多く行はれて有るので、塲所は卽ち拘尸那揭羅城跋提河の邊り沙羅雙樹の下にして、最近巡禮者の紀行に依れば、惜い哉亦是れ未定の佛蹟なりと記されて有る。

昔の拘尸那揭羅を今はカシア地方と稱し、其西南に涅槃地と傳へる所が有て ビルマの有志者が建てた佛敎徒宿泊處が有る、此地に於て明治四十四年の頃卒堵波の中より涅槃塔内の銅板なるものと、其卒堵波の西より北首右脇にして丈八の大涅槃像とを發見した事實に依て、是を阿恃多伐底卽ち跋提河の邊り沙羅雙樹の下と爲て有り、其處より東南約二哩の所に茶毘所と稱する圓丘が有て、大樹を以て蔽はれたる中に赤煉瓦大塔の址が遺つて居る、此圓丘に接近して北より西南に延びた一帶の水流が見える、是を跋提河の流れとすれば、せられぬ事も無いが、彼の涅槃地と稱する附近には、更に河らしい河が無い、爾も此涅槃地と稱する所を以て、法顯玄奘の記錄に照せば、疑はしき點が有て一

菩薩の勝德三輪説法

は涅槃地を佛生地より東百六十八哩の所と爲し、一は同く百數十哩として有て、何れも此カシア附近には相違無らうが、彼の佛生藍毘尼園の遺址が確定せぬ限りは、殘念乍ら涅槃地も亦た未定にて、現今傳へて居る所は假定の佛蹟として置かねばならぬ。

具足功德微妙難量遊諸佛國普現道敎

【訓讀】 功德を具足すること微妙にして量難く、諸佛の國に遊びて普く道敎を現ず。

【句義】 道敎とは口業の説法を重として、それに身業意業の説法を總稱せる意味、現とは示現の現では無く、此處では演説の意味にて、道敎を演べると云義。

【和解】 是より以下は亦再び菩薩の德を讃へて有るので、微妙にして量難き菩薩無量の行と願とを、一として缺くる事無きを功德を具足すると云ひ、爾かも自由に十方の佛國に到りて道敎を現ずと、身口意業の三輪悉く説法せらるゝのである。

其所修行清淨無穢譬如幻師現衆異像爲男爲女無所不變

本學明了在意所爲此諸菩薩亦復如是

【訓讀】 其修する處の行、清淨にして穢無く、譬ば幻師の衆の異

像を現すに、男と爲し女と爲し、所として變ぜずといふこと無く、本學明了にして意の所爲に在が如く、此諸の菩薩も亦復た是の如しを本とする意味。

【句義】 幻師は幻術者にて、本學明了とは其幻術者が幻術を行うて、意の儘なるは習學

【和解】 其菩薩の修行には一として自我的利慾の念慮無れば、清淨にして穢れ無きは無論であつて、爾かも一切の所に於て一切の機類に對して、自由自在に利益を施さるゝことは譬へば幻術者が意の儘に種々なる幻術を爲すが如くで、其意の儘に幻術を現すには其れだけの修養を本とするから、それを習學と云ひて、菩薩にも亦其の必要が有るのである。

學一切法貫綜縷練所住安諦靡不致化無數佛土皆悉普現

【訓讀】 一切の法を學して貫綜縷練し、所住安諦にして化を致さずといふこと靡く、無數の佛土皆悉く普く現ず。

【句義】 貫綜縷練とは習學を精練する義、所住安諦とは其習學精練せるに因て一切の法に錯誤無くいと心安く教化が出來る意味。

【和解】 さても菩薩の修養として一切の法を學せらるゝに、所有る事理を貫通して精練さるゝに因て、所住安諦とてすべてに錯誤有る事無く、十方無數の佛土に於て自由自在に何の慮る所も無く、いと心安く教化が出來るのは、尚前段の幻術師が意の儘に幻術を行ふ如くである。

未曾慢恣惑傷衆生如是之法一切具足

【訓讀】 未だ曾て慢恣せず、衆生を惑傷す、是の如きの法一切具足せり。

【和解】 慢恣は高慢、惑傷は慈悲憐愍の意味で、爾かも菩薩には未だ曾て我慢放逸の念慮も所業も無い、それに困て前段の如く穢れ無き清淨の行を修せらるゝので、亦た衆生を憐愍さるゝに因て、苦勞を忍び方便を廻らして有ゆる教化を施さるゝに、是等の法を一切具足して缺くる事無きのである。

菩薩經典究暢要妙名稱普至導御十方

【訓讀】 菩薩の經典要妙を究暢し、名稱普く至りて十方を導御す

【句義】 菩薩經典とは大乘菩薩の眞髓と云ふ意味、究暢は通曉の義にて名稱は菩薩の名號を云。

【和解】 こゝに經典と云うて有るのは、普通の經卷典籍では無くて、勝れし大乘の眞髓と云程の意味で、菩薩は其眞髓を究めて通曉せらるゝこと、前段の本學明了なるに因て、其菩薩の名稱は普く十方に行亙りて例せば地藏菩薩とか觀音菩薩とか稱する名號の如く、其名に據つても衆生を導き敎化さるゝを導御すと云。

無量諸佛咸共護念佛所住者皆已得住大聖所立而皆已立住することを得、大聖の所立には皆已に立り。

【訓讀】 無量の諸佛咸く共に護念たまひて、佛の所住には皆已に

【和解】 菩薩の勝德既に是の如くで有て、無量の諸佛咸共に護念給へば、佛に次での法位に在れども、所住と云へる證理の眞理も、所立とて大慈悲心の敎化も、大聖卽ち佛と餘り大なる異りが無い。

如來導化各能宣布爲諸菩薩而作大師以甚深禪慧開導衆人通諸法性達衆生相明了諸國

【訓讀】 如來の導化各能く宣布し、諸の菩薩の爲に大師と作て、甚深の禪慧を以て衆人を開導き、諸法の性に通じ衆生の相に達し、諸國を明了にす。

【句義】 ●如來とは佛と同意味、●大師は師範の意、●禪慧は禪定と智慧とを云。

【和解】 如來の導化とは佛の敎化にて、前段の所住と所立とに於て佛と大いなる異り無き菩薩は、如來の導化と同樣に大慈悲心を以て衆生の機類に隨ひ、其機根に相應せる法を宣傳し、亦諸の菩薩の中でも弟妹とも云ふ可き菩薩の爲めに、乃至は一切衆人の爲めに、佛に代りて師ともなり父兄ともなりて、甚深なる法を以て其等を開導き敎へらるゝので、卽ち諸法の性とある眞理に通じ、亦た衆生の相と云ふ一切世間の俗諦にも達して、諸の國土に於ける衆生を開悟せしめらる、それを諸國を明了にすと云ふ。

供養諸佛化現其身猶如電光善學無畏之網曉了幻化之法

【訓讀】 諸佛を供養するに其身を化現すること、猶し電光の如く善く無畏の網を學して、幻化の法を曉了す。

【和解】 此一段は菩薩の修せらるゝ福智の行を說て有るので、菩薩が福行として功德を積むが爲めに、諸佛を供養せんとて甲の佛の許より乙の佛の許へ往かるゝのに、其身を現

ずること速疾して、何の障礙も無き有樣を電光の如くに譬へ、智の行としては無畏の網とある佛の法を學して、それを曉了らるゝので、無畏とは四無畏とて等正覺無畏、漏永盡無畏、說障法無畏、說出苦無畏とて佛の敎化には、何の畏れも憚かる所も無き意味にて、其無畏に因て一切を濟度るを網に譬へて無畏の網と云ひ、亦た佛の知見には偏局たる處が無い、有も必ずしも有ならず、爾とて無にも亦あらずと、有無を離れて何事にも執着せず、すべては幻化の法にして、唯是れ一時眼前の現象たるに過ぎずとせらる、それを曉了らるゝをば菩薩の智德とするのである。

壞裂魔網解諸纏縛超越聲聞緣覺之地得空無相無願三昧

【訓讀】 魔網を壞裂て諸〻の纏縛を解き、聲聞緣覺の地を超越て空無相無願三昧を得たり。

【句義】 聲聞とは普通に云ふ羅漢の別稱にて、重に佛の說敎を聞きて智惠を得るので、卽ち佛の聲を聞て道を悟ると云義、緣覺は獨覺とも稱し十二因緣飛花落葉などを觀じ、師無くして覺るとの義にて此の聲聞と緣覺を二乘とも云ふ。

【和解】 爾かも菩薩は魔網を壞裂と、他の爲めには外道邪見の敎を以て、開悟の門に入るべき者を妨害すること、譬へば網の如くなるを壞裂て、其誤られたる思想の纏縛を解き自己の爲めには聲聞緣覺の如き劣りし二乘の智慧に超越て、勝れし空無相無願三昧と云ふのを得らるゝのである。空無相無願とは三解脫門とも稱して、一切萬物は元來空で有て、それを空なりと知れば空は無相にして、種々の色相を認ること無く、空と無相なれば願望も亦無しと云程の意味で、是より涅槃の眞理に入る、それをば門に喩へられたので、三昧とは三摩地とも云ふ梵語にして、正定と譯して有る、正定とは心を定めて動亂せぬ義で、卽ち菩薩は此三解脫門より入て、涅槃の眞理に到達さるゝのである。

善立方便顯示三乘於此中下而現滅度

【訓讀】 善く方便を立て三乘を顯示し、此中下に於て滅度を現す

【句義】 方便とは便宜にして巧みなる方法との意味、三乘は聖聞、緣覺、菩薩の三法位にて、中下とは此三法位中で緣覺を中とし聲聞を下位とする義で、而して菩薩を上位とす。

【和解】 聲聞緣覺二乘の智慧に比べて、其上位に在る菩薩としては、一乘眞實の法を期待さるゝのである、けれども其れに達する迄の便宜方法として、三乘と云ふ三階段を顯示し、其中下の智慧を有せる二乘に對して、其れに相應せる小乘涅槃の理を示すのを滅度を

現すと云ふ。

亦無所作亦無所有不起不滅得平等法

【訓讀】亦所作無く、亦所有無く、不起不滅にして平等の法を得たり。

【和解】此一段は菩薩自利の證德とて、中道第一義諦と云ふ極めて高き證を得るらゝ菩薩は徧局と執着と亦た差別が無い、因を離れ果を離れて、爾かも離れたりとも執着せぬを所作所有無しと云ひ、其所作所有無ければ無差別にして平等なるを不起不滅として、それをば平等の法を得たりと云ふので、得たりとは證得と其平等法を證得との意味である。

具足成就無量總持百千三昧諸根智慧廣普寂定深入菩薩法藏得佛華嚴三昧

【訓讀】無量の總持百千の三昧、諸根の智慧を具足し成就して、廣普の寂定あつて深く菩薩の法藏に入り、佛華嚴三昧を得たり。

【句義】總持とは能持能遮の義とて、能く善を持ち惡を遮る意、諸根は一切の善法を籠めたる義、菩薩法藏とは菩薩の貯へらるゝ大乘法との意にて、佛華嚴三昧とは普賢菩薩正受の三昧とも云ひて、前段に在る普賢大士の德と云ふに同じ。

【和解】亦其菩薩の德として、總持と稱する一切の惡を遮止り一切の善を保持て、散逸させぬ智慧と定とが無數なるを無量亦は百千とも云ひ、尙ほ諸根智慧とある一切善法を籠めたる德を全備せるを具足成就と云ふので、それが廣くして且つ深きを廣普寂定と云ひて其廣さと深さとに因て勝れし大乘の法德を貯へ、佛華嚴三昧と云ふを得らるゝので有て、佛華嚴三昧とは菩薩の上首なる普賢菩薩の德を得るとの意味である。

宣暢演說一切經典住深定門悉親現在無量諸佛一念之頃無不周徧

【訓讀】一切の經典を宣暢し演說し、深定門に住して悉く現在無量の諸佛を親たてまつり、一念の頃に周徧せずといふこと無し。

【和解】此處に經典とあるのは普通に云ふ經卷では無くて、佛の說法と云ふ義にて、德の勝れし菩薩は佛を助けて說敎せらるゝを宣暢演說と云ひ、爾かも其菩薩は聲聞緣覺等の及ばざる深き定力を有せらる、それを深定門と云ひ、それに因て天眼通力及び神境通力の

自在を得られて、自由に無量の諸佛を覩たてまつり、一念の頃と少時の間に徧く十方無量諸佛の許に到らるゝのである。

濟諸劇難諸間不間分別顯示眞實之際得諸如來辯才之智入衆言音開化一切

【訓讀】諸の劇難と諸間と不間とを濟ひ、眞實の際を分別し顯示するに、諸の如來の辯才の智を得て、衆の言音を入て一切を開化す

【句義】劇難とは三惡道及び八難の苦みを云ひ、間とは閑暇と云ふ意味にて惡業は作らざるも亦善業とても無き者、不間は其反對にて惡業を造るに閑無き者、眞實際は眞實の極と云ふ義。

【和解】亦菩薩は大慈大悲を以て、地獄餓鬼畜生の三惡道に在る者、及び八難として有ゆる艱苦を受ける者や、惡業を造りて閑無き者、たとひ惡業は造らざるも爾として善業無き者等を濟はるゝに、眞實の際とある眞如の極理をば、分別顯示と說諭さるゝので、それには如來と異り無き辯才と亦た衆の言音とて、種々樣々に變つてある各國各地の言葉に通じて何の澁滯りも無く敎化せらる、それを一切を開化すと云。

超過世間諸所有法心常諦住度世之道

【訓讀】世間所有る法を超過して、心常に度世の道に諦住す。

【和解】亦菩薩の德として、世間に所有る法は假令殊勝なるもの有りとも、それにも超過たる度世の道を諦めらるゝので、度世の道とは涅槃最上の眞理にして、佛敎の極意と云義である。

於一切萬物而隨意自在爲諸庶類作不請之友荷負群生爲之重擔

【訓讀】一切の萬物に於て意に隨ひて自在なり、諸の庶類の爲に不請の友と作り、群生を荷負して之を重擔と爲す。

【和解】有ゆる一切萬物に於て、隨意自在なる菩薩は諸の庶類とて一切衆生の爲めに友とならるゝので、爾かも不請の友といふ大慈悲の友愛心にて、請はざるも尙ほ親友の如き慈愛を以て、其群生とて一切衆生をと救濟ざれば止まずと、それを重荷を負ひたる如くに、一大責任とせらるゝのを、荷負して之を重擔と爲すと云。

受持如來甚深法藏護佛種性常使不絶

【訓讀】 如來甚深の法藏を受持して、佛種性を護て常に絶さらしむ。

【和解】 甚深法藏とは如來藏性とも云ひて、有ゆる心の障閡を去りたる最上の智慧と勝解との意味で、菩薩は既にそれを得らるゝを受持と云ひ、亦た佛種性とて一切衆生悉く佛に成るべき種性を有て居る、けれどもそれを失はんとしつゝ有るを、菩薩は常に之を保護して其程性を絶ざらしめらる、其絶ざらしめられたる種性有るに因て、衆生も亦た菩薩の如く、頓ては智慧と勝解とを得るのである。

興大悲愍衆生演慈辯授法眼杜三趣開善門以不請之法施諸黎庶

【訓讀】 大悲を興して衆生を愍み、慈辯を演て法眼を授け、三趣を杜ぎて善門を開き、不請の法を以て諸の黎庶に施す。

【句義】 三趣は三惡道、善門は人間界と天上界の意、黎庶は民衆と云ふ義。

【和解】 菩薩の大悲は衆生を愍れみ、爾かも大慈の辯舌を以て說敎して、邪見不信の輩に佛法の理解を與へらる、それを眼の開くに喩へて法眼を授くと云ひ、其れに因て三惡道に到るべき道を杜塞て人間天上の善道に入る門を開き、尙其慈悲の極り無きや請はざる者にも法を說きて、黎庶とある一切の民衆に施さる。

如純孝之子愛敬父母於諸衆生視若自己一切善本皆度彼岸悉獲諸佛無量功德智慧聖明不可思議

【訓讀】 純孝の子の父母を愛敬するが如く、諸の衆生に於て視こと自己の若し、一切の善本皆な彼岸に度る、悉く諸佛無量の功德を獲て、智慧聖明なること思議すべからず。

【句義】 一切善本とは菩薩の四攝法及び六波羅密の修行を云ひ、彼岸とは涅槃の意味。

【和解】 菩薩が衆生を愛して重せらるゝ有樣は、孝行なる子の父母を愛敬するが如くで毫も粗略の想ひを爲さず、自己と衆生と同體なりとの大悲心を視ること自己の若しと云ひて、是の如く菩薩が修せらるゝ一切の善本、卽ち四攝六波羅密などの功德は、皆な涅槃の岸に達すべき本にして、頓は成佛さるゝので有るから、それを諸佛無量の功德を獲ると云

ひ、爾かも深廣にして聖明き智慧を有せらるゝこと、測り難きを思議す可からずと云。

如是之等菩薩大士不可稱計一時來會

【訓讀】 是の如き等の菩薩大士稱計すべからず、一時に來會せり

【和解】 以上長々と列擧された如き勝れし德を有せらるゝ菩薩大士が、此無量壽經の會坐なる靈鷲山へと來會された、其數無量で有るから稱計すべからずと云ふのである。

爾時世尊諸根悅豫姿色淸淨光顏巍々

【訓讀】 爾時、世尊、諸根悅豫し姿色淸淨にして、光顏巍々たり

【句義】 世尊は敎主釋迦牟尼佛、諸根とは面貌及び佛身、巍々とは高く勝れし意味。

【和解】 爾時世尊釋迦牟尼佛の面貌と佛身と全體に亙りて悅豫の相が現じ、それが淸淨巍々として、最も氣高く拜せられた。

尊者阿難承佛聖旨卽從座起偏袒右肩長跪合掌而白佛言今日世尊諸根悅豫姿色淸淨光顏巍々如明淨鏡影暢表裏威容顯曜超絕無量未曾瞻覩殊妙如今

【訓讀】 尊者阿難佛の聖旨を承て、卽ち座より起て偏袒右肩し長跪合掌して佛に白して言く、今日世尊諸根悅豫し姿色淸淨にして光顏巍々たること、明淨なる鏡の影表裏に暢るが如く、威容顯曜して超絕したまへること無量なり、未だ曾て殊妙なること今の如くなるをば瞻覩らず。

【句義】 偏袒右肩長跪合掌とは袈裟を脫て右の肩を現し、兩膝を地に着て掌を合はす形にて、佛世尊に對する最上の禮容。

【和解】 此時釋迦牟尼佛に親近せる佛弟子阿難尊者は、斯くも世尊が光顏巍々たる悅豫の相を現じ給ふは、是れ尋常の義にあらず、深き佛意の在る事なるべしと察したのを、佛の聖旨を承けると云ひ、卽ち座より起て偏袒右肩の敬意を表し、謹みて世尊に問奉るには、世尊の威容光明顯曜て淨く明なる鏡の如く、最も殊妙たまふのは未だ曾て瞻覩らざる處である。

唯然大聖我心念言今日世尊住奇特法今日世雄住諸佛所

住今日世眼住導師行今日世英住最勝道今日天尊行如來
德

【訓讀】 唯然なり大聖、我心に念言く、今日世尊奇特の法に住し
今日世雄諸佛の所住に住し、今日世眼導師の行に住し、今日世英最
勝の道に住し、今日天尊如來の德を行じたまへり。

【句義】 世雄、世眼、世英、天尊は何れも佛の別稱にて佛德を表示す意義。

【和解】 爾れば阿難の念言には、今日世尊は他に超たる奇特の法を得給ひて、諸佛と同じく涅槃の眞理に達し、一切衆生を正道に善導さるゝ導師の行に住し、無上菩提の勝れた道を得せしめ、大慈悲心を以て自由に救濟せらるゝ、最も尊き如來の德を有し給へり。

去來現佛佛々相念得無今佛念諸佛耶何故威神光々乃爾

【訓讀】 去來現の佛、佛と佛と相念じたまふ、今の佛も諸佛を念じたまふこと無きことを得んや何が故ぞ威神の光々たること乃ち爾るや。

【句義】 去來現佛とは過去、現在、未來の三世諸佛、光々とは前段の威容顯曜と同意味。

【和解】 是に依て過去現在未來の三世諸佛は、何れも其德を同うして各互ひに念じ給へば、今の佛である我釋迦牟尼佛も亦同樣にて、其德勝劣有るべからず、然るに何故ぞ今日の如く諸佛に超えて、光々たる威神を現はし給ふやと、是迄は巍々たる光顏に對しての阿難尊者の問である。

於是世尊告阿難曰云何阿難諸天教汝來問佛耶自以慧見問威顏乎阿難白佛無有諸天來教我者自以所見問斯義耳佛言善哉阿難所問甚快

【訓讀】 是に於て世尊阿難に告て曰はく、云何ぞ阿難、諸天汝に教て來て佛に問しむるや、自ら慧見を以て威顏を問や、阿難佛に白く諸天の來て我に教る者無し、自ら所見を以て斯義を問たてまつる耳、佛の言く善哉阿難、問ふ所甚だ快し。

【和解】 是に於て世尊は阿難に告給ひて、云何ぞ阿難其樣なる事は諸天が汝を敎へて問はさせしか、亦は汝の慧見を以て問ふたのかと、阿難答て白すには、否な諸天の敎を受しにはあらず、自己の所見を以て斯義を問ひ奉るのであると、其時佛の宣給くに善い哉阿難、問ふ所甚だ快しとて歡び給ふた、斯く快しと爲給ふは、今我が淨土敎を說べき時節の到來したを歡び給ふたので、元來釋迦牟尼佛は其出世の本懷として、淨土敎である阿彌陀如來の慈悲誓願や、名號功德の事等を說かんとて、其時機到來を待ち給ふたが、今や其時來りぬと扨こそ光顏巍々として、先づ其悅豫の相を現じ、爾かも阿難が聖旨を察して斯義を問ひたてまつりしに因て、善い哉甚だ快しと歡喜の辭を漏らし給ふたのである。

發深智慧眞妙辨才愍念衆生問斯慧義如來以無盡大悲矜哀三界所以出興於世光闡道敎欲拯群萌惠以眞實之利無量億劫難値難見猶靈瑞華時々乃出

【訓讀】 深き智慧を發して眞妙の辨才あり、衆生を愍念するをもつて斯慧義を問へり、如來無盡の大悲を以て三界を矜哀む、所以に世に出興て光く道敎を闡き、群萌を拯んと欲して惠むに眞實の利を以てす、無量億劫にも値難く見難し、猶し靈瑞華の時々て乃ち出るがごとし。

【句義】 ●●矜哀とは憐愍の義にて、●●群萌は一切衆生と同意味、●●●靈瑞華は三千年に一たび華咲くと云へる優曇華を云。

【和解】 善哉甚だ快しと歡び給ふた世尊は、尙ほ阿難尊者の智惠と辯才とを讃給ひて汝ち衆生を愍む念を以て能くも斯義を問ひたりとて、扨て改めて告げ給ふには、如來の大慈悲は際限無くして無盡である、其無盡の大悲を以て三界一切の衆生を矜哀むが爲めに世に出興たる事なれば、光く道敎とある淨土往生の門を闡きて、一切衆生の群萌を拯はんとて眞實の利を惠むのである、眞實の利とは彌陀の名號卽ち念佛で、世尊出世の本懷は此念佛眞實の利を說かんが爲めで有る事を示し給ひて、斯かる佛の出世に逢ふは、其値ひ難く見難きこと、三千年に一たび開く優曇華の如くである。

今所問者多所饒益開化一切諸天人民阿難當知如來正覺其智難量多所導御慧見無礙無能遏絕

【訓讀】 今問ふ所は饒益する所多くして、一切の諸天人民を開化

す、阿難當に知べし、如來正覺は其智量り難く導御する所多し、慧見無礙にして能く遏絶すること無し。

【和解】 されば汝の問ふ所は廣く淨土の門を開くとも謂可く、今現在の人のみならず末の世に至る迄も、あらゆる諸天人民を開化すとて、教化し善導して一切衆生を普く漏さず救濟すべき基礎となるので有るから、饒益とて益する所が甚だ多い、阿難よ當に知るべし如來正覺とて佛の正覺は其智惠量るべからずして、御導ところ亦多く、佛の慧見の無礙なるは能く遏絶すること無しと、何者も之を遮り抑止る事が出來ぬ。

以一飡之力能住壽命億百千劫無數無量復過於此諸根悅豫不以毀損姿色不變光顏無異所以者何如來定慧究暢無極於一切法而得自在阿難諦聽今爲汝說對曰唯然願樂欲聞

【訓讀】 一飡の力を以て能く壽命を住ること、億百千劫無數無量にして、復た此に過たり、諸根悅豫して以て毀損せず、姿色不變にして光顏異ること無し、所以は何んぞ、如來は定慧究暢して極り無く一切の法に於て自在を得たり、阿難諦かに聽け今汝が爲に說ん、對て曰く唯然なり願樂して聞たてまつらんと欲す。

【和解】 爾かも佛は一飡の力とて、纔かに一食の力を以ても億百千劫無數無量にも過ぎたる程の長き壽命を保つ、それは過去因位修行の時に無量の功德を積みたる德にて、今汝が見るが如く諸根に悅豫の相あるも姿色變せず光顏異ること無きも、其所以何んと云ふに、畢竟定慧の力に因るので、佛の定と慧の力は一切の法に於て自由自在を得るのである、是に依て今我れ其德と其力とを以て、爾かも大慈悲心に住して茲に淨土の敎を說かんとす、徒爾輕忽には思ふ可からずとて、阿難諦かに聽け今汝が爲に說かんと告げ給ふた、之を聽きたる阿難尊者は益敬重の意を發して、謹て聽聞せんことを願ふた、それを願樂して聞きたてまつらんと欲すと云ふのである。

佛告阿難乃往過去久遠無量不可思議無央數劫錠光如來興出於世敎化度脫無量衆生皆令得道乃取滅度

【訓讀】 佛阿難に告たまはく、乃往過去久遠無量不可思議無央數

劫に、錠光如來世に興出て、無量の衆生を教化し度脫し、皆得道せしめて乃ち滅度を取たまへり。

【和解】 さても阿難の問に因て世尊出世の本懷を宣給ふべく、茲に淨土の門は開かれたので、是より阿彌陀如來の慈悲誓願を說給ふのであるが、先づ其初めに過去五十三佛の名を擧げ給ふた、卽ち阿難尊者に告げ給ひて、過去久遠劫の昔に錠光如來と云ふ佛が世に興出て、多くの衆生を教化せられ、皆其の得道を得せしめて乃ち涅槃に入り給ふた。

次有如來名曰光遠次名月光次名栴檀香次名善山王次名須彌天冠次名須彌等曜次名月色次名正念次名離垢次名無著次名龍天次名夜光次名安明頂次名不動地

【訓讀】 次に如來有す名けて光遠と曰ふ、次をば月光と名け、次をば栴檀香と名け、次をば善山王と名け、次をば須彌天冠と名け、次をば須彌等曜と名け、次をば月色と名け、次をば正念と名け、次をば離垢と名け、次をば無著と名け、次をば龍天と名け、次をば夜光と名け、次をば安明頂と名け、次をば不動地と名け。

次名瑠璃妙華次名瑠璃金色次名金藏次名燄光次名燄根次名地動次名月像次名日音次名鮮脫華次名莊嚴光明次名海覺神通次名水光次名大香

【訓讀】 次をば瑠璃妙華と名け、次をば瑠璃金色と名け、次をば金藏と名け、次をば燄光と名け、次をば燄根と名け、次をば地動と名け、次をは月像と名け、次をは日音と名け、次をは鮮脫華と名け次をば莊嚴光明と名け、次をば海覺神通と名け、次をば水光と名け次をば大香と名け。

次名離塵垢次名捨厭意次名寶燄次名妙頂次名勇立次名功德持慧次名蔽日月光次名日月瑠璃光次名無上瑠璃光次名最上首次名菩提華次名月明次名日光次名華色王

【訓讀】 次をば離塵垢と名け、次をば捨厭意と名け、次をば寶燄

と名け、次をば妙頂と名け、次をば勇立と名け、次をは功德持慧と名け、次をば蔽日月光と名け、次をば日月瑠璃光と名け、次をば無上瑠璃光と名け、次をば最上首と名け、次をば菩提華と名け、次をば月明と名け、次をば日光と名け、次をば華色王と名け。

次名水月光次名除痴暝次名度蓋行次名淨信次名善宿次名威神次名法慧次名鸞音次名師子音次名龍音次名處世

如此諸佛皆悉已過

【訓讀】 次をば水月光と名け、次をば除痴暝と名け、次をば度蓋行と名け、次をば淨信と名け、次をば善宿と名け、次をば威神と名け、次をば法慧と名け、次をば鸞音と名け、次をば師子音と名け、次をば龍音と名け、次をば處世と名く、此の如きの諸佛皆悉く已に過たまへり。

【和解】 以上錠光如來より數へて五十三佛であるが、此の如きの諸佛皆已に過ぎ給ふた後、次に出で給ふたのが世自在王佛で、卽ち阿彌陀如來の因位法藏比丘の師とせられた佛である。

爾時次有佛名世自在王如來應供等正覺明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊

【訓讀】 爾時次に佛有す、世自在王如來、應供、等正覺、明行足善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛世尊と名く。

【和解】 次に出給ふた佛を世自在王如來と號するので、世自在王とは漢譯にて梵語では樓夷亘羅と稱し、一切世間を利益するに自在なること王の如しとの義に因り、次下の段に世饒王佛と譯されたも同義である、如來應供及び佛世尊とあるのは之を佛の十號と稱して佛の德は元より無量無邊なれども、それを總括て十箇の勝德を表したので、一に如來と云ふのは漢譯で、梵語では多陀阿伽陀と云ひて、如來の道に乘じ來りて正覺を成じ給ふとの義に因り、二に應供とは人間天上の供養を受べき德を有し給ふ義で、梵語の阿羅訶を譯したのである、三に等正覺も亦た漢譯で梵語では三藐三佛陀と云ひて、正徧智とも譯してあるが、正しき智惠に因て覺を得給ふ義とし、四に明行足とは有ゆる行と證とを明めて、そ

れを圓滿具足し給ふ意味で、五に善逝とは佛の最初發心を善とし、最後涅槃を逝とするので、最初の發心を押通して終ひに涅槃を得給ふ義に因り、六に世間解とは世間一切の法を諒解し給ふ意味にて、七に無上士調御丈夫とは、人中に勝れしを無上士と云ひ、亦た丈夫とも云ふので、佛は無上最勝の德を有して一切衆生を統御調和し給ふこと丈夫の如しとの義に因り、八に天人師とは天上人間の師範なりとの意で、九に佛とは梵語の佛陀を略したので、自らも覺り他をも覺らしめ、それを滿足し給ふ義にして、十に世尊とは所有る德を具備して世の爲めに敬重せられ給ふ義である、是が佛の十號卽ち十德にて何なる佛も皆此十號を有し給へども、常には略して阿彌陀佛とか釋迦牟尼世尊とか稱するのである。

時有國王聞佛說法心懷悅豫尋發無上正眞道意棄國捐王行作沙門號曰法藏高才勇哲與世超異

【訓讀】時に國王有り、佛の說法を聞て心に悅豫を懷き、尋ち無上正眞の道意を發し、國を棄て王を捐て行じて沙門と作り、號して法藏と曰ふ、高才勇哲にして世と超異せり。

【句義】沙門は梵語にて諸善を勤修して諸惡を息るとの義に因て勤息と譯してある、高才勇哲とは才德他に勝れるを高才とし、意志堅固なるを勇哲と云。

【和解】世自在王如來が世に出給ふた時、國王が有て其佛の說法を聞き心に悅豫を懷きて、無上正眞の道意とある菩提心を發して、國を棄て王位を捐て沙門と作られた、それを法藏比丘と曰ひて世に超異たる才德と强固なる意志とを有する非凡の出家沙門であつた、但し法藏とは漢譯で梵語では曇摩迦留と云ひ、聞く所の敎法を護持して失はざる義に因り法積亦は法寶藏とも譯したのも有る、其國王たりし時の名を離垢淨王とも龍珍王とも傳へたのが有れども、無諍念王と稱するのが多數說である。

詣世自在王如來所稽首佛足右繞三帀長跪合掌以頌讃曰

【訓讀】世自在王如來の所に詣て、佛足を稽首し右に繞ること三帀、長跪合掌して頌を以て讃じて曰く。

【和解】勇哲にして世と超異せる沙門法藏は、世自在王佛の所に詣て佛足を禮拜し右に繞ること三帀なる敬意を表し、長跪し合掌して頌を以て佛德を讃へると俱に其志願を告白された、頌とは梵語に伽陀と稱して偈亦は諷誦とも云ふ、卽ち讃佛歌である。

光顏巍々威神無極如是淡明無與等者日月摩尼珠光淡曜

皆悉隱蔽猶若聚墨如來容顏超世無倫

【訓讀】 光顏巍々として威神極り無く、是の如きの燄明與に等き者無し、日月摩尼の珠の光の燄曜も、皆悉く隱蔽て猶し聚墨の若し如來の容顏は世に超て倫無し。

【和解】 是より以下は法藏比丘の讃佛歌で、佛の光顏は巍々として氣高く威神極りあること無く、其光明の燄明には與に等しきもの無くて、日月の光も摩尼といふ珠の曜燄も、佛の光に對しては皆な隱蔽て聚墨の如し、されば佛の容顏は更らに比倫ものが無い。

正覺大音響流十方戒聞精進三昧智惠威德無侶殊勝希有深諦善念諸佛法海窮深盡奧究其涯底無明欲怒世尊永無

【訓讀】 正覺の大音響き十方に流る、戒聞精進三昧智惠、威德侶無く殊勝希有なり、深諦こして善く諸佛の法海を念じ、深を窮め奧を盡して其涯底を究む、無明こ欲こ怒こ世尊は永く無し。

【句義】 正覺大音とは佛の音聲卽ち佛の敎化を云ひ、戒聞精進三味智惠は普通に云ふ戒

と定と慧との三にて、無明欲怒は愚痴貪欲瞋恚の三毒を云ふ。

【和解】 佛の敎化は十方世界に行亙り、爾かも戒定慧の三德を具へて殊勝希有にて在せば、深く諦かに諸佛の法海を念じて、其深を窮め其奧を盡し其涯底を究め給ふに因て、無明と欲と怒の如き三毒は、世尊に永く無いのである。

人雄師子神德無量功動廣大智慧深妙光明威相震動大千

【訓讀】 人雄師子神德無量なり、功動廣大にして智慧深妙なり、光明の威相大千を震動したまふ。

【句義】 人雄とは鳥の父を雄と云ひて其尊きものとするが如く、佛を尊びて人中の雄とし、師子は獅子にて獸中の王たるに因て、佛德の勝れしに譬へ、大千とは廣き世界を云ふ。

【和解】 されば佛は人中の雄にして、亦獅子獨歩して畏るゝ處無きが如く、無量威神の德を有して、敎化の功動廣大なれば智惠も亦深妙なり、其光明の威力は大千世界を震動し給ふばかりである。

願我作佛齊聖法王過度生死靡不解脫布施調意戒忍精進如是三昧智慧爲上吾誓得佛普行此願一切恐懼爲作大安

【訓讀】願くは我作佛して聖法王に齋く、生死を過度して解脫せずといふこと靡らん、布施調意戒忍精進、是の如きは三昧と智慧とを上たりと爲す、吾誓ふ佛を得まで普く此願を行じて、一切の恐懼も爲に大安を作ん。

【句義】布施調意とは六度の中の布施の行にて、其布施を修して慳貪を除くを調意と云ひ、戒忍精進は持戒忍辱精進の三度、三昧智惠は禪定と般若との二度にて、合して六度の修行を云ふ。

【和解】願くは我れ法藏も佛と作りて、聖法王なる諸佛と齊く生死の苦を離れて有ゆる業惑を解脫せん事を希望するので、それには菩薩としての六度の行を修し、佛を得るまで普く此願を行じて一切の衆生が恐懼として多くの苦みに對して恐れを懷きつゝ在るのを救ひ爲めに大安樂を得させん事を誓ふのである。

仮使有レ佛百千億萬無量大聖數如二恒沙一供養一切斯等諸佛一不レ如二求レ道堅正不レ却

【訓讀】仮使ひ佛有て百千億萬無量にして、大聖數恒沙の如くならんに、一切の斯等の諸佛を供養せんよりも、道を求て堅正にして却かざるには如ず。

【和解】たとひ百千億萬無量の佛が有て、其數恒河の沙の如くなる一切斯等の佛を供養するよりも、道を求めるとて上菩提を求めて下衆生を教化せんとする志願が、堅固にして退却せざるには如じ。

譬如二恒沙諸佛世界復不可計無數刹土光明悉照偏二此諸國一如レ是精進威神難レ量令二我作佛國土第一其衆奇妙道場超絶國如二泥洹一而無二等雙一

【訓讀】譬ば恒沙の如くなる諸佛世界、復た不可計無數の刹土あつて、光明悉く照して此諸國に偏からん、是の如く精進にして威神量り難からんに、我作佛の國土をして第一なら令ん、其衆奇妙にして道場超絶し、國泥洹の如くにして等雙無らん。

【句義】 ●●道場とは佛果の異稱にて、泥●●洹は梵語にて圓寂と譯し涅槃と同樣なる證の意味

【和解】 諸佛の淨土は無數にして、其數計るべからざること譬へば恒河の沙の如く、光明徧ねく是等の諸國を照し、精進にして怠り無く衆生を敎化し濟度し給ふ諸佛の威神は量り難い、けれども我れ法藏が佛と作りて構へんとする我淨土は、是等諸佛の國に比べて第一ならしめたい、其衆卽ち我淨土に生るゝ者は、奇妙とて最勝なる快樂神通の自在を得せしめ、道場超絶とて速かに佛果を成滿して、泥洹涅槃の域に達する事も、亦第一にして等雙もの無からしめたい。

我當哀愍度脫一切十方來生心悅淸淨已到我國快樂安穩

【訓讀】 我當に一切を哀愍し度脫すべし、十方より來生せんもの心悅淸淨にして、已に我國に到らば快樂安穩ならしめん。

【和解】 我當に一切衆生を哀愍して、濟度し解脫を得せしむ可く、是に依て十方世界より我淨土に來り生るゝものは、何れも淸き心の悅びを得て、快樂安穩ならしめたい。

幸佛信明是我眞證發願於彼力精所欲十方世尊智慧無礙常令此尊知我心行仮令身止諸苦毒中我行精進忍終不悔

【訓讀】 幸くは佛信明したまへ是我が眞證なり、願を彼に發せり所欲を力精せん、十方の世尊は智惠無礙なり、常に此尊をして我心行を知しめん、仮令身を諸の苦毒の中に止とも、我行は精進にして忍びて終に悔じ。

【和解】 幸くば佛之を證明し給へ、佛の證明は詐り無き眞證にして、我已に彼が如きの願を發しぬ、爾れば其所願を成就せん爲めの精進努力に眞證を與へ給へ、十方世尊は智慧無礙なれば常に我此の發心修行を知り給ふべく、假令我身は諸の苦毒の中に止とも、我行は精進にして退く事無く、何かなる艱難苦勞をも忍びて終に悔いざる可しと、佛德を讃へると俱に其志願を宣べて强固なる意志を告白された、是れが頌文の終である。

佛告阿難法藏比丘說此頌已而白佛言唯然世尊我發無上正覺之心願佛爲我廣宣經法我當修行攝取佛國淸淨莊嚴無量妙土令我於世速成正覺拔諸生死勤苦之本

【訓讀】 佛阿難に告たまはく、法藏比丘此頌を說已りて佛に白て

言さく唯然なり世尊我無上正覺の心を發せり、願くは佛我爲に廣く經法を宣たまへ、我當に修行して佛國淸淨なる莊嚴無量の妙土を攝取すべし、我をして世に於て速かに正覺を成じ、諸の生死勤苦の本を拔しめたまへ。

【和解】 法藏比丘此頌を宣べ終りて更に佛に白さるゝには、世尊我已に是の如く無上正覺の心を發せり、願くは我が爲めに廣く經法を宣給へ、我れ其經法に依て修行して淸淨なる莊嚴無量諸佛の妙土より、攝取とて劣れるを捨て勝れたるを選び、それを取て我が淨土とすべく、爾かも我をして速く正覺を成せしめ給ひて、一切衆生の勤苦の本を救濟せ給へと。

佛語二阿難一時世饒王佛告二法藏比丘一汝所二修行一莊嚴佛土汝自當レ知比丘白レ佛斯義弘深非二我境界一唯願世尊廣爲敷二演諸佛如來淨土之行一我聞此已當二如レ說修行成二滿所願一

【訓讀】 佛阿難に語たまはく、時に世饒王佛法藏比丘に告たまはく、汝が修行する處の莊嚴佛土は汝自ら當に知べし、比丘佛に白く斯義弘深にして我境界に非ず、唯願くは世尊廣く爲に諸佛如來の淨土の行を敷演たまへ、我此を聞已りて當に說の如く修行して所願を成滿すべし。

【和解】 世饒王佛とは前段の世自在王佛にして、其時法藏比丘に告げ給ふには、汗は汝の修行に在て我が經法を說く迄も無く、汝自ら之を知るべしと、比丘之を聞て重ねて白さるゝには其義元より弘深して我境界に非ずと、到底自己の及ばざる處なれば、唯願くは世尊爲めに諸佛如來の淨土の行を敷演たまへ、我それを聞きて其說の如く修行して、所願を成滿すべきにてあると。

爾時世自在王佛知二其高明志願深廣一卽爲二法藏比丘一而說レ經言譬如二大海一一人升量經二歷劫數一尙可二窮レ底得一其妙寶一人有二至心一精進求レ道不レ止會當二剋果一何願不レ得

【訓讀】 爾時世自在王佛其高明の志願の深廣なるを知めして、卽

ち法藏比丘の爲に經を說て言はく、譬ば大海の如きも一人升量して劫數を經歷ば、尙ほ底を窮めて其妙寶を得可し、人至心有て精進に道を求めて止ずんば、會ず當に剋果すべし、何れの願か得ざらんと

【和解】 爾時世自在王佛は此の法藏比丘の志願の高明にして、深廣なるを知めしたので譬喩を說て尙其意志を勵まし給ふた、譬へば大海の水を升量て汲干さんとするは人の力の爲し能ふべき處で無い、けれどもそれを劫數として長年月の間を經て止まざれば、終ひには底を窮めて妙寶を得ること、必ずしも絕無でなきが如く、人若し至誠を以て爾も撓まず怠らず、精進に道を求めたならば、會ず當に剋果すべしと其道を得ること難からず、されば汝も忍耐して精進に努力せば、何なる志願にても成就し得らるゝのであると。

於レ是世自在王佛卽爲廣說二一百一十億諸佛刹土天人之善惡國土之麤妙一應二其心願一悉現與レ之

【訓讀】 是に於て世自在王佛、卽ち爲に廣く二百一十億の諸佛刹土の、天人の善惡國土の麤妙を說て、其心願に應じて悉く現じて之を與へたまふ。

【和解】 是に於て世自在王佛は法藏比丘の求むる處の淸淨なる佛國を選び取らせんが爲めに、二百一十億の諸佛淨土に於ける善惡麤妙の諸相を說きて、某淨土は微妙なれども某淨土は其れに比べて劣れりとか、某淨土に在る天人は善淨なれども、某淨土に在る天人は稍や穢惡のものを交へたりとか、佛國淨土の名に於ては異り無けれど、二百一十億の其中には種々の淨土と其修行とに區別有ることを示して、尙ほ悉く現じて之を觀せしめ給ふた。

法藏比丘の五劫思惟

時彼比丘聞二佛諸說嚴淨國土一皆悉觀見超發無上殊勝之願一其心寂靜志無二所著一一切世間無能及者具足五劫思惟攝取莊嚴佛國淸淨之行一

【訓讀】 時に彼比丘、佛の所說の嚴淨の國土を聞き、皆悉く觀見して無上殊勝の願を超發す、其心寂靜にして志所著無く、一切世間能く及ぶ者無し、五劫を具足して莊嚴佛國淸淨の行を、思惟し攝取

す。

【和解】 此の時法藏比丘佛の所說を聞き且つ其國土を見て、無上殊勝の願を超發せられた、無上殊勝の願とは我れ何なる難行苦行を爲すとも、此の二百一十億の諸佛淨土の中より、善妙なるものを選び取り、それにも勝れる淨土を建立して、爾も容易く一切衆生を生れさせたしといふので有つて、其發心寂靜ければ一切世間之れに及ぶ者無く、扨てこそ五劫の長き年月を積みて、如何にせば勝れる淨土を建て得可きか、如何にせば容易く衆生を救濟せらるゝかと、思惟に思惟を重ねらるゝ事となつた、是を有名なる法藏比丘の五劫思惟と云ふのである。

阿難白レ佛彼佛國土壽量幾何佛言其佛壽命四十二劫時法藏比丘攝二取二百一十億諸佛妙土清淨之行一如是修已詣二彼佛所一稽首禮足繞レ佛三帀合掌而住白レ佛言世尊我已攝二取莊嚴佛土清淨之行一

【訓讀】 阿難佛に白さく、彼佛の國土の壽量幾何ぞや、佛の言はく其佛の壽命四十二劫なり、時に法藏比丘、二百一十億の諸佛妙土の清淨の行を攝取す、是の如く修し已りて彼佛の所に詣で、稽首して足を禮し佛を繞ること三帀合掌して住し、佛に白して言く世尊我已に莊嚴佛土の清淨の行を攝取すと。

【和解】 此の法藏比丘の五劫思惟と云ふ事を說き給ふに就て、阿難尊者は聊か不思議に思ふたので、彼佛の國土の壽量幾何ぞやと、五劫と云へば長の年月である、彼佛卽ち世自在王佛の壽命は幾何であるかと問奉つた、すると釋迦牟尼佛の御答には四十二劫である、四十二劫に對しての五劫思惟は何の不思議も無いと、扨て改めて說き給ふには、時に法藏比丘五劫思惟の間に於て、諸佛淨土の淸淨の行の中より勝れるを取り劣れるを捨て、選擇攝取されたので再び世自在王佛の所に詣で、稽首禮足の禮儀を盡し合掌して白さるゝには世尊我已に莊嚴佛土清淨の行を選び取りぬと。

佛告二比丘一汝今可レ說宜レ知是時發二起悅可一一切大衆菩薩聞已修二行此法一緣致レ滿二足無量大願一

【訓讀】 佛比丘に告たまはく、汝今説く可し宜く知べし是時なり一切の大衆を發起し悅可せしめよ、菩薩聞已らば此法を修行して、緣て無量の大願を滿足することを致さん。

【和解】 是を聞きて世自在王佛は法藏比丘に告給ひて、汝宜く之を説く可し今は卽ち其時である、汝がそれを説くを聞きて此坐に在る一切の大衆聲聞緣覺等は、發起悅可と皆悅可て大乘殊勝の心を發すべく、亦菩薩の如きは汝に同き心を以て願行を修し、それに緣て無量の大願を滿足すべしと勸め給ふた。

比丘白佛唯垂聽察如我所願當具説之

【訓讀】 比丘佛に白く、唯だ聽察を垂たまへ、我所願の如く當に具に之を説べし。

【和解】 是に依つて法藏比丘は世自在王佛に白して、唯だ聽察を垂れ給へと、願はくは我が説く處を聽きて是非の判斷を與へられたしとて、懇に所願を演べられた、それが卽ち四十八願にして、二百一十億の諸佛淨土の中より善妙なるものを選びて自己の淨土と爲し、爾も救濟の方法として最も容易き行を取られたは、未だ曾て諸佛に類例無き深重大悲

の誓願である。

設我得佛國有地獄餓鬼畜生者不取正覺

【訓讀】 設我佛を得たらんに、國に地獄餓鬼畜生有ば、正覺を取し。

【句義】 ●設我とは法藏比丘の卑下の辭にて、必ず佛を得らるべき身で有れども、此の發願の時には未だそれを得ざるに因り、不定卑下の辭を用ゐて設と言はれたので、其より以下は悕求として我佛を得たならば、斯く爲したきとて悕求らるゝ卽ち願にて、不取正覺とは其願若し叶はずば正覺に成らじとの誓言で、併せて之を誓願と云ひ四十八願一々に此誓願が有るのである。

【和解】 是より以下は所謂四十八願にして、其の第一を無三惡趣の願と名け、設我れ佛を得て構へ出せる我淨土には、地獄、餓鬼、畜生の三惡道の苦趣無からしめたい、若其れが叶ずして其苦趣有らば我が成佛は無効である、卽ち正覺に成らじとの誓願で、三惡道の苦みは有ゆる苦趣の中で最もそれが重いので有るから、先づ其苦を無らしめたき願意にして、法藏比丘が觀見せられた二百一十億多數諸國の中には、尙ほ其苦趣を交雜たのも有

第二不更惡趣

たので、其交雜て劣れるものを捨て、更に其れ無き善妙なるのを選び取られたのである。

設我得レ佛國中人天壽終之後復更三二惡道一者不レ取二正覺一

【訓讀】 設我佛を得たらんに、國中の人天壽終るの後、復た三惡道に更らば、正覺を取じ。

【和解】 たとひ前願の如く其國に三惡道の苦趣無からしめても、其國の人天が壽終りて後に三惡道に復更ことが有つては、何の甲斐無き事なればとて、我が淨土は無限で有りたい、他の諸國には壞劫とて其國自然に終滅こと有るとも、我が淨土は無限無終にして、我淨土に在る人天は再び三惡道に復更が如き不安無らしめん事を願はれたので、之を第二不更惡趣の願と云ふのである。

第三悉皆金色

設我得レ佛國中人天不悉眞金色一者不レ取二正覺一

【訓讀】 設我佛を得たらんに、國中の人天悉く眞金色ならずんば正覺を取じ。

【和解】 第三を悉皆金色の願と稱し、多數諸國の中には尙ほ白色とか黃色人種とか有るが如くに、色相が一樣ならぬので、我國の人天は皆悉く一樣に眞金色ならしめたしとの願で、眞金とは黃金にて他の白黃色等には種々變色する事あれども、黃金色にはそれが無いので常住不變の相として、諸佛の色相は皆其れである、是に依て我が淨土に在る人天の色相は變穉若くは種々雜多の色を交へず、皆一樣に諸佛と同き不變の色ならしめんとの意味である。

第四無有好醜

設我得レ佛國中人天形色不同有二好醜一者不レ取二正覺一

【訓讀】 設我佛を得たらんに、國中の人天形色不同にして好醜有ば、正覺を取じ。

【和解】 たとひ色相が一樣に眞金色なるとも、其形色が不同にして、好と醜きとがあらば遺憾である、是に依て我が國中の人天には其不同も亦た有ること無く、均しく好醜無らしめんとの願で、好醜無らしめんとは無論醜惡を嫌ひて、均等に好美き形色を得させんとの意味にして、之を第四無有好醜の願と名けるのである。

第五宿命智通

設我得レ佛國中人天不レ識二宿命一下至不レ知二百千億那由他諸劫事一者不レ取二正覺一

【訓讀】 設我佛を得たらんに、國中の人天宿命を識ず、下百千億

那由他諸劫の事を知ざるに至らば、正覺を取じ。

【句義】 宿命とは宿は過去にて命は生の義、卽ち過去世の意義にして、那由他とは千萬億を那由他とすとて、無量億劫と云ふ意味。

【和解】 第五を宿命智通の願と稱し、およそ吾人が惡事を恐れず善事を爲さぬは、畢竟此の宿命を解せぬからで、若し自他互ひに過去世の事を知つたならば、今現在に仇として怨むで居るのが、過去に在ては親き友で有たかも知れぬ、今現在に殺害せんと爲て居るのが、過去に在ては恩義を受けた人で有たかも知れぬと云事の諒解が有たならば、誰れとて惡を爲す者あらんや皆悉く善を修すべし、是に依て此願にては國中に在る人天其宿命として、百千億那由他劫の長く遠き間の過去より、下は一世亦は二世の近き過去世の事までも識らさせたしとの意味で、其智識を得るをば宿命智通と號し、六神通の一とするのである

設我得佛國中人天不得天眼下至不見百千億那由他諸佛國者不取正覺

【訓讀】 設我佛を得たらんに、國中の人天天眼を得ず、下百千億那由他諸佛の國を見ざるに至らば、正覺を取じ。

【和解】 第六を天眼智通の願と名け、亦是れ六神通の一で有て、吾人の肉眼は不完全にて障壁一重の向ふを見る事能はざれば、爲めに種々なる苦勞を爲して、尙ほ見違ひとか誤見とかをする事が多い、それに反して天眼は淸淨にして誤謬無く、爾かも如何なる處をも見透すことを得るので有から、國中に在る人天には其天眼を得せしめたい、若し其れを得ずして那由他多數の諸佛の國土を見る能はざれば、正覺を取らじと誓はれたのである。

設我得佛國中人天不得天耳下至聞百千億那由他諸佛所說不悉受持者不取正覺

【訓讀】 設我佛を得たらんに、國中の人天天耳を得ず、下百千億那由他の諸佛の所說を聞て、悉く受持せざるに至らば、正覺を取じ

【和解】 吾人の耳も亦た不完全で、唯だ遠方の音聲を聞くこと能はぬのみならず、近き音聲にても誤聞が有る、且つは聞きたる事柄を受持し記憶する事が出來ぬ、所謂る籠耳なるのが多い、是に依て國中の人天にはそれに反せる天耳を得せしめ、有ゆる諸佛の所說を聞きては信受し念持して菩提を求める因と爲し、亦は許多の苦痛の聲を聞ては其れを愍念して、救濟すべき心を發させたしとの願意で、之を第七天耳智通の願と稱するのである。

設我得佛國中人天不得見他心智下至不知百千億諸佛國中衆生心念者不取正覺

【訓讀】 設我佛を得たらんに、國中の人天見他心智を得ず、下百千億諸佛國中の衆生の心念を知ざるに至らば、正覺を取じ。

【和解】 吾人の意識も亦た不完全で、他人の意識を察知する事が出來ぬ、其爲め互ひに他を誤解し自己を損害されて、疑念と恐怖とを離るゝ事能はず、常に不安の絶間が無い、是に依て我が國中の人天には他人の意識を察知すべき、見他心智と云ふのを得させて諸國に在る衆生の心念を知らしめ、自他俱に安樂を得せしめたしと願はれたので、之を六神通の一として第八他心智通の願と云ふのである。

設我得佛國中人天不得神足於一念頃下至不能超過百千億那由他諸佛國者不取正覺

【訓讀】 設我佛を得たらんに、國中の人天神足を得ず、一念の頃に於て下百千億那由他の諸佛の國を、超過すること能ざるに至らば

正覺を取じ。

【和解】 第九を神境智通の願と稱し、國中の人天皆な神足と云ふのを得て、一念の頃とある須臾の程に那由他諸佛の國に至り、心の儘に供養をも爲し功德をも積させたしとの願意で、神足を得るとは必ずしも足にのみ通力を得ると云ふ意味には非ずして、其諸國に往來する事自在にして速疾なるを脚足に喩へられた、亦是れ六神通の一である。

設我得佛國中人天若起想念貪計身者不取正覺

【訓讀】 設我佛を得たらんに、國中の人天若し想念を起し身を貪計せば、正覺を取じ。

【和解】 想念を起すとは種々なる妄想にて見惑の煩惱とも云ひ、身を貪計するとは修惑の煩惱とも云ひて、種々なる妄業を造る意味で、亦は煩惱障、所智障とも云うて有るが、畢竟吾人が生死の苦を受けて輪回の迷ひを離るゝ事を得ぬのは、此の二惑煩惱の障り有るが爲めであるから、國中の人天には其想念を起させず身も亦た貪計させずして、爾かもそれをば漏盡とて所有る煩惱妄業を盡さしめたしと願はれたので、之を第十速得漏盡の願と云ひ、亦た六神通の一として漏盡智通と稱するのである。

以上第五願の宿命智通より、此の第十願の漏盡智通を併せて六神通と稱し、何れも修得とて其神通を得べきだけの業を修して、それを得るのが本意である、けれども此の第五及び第十の願力に因ては、生得とて其國中に生るゝものは何の造作も無くして其れが得らるゝので、卽ち諸佛淨土の中より選び取られた善妙なる國土の德にして、併ながら法藏比丘の大悲誓願の然らしむる處である。

設我得佛國中人天不住定聚心至滅度者不取正覺

【訓讀】 設我佛を得たらんに、國中の人天定聚に住し、必ず滅度に至らずんば、正覺を取じ。

【句義】 定聚とは正定聚とも云ひて處不退の義とし、處不退とは其處の德として、位地も修行も思想も信仰も、一旦得たるものは更に退下せぬ意味、滅度とは大乘涅槃の義にて佛果を得る義。

【和解】 第十一を住正定聚の願と名け、諸國の中には種々の障難が有て、一旦得たる位地を退下され、亦は信仰修行を妨害されて、一進一退容易に滅度の佛果に至り難いのを、此願に因て我が國中に在る人天は、處不退と云ひて國土卽ち處の德として、如何なる者にても必定して退下させまじとの義を正定聚に住すと云ひ、退下無くして進展向上の一路のみなれば、他の障難妨害を受けずして容易く滅度に至る事を得るのである。

設我得佛光明有能限量下至不照百千億那由他諸佛國者不取正覺

【訓讀】 設我佛を得たらんに、光明能く限量有て、下百千億那由他諸佛の國を照さざるに至らば、正覺を取じ。

【和解】 第十二を光明無量の願と稱し、我れ佛を得たならば、限量無き無量の光明を得て那由他諸佛の國々は云ふに及ばず、如何なる處をも照らしたしとの願意にして、此願成就せるに因て佛と成り給ふた阿彌陀如來を無量光佛とも稱し、諸佛如來に勝れたる光明の德を有し給ふのである。

設我得佛壽命有能限量下至百千億那由他劫者不取正覺

【訓讀】 設我佛を得たらんに、壽命能く限量有て、下百千億那由他劫に至らば、正覺を取じ。

【和解】 第十三を壽命無量の願と云ひ、我れ佛を得たならば、限量無き無量の壽命を得たしとの願意にして、斯くも無量の壽命を求め亦た無量の光明を願はるゝのは、自己滿足の爲めには非ずして、無盡大悲の然らしむる處で、無量の光明を以て無量の世界を照らし無量の壽命を以て無量の衆生を救濟せんが爲めに外ならず、是に依て此願成就して佛と成り給ふた阿彌陀如來を無量壽佛とも稱し、他の諸佛の如く涅槃には入り給はず常に在して說法活動し給ふのである。

設我得佛國中聲聞有能計量下至三千大千世界聲聞緣覺於百千劫悉共計校知其數者不取正覺

【訓讀】 設我佛を得たらんに、國中の聲聞能く計量有て、下三千大千世界の聲聞緣覺、悉く共に計校て其數を知に至らば、正覺を取じ。

【和解】 第十四を聲聞無數の願と稱し、聲聞とは大乘の菩薩に比べて卑く劣れる法位にして、報佛の淨土には二乘の死屍をも留めずとて、此の法藏比丘の構へ出さるべき淨土には、其影すら留めぬが本意である、けれども其れを在らしめて、爾かも三千大千世界に在る多數の聲聞緣覺が計校ても、尙ほ知ること能はぬ程の多數の聲聞を充滿させたしとの願意で、之を眷屬補翼の德として此の小乘の聲聞及び緣覺をして、速かに大乘の菩薩たらしめん爲めにてある。

設我得佛國中人天壽命無能限量除其本願脩短自在若不爾者不取正覺

【訓讀】 設我佛を得たらんに、國中の人天壽命能く限量無ん、其本願あつて脩短自在ならんをば除く、若爾らずんば正覺を取じ。

【和解】 第十五を眷屬長壽の願と云ひ、我が國中に在る人天の壽命も亦た我が得たる壽命の如くに、無量にして限量無らしめたい、けれども其人天に本願が有て、他國に生れたしとの事なれば、脩短自在とて壽命の長短は其人天の隨意自在で、意の儘に此國を去りて他國に行くことを得べしとて、其れを除くと云はれたので、爾かも其人天は既に生死の苦を離れし身なれば、吾人が受けるが如き死や短命には有らで、暫く其國を去ると云ふ迄にて、更に其苦を感せずして、再び其國に復歸ることも亦た隨意である。

設我得佛國中人天乃至聞有不善名者不取正覺

【訓讀】設我佛を得たらんに、國中の人天乃至不善の名有ことを聞ば、正覺を取じ。

【和解】不善の名とは惡逆破倫、不道德者犯罪人等の忌み嫌はるべき不愉快の名稱にて其上の句に乃至と有るのは名稱のみならず、其形體をも籠めたる意味で、某國土には假令ひ不善者の形體は無くとも、其名稱が在るのがある、亦た某國土には名實倶に在るのがあれども、我が國土には一切不善の形體は無論、其名稱すら無らしめたしと、卽ち淸淨なる佛國を期せられたので、之を第十六無諸不善の願と云ふのである。

設我得佛十方世界無量諸佛不悉咨嗟稱我名者不取正覺

【訓讀】設我佛を得たらんに、十方世界の無量の諸佛、悉く咨嗟して我名を稱せずんば、正覺を取じ。

【和解】第十七を諸佛稱揚の願と稱し、咨嗟とは讃嘆稱美の意味で、我れ佛を得たならば十方無量の諸佛如來の協贊同意を得て、皆悉く我名を咨嗟讃嘆せられたしとの願意にして、若し諸佛如來の讃嘆稱美せらるゝ事無くば、如何なる深重の誓願を建ても、如何なる善妙の淨土を構へても、世に知られずば無効である、普く衆生を救濟せんには、徧く世

界に宣傳さるべき必要が有るので、さてこそ斯くは願せられた、爾れば六方恒沙諸佛の稱讃證誠し給ふたも、釋迦牟尼佛が諸經に於て多くの讃嘆爲し給ふたのも、皆な此願成就に因る所以である。

設我得佛十方衆生至心信樂欲生我國乃至十念若不生者不取正覺唯除五逆誹謗正法

【訓讀】設我佛を得たらんに、十方の衆生至心に信樂して我國に生んと欲し、乃至十念せんに、若し生ぜずんば正覺を取じ、唯だ五逆と正法を誹謗することを除く。

【句義】至心とは至誠眞實の心にて、信樂とは深く信じて樂ひ求める意味、乃至とは下の十念に對して百千萬念と云ふ義にて、十念とは十聲の念佛と云ふ意味、五逆は父を殺し母を殺し、悟りを得たる人を殺し、和合を破り、佛身より血を出し佛像を破壞する五個の重罪にて、正法を誹謗すとは佛敎を誹謗して信せざる外道邪見の人を云

【和解】第十八を念佛往生の願と名けて、我れ佛を得たならば十方の衆生と十方世界に有ゆる善人も惡人も智者も愚者も、平等一樣に救濟せん事を願はれたので、其の十方衆

生が至心信樂とて深く信じて僞らざる心を以て我國に生れん事を欲し、乃至十念とて上は百千萬念の念佛より下は十聲の念佛まで、卽ち佛の名號なる南無阿彌陀佛と唱ふる者を、一人として漏らす事無く、皆悉く救濟して生れさせん、若し一人にても漏らす事有らば我れ正覺を取らじとの願意にして、他の諸佛の本願には種々面倒なる願と行とが有るに反して此の誓願は簡單にて生れたしとの心を以て願とし、念佛を以て行として其餘に何等の條件も無いから、十方衆生如何なる人にても、行じ易く修し易くて平等一樣に救濟せらるゝ事を得るので、之を萬機普益と云ふのである、けれども五逆と正法を誹謗するとは、重罪にして亦無信の人で有るから、如何ともする事能はずと除外された、除外されたとは云ひ乍ら大悲の徹底は父母の吾子を愛するにも增して、不孝の子をば憎めども尙ほ捨難きが如く、斯かる重罪無信をば抑止として誡め止めん爲めに、一旦除外されたるものゝ常に彼等を憐愍して、永久に捨られず必ず救濟せらるゝのである。

そも此の十八願を王本願とも稱して、四十八願一々に善妙なりとは云ひ乍ら、此の本願無くして十方衆生が生れずば、他の誓願は徒爾である、無三惡趣も六神通も生るゝ事を得てこそ其効が有るのであるから、他は伴にして是は主なりとて王の意味とし、亦生因本願とも云ひて、其國に生るべき生因はと云へば他の修し難き諸行には非ずして、最も行じ易き口稱の念佛を以て生因卽ち本願とせられた、それこそ二百一十億諸佛刹土の中より、選び取られた最勝善妙なるものにして、是を元祖大師法然上人の選擇本願念佛集には易の義と勝の義有りとして、左の如く示してある。

問て曰く、何故に第十八願に一切の諸行を選捨て、唯偏に念佛の一行を選取て往生の本願と爲し給ふや、答て曰く聖意測り難し輙く解すること能はず、然りと雖も今試みに二義を以て之を解せんに、一には勝劣の義、二には難易の義あり、初めに勝劣とは、念佛は是れ勝、餘行は是れ劣なり、所以は何ん、名號は是れ萬德の歸する所なり、然らば則ち彌陀一佛に所有る四智三身十力四無畏等の一切の內證の功德、相好光明說法利生等の一切の外用の功德、皆悉く阿彌陀佛名號の中に攝在たり、故に名號の功德を最も勝れたりと爲す、餘行は然らず各一隅を守る、是を以て劣とす、譬へば世間の屋舍名字の中には、棟梁椽柱等一切の家具を攝すれども、棟梁等の一々の名字の中には、一切を攝すること能はざるが如し、是を以て知る應し、然らば則ち佛の名號の功德は、餘の一切の功德に勝れり、故に劣を捨て勝を取り以て本願と爲たまふ歟、次に難易の義とは、念佛は修し易く諸行は修し難し、是の故に往生禮讚に云はく、問て曰く何故に觀を作さしめず直に專ら名字を稱せしむるは、何意有りや、答て曰く乃ち衆生障り重く境細に心麤に

して、識颺り神飛で觀成就し難きに由る、是を以て大聖悲憐して直に勸めて專ら名字を稱せしむ、正しく稱名易きが故に相續して卽ち生ずるに由ると、又往生要集に問て曰く一切の善業は各利益有て各往生を得べし、何故に唯だ念佛の一門を勸むるや、答て曰く今念佛を勸むるは、是れ餘の種々の妙行を遮せんとには非ず、只是れ男女貴賤行住坐臥を簡ばず、時處諸緣を論せず、之を修するに難からず、乃至臨終に往生を願求するに、其便宜を得ること念佛に如ざればなりと、故に知りぬ念佛は易なるが故に一切に通じ、諸行は難きが故に諸機に通せず、然らば則ち一切衆生をして平等に往生せしめん爲めに難を捨て易を取りて以て本願と爲したまふ歟、若夫れ造像起塔を以て本願と爲したまはゞ、貧窮困乏の類は定めて往生の望みを絶たん、然るに富貴の者は少く貧賤の者は甚多し、若し智慧高才を以て本願と爲したまはゞ、愚鈍下智の者は定めて往生の望みを絶たん、然るに智慧ある者は少く愚痴なる者は甚多し、若し多聞多見を以て本願と爲したまはゞ、少聞少見の輩は定めて往生の望みを絶たん、然るに多聞の者は少く少聞の者は甚多し、若し持戒持律を以て本願と爲したまはゞ、破戒無戒の人は定めて往生の望みを絶たん、然るに持戒の者は少く破戒の者は甚多し、自餘の諸行是に準じて知るべし、當に知るべし上の諸行等を以て本願と爲したまはゞ、往生を得る者は少く往生せざる者は甚多し、然らば則ち彌陀如來は法藏比丘の昔、平等の慈悲に催されたまひて普く一切を攝せんが爲に、造像起塔等の諸行を以て往生の本願と爲したまはず、唯だ稱名念佛の一行を以て、其本願と爲し給へり。

設我得佛十方衆生發菩提心修諸功德至心發願欲生我國臨壽終時假令不與大衆圍繞現其人前者不取正覺

【訓讀】設我佛を得たらんに、十方の衆生菩提心を發して諸の功德を修し、至心に發願して我國に生ぜんと欲せば、壽終る時に臨みて、假令大衆と與に圍繞せられて、其人の前に現ぜずんば、正覺を取じ。

【和解】第十九を來迎引接の願と稱し、我れ佛を得たならば十方の衆生が菩提心とある信心を發して諸の功德を修し、至誠にして僞らざる心を以て我國に生れん事を願はゞ、其人が壽終りて往生すべき時に到り、許多の菩薩聖衆と俱に其人の前に現じて、我國に迎接べしとの願意である、そもや吾人の往生は特に來迎せられずとも、前段の十八願にて更に何等の不足も無い、けれども死の緣は無量にして、爾も臨終の一念は平生百年の業にも

勝ると、豫て覺悟の人にても往々にして取亂さるゝ事が多い、況んや三種の愛心とて苦痛も有れば悲哀も有て、種々なる魔障を受ける事あり、爾れば其等の苦痛を救ひ身心俱に安らかに、往生させんとての來迎にて　念佛往生の上に尙ほ此願を建てられたに因つて、是を二重の大悲とも云ふのである。

設我得佛十方衆生聞我名號係念我國植諸德本至心回向欲生我國不果遂者不取正覺

【訓讀】　設我佛を得たらんに、十方の衆生我が名號を聞きて念を我國に係け、諸の德本を植て至心に回向して我國に生ぜんと欲せんに、果遂せずんば正覺を取じ。

【句義】　德本とは念佛にして亦餘行にも通じ、果遂とは果し遂げると云ふ義にて、本意を達する意味。

【和解】　第二十を係念定生の願と云ひ、我れ佛を得たならば十方の衆生にして、我名を聞いて我れを念じ念佛及び其他の功德を修して、我國に生れん事を欲せば、必ずそれを果し遂げさせ、其本意を達せしめんとの願意であるが、既に念佛往生の願有る上に、亦もや此樣なる願を建られたは、別に理由の有る事にて、彼れは順次の往生として今生にて佛を念じ、今生にて救濟さるゝ卽ち順調の往生なるが、是れは順後の往生として前生亦は今生にても、一旦我れを念せし者が或は何かの障礙を受け或は自ら信心を退却して、彼の順調の往生を得ざるとも、我れに結緣せし者ならば、假令ひ前生にて叶はずば今生にて、今生にて遂げずば來生にて必ず本意を遂げさせんとて果遂せずんば正覺を取らじと誓はれたので、是を呑鉤の魚に喩へられて一たび鉤針を呑みたる魚は、水に在ること久しからずと、是非に一度は釣り上げらるゝが如く、彌陀に結緣せし者は假令ひ順次の往生は得ざるとも、必ず順後の生に於て救濟さるべき、用意周到にして極めて親切なる誓願である、其の前生亦は後生と云ふに對して、是を三生果遂の願とも名けたのが有れども、願意の周到なるは豈曾三生のみに止まらんやで、實は遠生にて四生五生にも通ずるのである。

設我得佛國中人天不悉成滿三十二大人相者不取正覺

【訓讀】　設我佛を得たらんに、國中の人天悉く三十二大人の相を成滿せずんば、正覺を取じ。

【和解】　大人相とは三十二相を具備し給ふ佛相にて、それを一相として缺くる事無きを

成滿と云ひ、我が國中の人天には悉く佛相に異り無き、三十二相を具備させんとの願で元來三十二相は修得とて、それに相應せる修行の功を積まずば、菩薩にても具備する事を得ぬのが本意なれども、此の誓願に因つては生得として、其國の人天悉く一相をも缺くる事無く、具備成滿する事を得るので、之を第二十一三十二相の願と名け、其三十二相の名目は左の如くである。

足下安平　同千輻輪相　手足指長　同柔輭　同指合　足跟滿足　足趺高好　伊尼延鹿王
立手摩膝　陰藏如馬　身縱廣等　身毛青色柔輭　毛上向右旋　金色光　身光面各一丈
皮膚細滑　手足七處滿　兩腋下滿　身如師子王　身端直　肩圓好　四十齒具足　齒白
密根　四牙白大　頰如師子　舌至髮際　得味中上味　梵音深遠　眼色如金精　眼睫如牛
王　眉間白毫　頂上肉髻

設我得佛他方佛土諸菩薩衆來生我國究竟必至一處補處除其本願自在所化爲衆生故被弘誓鎧積累德本度脫一切遊諸佛國修菩薩行供養十方諸佛如來開化恒沙無量衆生使立無上正眞之道超出常倫諸地之行現前修習普賢之德

若不爾者不取正覺

【訓讀】設我佛を得たらんに、他方佛土の諸の菩薩衆、我國に來生せば究竟して必ず一生補處に至らん、其本願あつて自在の化する處、衆生の爲の故に弘誓の鎧を被て、德本を積累し一切を度脫し、諸佛の國に遊びて菩薩の行を修し、十方の諸佛如來を供養し、恒沙無量の衆生を開化して、無上正眞の道を立使んをば除く、常倫諸地の行を超出し、現前に普賢の德を修習せん、若爾らずんば正覺を取じ。

【句義】●一生とは一重と云ふ意味にて、●補處とは佛の候補者にて其れが佛位に補さるべきは、僅に一重の近きに在りとの義を一生補處と云ひ、●弘誓鎧とは大悲誓願の强固なるを鎧に喩へ、●無上正眞道とは菩提心と云ふ意味。

【和解】第二十二を必至補處の願と稱し、我れ佛を得たらんには、他の諸佛國土の菩薩にして我國に來生せば、必ず佛の候補者たる一生補處の位に至らしめん、けれども其菩薩

にして本願が有て其位に就くよりは寧ろ下位にして自在に一切衆生を教化したいとの意樂にて、弘誓の鎧を被ると精進堅固の大慈悲を以て、如何なる處にも到りて其衆生に德本を積ましめ、亦は諸佛の淨土に往きて十方無量の諸佛を供養し、且つは菩薩の修行を爲して多數の衆生に無上正眞の道と有る菩提心を發させんとの事なれば、元よりそれは隨意にして、爾も我國に來生せる菩薩には、常倫諸地の行とある普通定範の階級を超越させ、普賢菩薩の德を修習して、菩薩最上の德に達せしめんとの意味で、他の佛國に在る菩薩に對しての誓願である。

設我得佛國中菩薩承佛神力供養諸佛一食之頃不能徧至無數無量那由他諸佛國者不取正覺

【訓讀】 設我佛を得たらんに、國中の菩薩佛の神力を承て諸佛を供養せんに、一食の頃に徧く無數無量那由他の諸佛の國に至ることを能はずんば、正覺を取じ。

【和解】 第二十三を供養諸佛の願と云ひ、是より以下の四願は自國の菩薩の爲めに建られたので、我が國中の菩薩にして他の諸佛を供養するに、一食の頃と少時の間に無數無量

の國に至り、徧く諸佛を供養させて、無量の功德を得せしめたしとの願意である。

設我得佛國中菩薩在諸佛前現其德本諸所欲求供養之具若不如意者不取正覺

【訓讀】 設我佛を得たらんに、國中の菩薩諸佛の前に在て其德本を現ぜんに、諸の欲求る所の供養の具、若し意の如くならずんば、正覺を取じ。

【句義】 此願に德本と有るのは、供養の具と云ふ意味にて、其れに因つて功德を生ずる義、供養の具とは供養を爲すべき物品器具の義で、華、香、音樂、幢幡寶蓋、亦は飯食、衣服、臥具、醫藥の類を云ふ。

【和解】 第二十四を供具如意の願と稱し、我が國中の菩薩にして前願の如く、徧く諸佛を供養して功德の本を爲さんとするに、其供養すべき物品器具の類が、欲求まゝに現前すべし、若し其れが意の如くにならざれば、我れ正覺を取らじとの願意である。

設我得佛國中菩薩不能演說一切智者不取正覺

【訓讀】 設我佛を得たらんに、國中の菩薩一切智を演說すること能ずんば、正覺を取じ。

【和解】 此願は國中の菩薩に最大の智力を與へたしとの意味で、一切智とは佛智不思議の力を云ひ、我が國中の菩薩には、佛に異らぬ智力を得させて、如何なる不思議不可解の事をも自由に演說させたしと願はれた、之を第二十五說一切智の願と云ふのである。

設我得レ佛國中菩薩不レ得二金剛那羅延身一者不レ取二正覺一

【訓讀】 設我佛を得たらんに、國中の菩薩、金剛那羅延身を得ずんば、正覺を取じ。

【和解】 前願は智力で有たが此願は尙ほ其れに加へて、最大强固の體力を與へたしとの意味で、金剛とは金中の精牢にして不可壞の物であるから、身體の强固なるに喩へ、那羅延とは天上力士の名で、勝力と飜譯して其力の强きに喩へられた、爾れば我が國中の菩薩には唯だ智力の最勝なるのみならず、體力も亦た强固にして如何なる事にも堪へ得べき、金剛那羅延の如き身體を與へたしとの願意で、之を第二十六那羅延身の願と稱するのである。

設我得レ佛國中人天一切萬物嚴淨光麗形色殊特窮レ微極レ妙無二能稱量其諸衆生乃至逮二得天眼一有二能明了辨二其名數一者不レ取二正覺一

【訓讀】 設我佛を得たらんに、國中の人天一切の萬物嚴淨光麗にして形色殊特なり、微を窮め妙を極めて能く稱量こと無らん、其諸の衆生乃至天眼を逮得ても、能く明了に其名數を辨ずること有ば、正覺を取じ。

【和解】 第二十七を所須嚴淨の願と稱し、我が國中の人天が須る所の一切の萬物、器具物品悉く形色俱に嚴淨して、精巧微妙を極めたれば、假令ひ天眼を得た者にても、それを稱量て知る事能はず、其名數すらも明了に辯ずる事が出來ざる程の、一切萬物を所用させたしとの願意である。

設我得レ佛國中菩薩乃至少功德者不レ能レ知二見其道場樹無量光色高四百萬里一者不レ取二正覺一

【訓讀】 設我佛を得たらんに、國中の菩薩乃至少功德の者も、其道場樹の無量の光色あつて、高さ四百萬里なるを知見すること能はずんば、正覺を取じ。

【和解】 道場樹とは佛道を成ずる場所に在る樹木と云ふ意味で、例せば釋迦牟尼佛が成道し給ふた印度の佛陀伽耶に在る菩提樹の如きが其れで、此願にては法藏比丘が成道して阿彌陀如來と成り給へる場所に在る樹木にして、それを見ること容易に非ず、假令ひ眼に之を見るとても、意識を以て其の理由因緣を知る事が難いので、それをば知見と云ひて意知了解する事を得ば、無量の利益を受けるとして有る、爾れば我が國中の菩薩、乃至菩薩以下なる少功德の者にても、皆悉く其の道場樹の無量の光色有て、高さ四百萬里なるを知見させたし、若しそれを知見する事能はずば、我れ正覺を取らじとの願意にして、四百萬里とあるのは必ずしも數量に限局が有るのでは無い、唯だ高遠なる事を示めされたに過ぬ、之を第二十八見道場樹の願と云ふのである。

設我得佛國中菩薩若受讀經法諷誦持說而不得辨才智慧者不取正覺

【訓讀】 設我佛を得たらんに、國中の菩薩、若し經法を受讀し諷誦持說して、辨才智慧を得ずんば、正覺を取じ。

【和解】 第二十九を得辨才智の願と云ひ、我が國中の菩薩にして經法を受讀すとて、經典を口受せられ、亦は諷誦とて暗記持說する者には、辨才智慧を得せしめんとの願意で、辯才とは巧辨とて如何なる者に對しても、能く其耳に入りて諒解し易き辯舌を云ひ、智慧とは唯だ口頭の辯舌のみならず、能く其の經典の深義を知りて分別解說する意味である。

設我得佛國中菩薩智慧辨才若可限量者不取正覺

【訓讀】 設我佛を得たらんに、國中の菩薩、智慧辨才若し限量すべくんば、正覺を取じ。

【和解】 前願に因つて辨才智慧を得たりとしても、それに限量が有るならば未だ滿足とは云ふ可からず、爾かも智辯の無窮なるは獨り佛の得給ふ所で、菩薩と雖も無限の辯舌は得られぬのである、是に依つて更に此願を建て、國中の菩薩には佛と同樣なる、無窮の智慧辨才を得させんとの意味にして、之を第三十智辨無窮の願と名けるのである。

設我得佛國土清淨皆悉照見十方一切無量無數不可思議

諸佛世界猶如明鏡覩其面像若不爾者不取正覺

【訓讀】 設我佛を得たらんに、國土淸淨して皆悉く、十方一切無量無數不可思議の、諸佛世界を照見すること、猶し明鏡をもつて其面像を覩るが如くならん、若爾らずんば正覺を取じ。

【和解】 第三十一を國土淸淨の願と稱し、我が作佛せる國土には淸淨なる光明有て、其光明中に於て十方無量諸佛の世界を照現せられ、居乍らにして其れを見る事、猶し明鏡を以て自ら面像を覩るが如くならんと、手に取る如く鮮明にして明瞭なるを、鏡を以て見るに喩へられたのである。

設我得佛自他已上至于虛空宮殿樓觀池流華樹國中所有一切萬物皆以無量雜寶百千種香而共合成嚴飾奇妙超諸人天其香普薰十方世界菩薩聞者皆修佛行若不如是者不取正覺

【訓讀】 設我佛を得たらんに、地より已上虛空に至るまで、宮殿樓觀池流華樹國中の所有る萬物、皆無量雜寶百千種の香を以て共に合成し、嚴飾奇妙にして諸の人天に超ん、其香普く十方世界に薰じて、菩薩聞く者は皆佛行を修せん、若是の如くならずんば、正覺を取じ。

【和解】 第三十二を國土嚴飾の願と云ひ、我が成佛の國土に於ては地より已上虛空に至る迄の、宮殿樓閣池流華樹、國中有ゆる一切の萬物は、皆な無量の雜寶と百千種の香とを以て合成せられて嚴飾れたれば、其の香薰と云ひ其の色彩と云ひ、諸佛國土の人天に超絕して奇妙を極むべく、爾かも其香十方世界に薰じ亘りて菩薩其他の聞く者をして、佛行を修するの法緣たらしめんとの願意である。

設我得佛十方無量不可思議諸佛世界衆生之類蒙我光明觸其身者身心柔軟超過人天若不爾者不取正覺

【訓讀】 設我佛を得たらんに、十方無量不可思議諸佛世界の衆生の類、我が光明を蒙て其身に觸ん者は、身心柔軟にして人天に超過

せん、若爾らずんば正覺を取じ。

【和解】 前段の第十二願に於ては佛身光明の無量ならん事を願はれたが、此願にては其無量光明の照益を誓はれたので、衆生の類とは人天のみならず鬼畜の類をも籠めたる意味にて、我が光明は遍く照らして、十方世界の衆生の類が其光明に觸れたならば、身心柔軟にして有ゆる人天に超えたる利益を得させんとの願意である、身心柔軟とは吾人に三毒亦は三垢と云へる煩惱卽ち貪欲、瞋恚、愚痴の三が有つて、其の爲め種々の惡業を造るので有るが、此光明を蒙る者は先づ其の瞋恚を柔軟せられ、併せて貪欲愚痴をも柔軟せらる、柔軟とは消滅の意味で、此光明に觸れたる者は假令ひ如何なる人にても、三毒煩惱を消滅せるに因つて、普通常人に超絕すべき理である、それをば人天に超過すと云ひて、之を第三十三觸光柔軟の願と稱するのである。

設我得佛十方無量不可思議諸佛世界衆生之類聞我名字不得菩薩無生法忍諸深總持者不取正覺

【訓讀】 設我佛を得たらんに、十方無量不可思議諸佛世界の衆生の類、我が名字を聞て、菩薩の無生法忍諸の深總持を得ずんば、正

覺を取じ。

【句義】 無生法忍とは菩薩の法位に數段の階級有る中で、三賢と云ふ法位の證を云ひ、深總持とは所有る功德を總包せる意味。

【和解】 我が名字とは法藏比丘成佛の名字卽ち彌陀の名號にして、十方世界の衆生の類が彌陀の名號を聞きて、往生を願ふとならば如何なる者に至る迄も、無生法忍と云ふ菩薩の法位を得せしめ、且つは諸の功德を包有せる總持の德を與へたしとの願意にて、之を第三十四聞名得忍の願と稱し、特に聞名の德有る事を誓はれたのである。

設我得佛十方無量不可思議諸佛世界其有女人聞我名字歡喜信樂發菩提心厭惡女身壽終之後復爲女像者不取正覺

【訓讀】 設我佛を得たらんに、十方無量不可思議諸佛世界に、其れ女人有て我名字を聞て、歡喜信樂して菩提心を發し女身を厭惡せんに、壽終りて後復た女像と爲ば、正覺を取じ。

【和解】 第三十五を女人往生の願と稱し、第十八願の十方衆生と云ふ中には、一切善惡の機類を籠めて、女人と雖も漏らし無けれど、爾かも女人は五の障り有りとして多くの淨土に嫌はれたれば、特に此願を以て其往生の義を鮮明されたので、十方世界の女人にして他の淨土に嫌はるとも、彌陀名號の德に因つては必ず往生する義を聞き、歡喜信樂して歡びて之を信じ、女身を厭惡と俱に菩提心を發すとて、其國に往生せん事を願ひなば、救濟るゝ事疑ひ無く、更に再び障り多き女像と爲らば、我れ正覺を取らじとの誓ひにて、十八願の其上に重ねて此願を建られたは、特に女人を慰安せらるゝ亦是れ二重の慈悲である。

設我得佛十方無量不可思議諸佛世界諸菩薩衆聞我名字壽終之後常修梵行至成佛道若不爾者不取正覺

【訓讀】 設我佛を得たらんに、十方無量不可思議の諸佛世界の諸の菩薩衆、我が名字を聞て壽終の後、常に梵行を修して佛道を成ずるに至らん、若爾らずんば正覺を取じ。

【句義】 梵行とは淨行との義にて、戒と定と慧とを兼ねたれども、戒行を主とする意味。

【和解】 第三十六を常修梵行と云ひて、他國の菩薩の爲めに建られた願で、假令ひ勝れ

し戒定慧三學の行を爲すとも、隔生卽忘として一生を終りて、亦更に再び生を受ける時には前生の修學を忘却するのが常例である、是に依つて我れ佛を得たらんには、十方世界の諸菩薩衆にして、我が名號を聞く事有らば、壽終る後までも隔生卽忘する事無く其常例を破りて梵行を相續させ、永く退轉せしめずして成佛に至らしめんとの願意である。

設我得佛十方無量不可思議諸佛世界諸天人民聞我名字五體投地稽首作禮歡喜信樂修菩薩行諸天世人莫不致敬若不爾者不取正覺

【訓讀】 設我佛を得たらんに、十方無量不可思議の諸佛世界の諸天人民、我名字を聞て五體投地し、稽首作禮し歡喜信樂して菩薩の行を修せんに、諸天世人敬を致さずといふこと莫らん、若爾らずんば正覺を取じ。

【和解】 第三十七を人天致敬の願と稱し、有ゆる世界の有ゆる人民が彌陀の名を聞きて五體を地に投げ稽首作禮の敬意を表し、歸依渴仰の想ひを爲して、歡喜び信じて菩薩の行

を修すと、六波羅蜜の修行を爲さば、其人卽ち他の諸天世人より尊敬せらるゝ事を得させたしとの願意にして、菩薩の行とは六波羅蜜なれども、聞我名字とある稱名念佛の中には其行をも籠めて有るので、卽ち阿彌陀佛に歸依渴仰して、稱名念佛する者は卽ち世人より信賴致敬せらるゝのである。

設我得佛國中人天欲得衣服隨念卽至如佛所讃應法妙服自然在身若有裁縫擣染浣濯者不取正覺

【訓讀】 設我佛を得たらんに、國中の人天衣服を得んと欲せば念に隨ひて卽ち至ること、佛所讃の應法の服妙自然に身に在が如くならん、若し裁縫擣染浣濯すること有ば、正覺を取じ。

【和解】 衣食住の三は皆な人の欲する所で、爾かも衣服は暫時と雖も無かる可からざるもので有るから、其爲め身心を勞苦して罪業を造るのが尠からぬ、是に依つて我が國中の人天にして、衣服を得んとする者有らば、其念の儘に勞苦を爲さずして卽ち至ること、佛所讃の應法の妙服が自然に身に在る如くならしめ、裁縫擣染浣濯とて永く裁縫や洗濯等の手數無からしめんとの願意にして、佛所讃の應法の妙服とは諸佛の稱讃せらるゝ法衣卽ち袈裟にて、體と色と量との三が法に應ふとの義に因つて、應法の妙服と名けられ、それを佛が善來比丘と宣給へば、忽ち比丘の身に袈裟を得たとの意味を以て、自然に身に在るが如くならんと誓はれた、之を第三十八衣服隨念の願と稱するのである。

設我得佛國中人天所受快樂不如漏盡比丘者不取正覺

【訓讀】 設我佛を得たらんに、國中の人天受る所の快樂、漏盡比丘の如くならずんば、正覺を取じ。

【和解】 艱苦を嫌ひて快樂を得んとするは、皆な人の欲する所である、けれども其快樂に執着すれば、卽ち迷惑となりて所謂る樂は苦の因となるのが多い、是に依つて我が國中の人天には、無量の快樂を受けさせ乍ら、爾かもそれに執着せざる事、漏盡比丘の如くならしめんとの願意にて、漏盡比丘とは聲聞羅漢の中で優れし證を得た人と云ふ意味で、其人なれば一切の快樂に對して無着無執で有るから其執着無きをそれに喩へられた、之を第三十九受樂無染の願と云ふのである。

設我得佛國中菩薩隨意欲見十方無量嚴淨佛土應時如願於寶樹中皆悉照見猶如明鏡覩其面像若不爾者不取正覺

【訓讀】 設我佛を得たらんに、國中の菩薩意に隨ひて、十方無量の嚴淨の佛土を見んと欲せば、時に應じて願の如く、寶樹の中に於て皆悉く照見せんこと、猶し明鏡をもつて其の面像を覩が如くならん、若爾らずんば正覺を取じ。

【和解】 第四十を見諸佛土の願と稱し、我が國中の菩薩にして十方無量の嚴淨佛土を見んと欲する事有らば、其の念願に應じて寶樹の中に於て、其れを照見こと明鏡を以て自己の面像を覩るが如くならしめん、若爾らずば正覺を取らじとの誓ひである。

設我得佛他方國土諸菩薩衆聞我名字至于得佛諸根闕陋不具足者不取正覺

【訓讀】 設我佛を得たらんに、他方國土の諸の菩薩衆、我名字を聞て佛を得るに至るまで、諸根闕陋して具足せずんば、正覺を取じ

【和解】 諸根とは眼耳鼻舌身等の六根にて、闕陋とは其六根が醜惡にして不具なる意味で諸根不具足闕陋は八難中の隨一として、假令ひ菩薩たりと雖も六住定と云ふのを得る迄

は、往々にして此の不具足有ることを免れぬ、けれども我が名字を聞く菩薩衆は、其成佛に至るまで清淨なる諸根を得て、不具闕陋無からしめんとの願意にして、之を第四十一諸根具足の願と名けるのである。

設我得佛他方國土諸菩薩衆聞我名字皆悉逮得清淨解脫三昧住是三昧一發意頃供養無量不可思議諸佛世尊而不失定意若不爾者不取正覺

【訓讀】 設我佛を得たらんに、他方國土の諸の菩薩衆、我名字を聞て皆悉く清淨解脫三昧を逮得せん、是の三昧に住して一たび意を發さん頃に、無量不可思議の諸佛世尊を供養して、定意を失せざらん、若爾らずんば正覺を取じ。

【和解】 三昧とは定と云ふ義にて、其三昧に因つて煩惱妄業の繫縛を離れしを清淨解脫と云ひ、我れ佛を得たらんには、他方國土の菩薩にても、我が名を聞きて皆悉く其清淨なる解脫三昧に達する事を得せしむべく、爾かも無量不可思議の諸佛を供養せんとするに

第四十三 生尊貴家

は、其三昧の定より起ねばならぬけれども、我が名を聞きたる菩薩は入定出定其儘に、諸佛世尊を供養する事隨意ならしめんとの願意で、之を第四十二住定供佛の願と云ふのである。

設我得佛他方國土諸菩薩衆聞我名字壽終之後生尊貴家若不爾者不取正覺

【訓讀】 設我佛を得たらんに、他方國土の諸の菩薩衆、我名字を聞て壽終の後、尊貴の家に生ぜん、若爾らずんば正覺を取じ。

第四十四 具足德本

【和解】 第四十三を生尊貴家の願と稱し、假令ひ菩薩たりとても卑賤の身を以ては、思ひの儘に他を利益する事能はず、尊貴の家に在つてこそ自由自在の敎化が出來る、爾かも菩薩の法位に依つては、尙ほ卑賤の身を受けざるを得ぬので、我れ佛を得たならば、他方國土の菩薩にても我名字を聞かば、皆悉く尊貴の家に生れしめて、自由自在に敎化させんとの願意である。

設我得佛他方國土諸菩薩衆聞我名字歡喜踊躍修菩薩行具足德本若不爾者不取正覺

【訓讀】 設我佛を得たらんに、他方國土の諸の菩薩衆、我名字を聞て歡喜踊躍し、菩薩の行を修して德本を具足せん、若爾らずんば正覺を取じ。

第四十五 住定見佛

【和解】 第四十四を具足德本の願と云ひ、我れ佛を得たらんには、他方國土の菩薩にして我が名字を聞きて歡喜踊躍とて、踊らんばかりの歡びを爲して、菩薩の行とある六波羅密の修行を爲さば、容易く德本を具足せんとの意味で、歡喜踊躍する程なれば、其行懈怠する事無くて容易く圓滿することを得べく、其圓滿せるのが成佛の本であるから、それをば具足德本と云ふのである。

設我得佛他方國土諸菩薩衆聞我名字皆悉逮得普等三昧住是三昧至于成佛常見無量不可思議一切諸佛若不爾者不取正覺

【訓讀】 設我佛を得たらんに、他方國土の諸の菩薩衆、我名字を聞ば皆悉く普等三昧を逮得せん、是の三昧に住して成佛に至るまで

常に無量不可思議の一切の諸佛を見たてまつらん、若爾らずんば正覺を取じ。

【和解】 普等三昧とは普遍と云ふ義にて、般舟三昧とも念佛三昧とも稱し、普遍平等に佛を見る事を得る意味にして、我が名字を聞くものは、他方國土の菩薩にも皆悉く念佛三昧を得せしめ、其三昧に因つて成佛まで常に一切の諸佛を見奉る事を得させんとの願意で、假令菩薩たりとも常に佛を見て親近せずば、父母に離れし幼兒の如く障難多きものにして、爾かも念佛三昧に因らざれば佛を見る事容易ならず、是に依つて普遍平等に見佛させんと誓はれた、之を第四十五住定見佛の願と名けるのである。

第四十六 隨意聞法

設我得佛國中菩薩隨其志願所欲聞法自然得聞若不爾者不取正覺

【訓讀】 設我佛を得たらんに、國中の菩薩其志願に隨ひて、聞んと欲する所の法自然に聞くことを得ん、若爾らずんば正覺を取じ。

【和解】 第四十六を隨意聞法の願と稱し、菩薩と雖も正法を聞く事は最も難しとする所で、儒童菩薩は身を投じて半偈を聞き、常啼菩薩は肝腑を割きて般若を求められたと云ふ程なれども、我が國中の菩薩にして其志願有らば何時にても、意の儘に自然に法を聞く事を得せしめたしとの願にして、佛の說法は云ふにも及ばず、彼國にては水鳥樹林皆な法音が有るのであつて、何れも自然に聞法する事を得るのである。

第四十七 得不退轉

設我得佛他方國土諸菩薩衆聞我名字不卽得至不退轉者不取正覺

【訓讀】 設我佛を得たらんに、他方國土の諸の菩薩衆、我名字を聞て卽ち不退轉に至ることを得ずんば、正覺を取じ。

【和解】 菩薩たりとも往々にして、其行願を退失する事有つて、成滿する事容易に非ず是に依つて他方諸國の菩薩にても、我名字を聞かば其行願を退失せしめず、卽ち不退轉に至らしめんとの願意にして、之を第四十七得不退轉の願と云ふのである。

第四十八 得三法忍

設我得佛他方國土諸菩薩衆聞我名字不卽得至第一第二第三法忍於諸佛法不能卽得不退轉者不取正覺

【訓讀】 設我佛を得たらんに、他方國土の諸の菩薩衆、我名字を

聞て卽ち第一第二第三法忍に至ることを得ず、諸佛の法に於て、卽ち不退轉を得ること能はずんば、正覺を取じ。

【和解】 第四十八を得三法忍の願と稱し、第一第二第三法忍とは菩薩の法位階級にて、信忍、順忍、生忍の三を三法忍と云ひ、それを修得せるを三賢の菩薩と稱するので、我れ佛を得たらんには、他方國土の菩薩衆にても、我が名字を聞かば極めて容易に此の三法忍の法位に至らしめ、且つ法位に依つては退失する事有れども、我が誓願力に因つては何れも退轉せしめず、卽ち不退轉にして速に成佛に至る事を得させんとの願意で、是れにて四十八願を說き終られたのである。

佛告阿難爾時法藏比丘說此願已而說頌曰

【訓讀】 佛阿難に告たまはく、爾時法藏比丘此願を說き已りて、頌を說て曰く。

【和解】 其時法藏比丘は斯く四十八願を說き已つたので、更に亦た頌を以てそれを總括し、重ねて意志を表明すべく再び誓言を陳述られた。

我建超世願必至無上道斯願不滿足誓不成正覺

【訓讀】 我超世の願を建つ、必ず無上道に至らん、斯願滿足せずんば、誓て正覺を成ぜじ。

【和解】 超世の願とは四十八願にて、我れ世に超絶せる四十八願を建たに就ては、無上道とて必ず無上菩提の佛果に到らん事を期するので有るが、一々の誓願にして若し一願にても滿足せずば、我誓ひて正覺を成ぜじとて必定して滿足せん事を誓はれた。

我於無量劫不爲大施主普濟諸貧苦誓不成正覺

【訓讀】 我無量劫に於て大施主と爲て、普く諸の貧苦を濟ずんば誓て正覺を成ぜじ。

【和解】 我が誓願の有らん限り無量劫の後までも、大なる施主と爲りて普く衆生の貧苦を濟はずば、誓ひて正覺を取らじとの義で、施主とは施與の主と云ふ意味にして、施與に財法の二施が有つて、物質的の施與を財施と云ひ、精神的の施與を法施と稱し、諸の衆生の中には物質の財を有して精神の信仰に貧き者あり、亦は精神の信仰に富むとも物質の財に乏しき者が有る、是に依つて我此の四十八願を以て大施主と成り、普く是等の衆生に對して財法二つながらの施與を爲し、物質的の貧苦を濟ふと俱に、精神的の貧苦をも救は

んとの誓ひである。

我至成佛道名聲超十方究竟靡所聞誓不成正覺

【訓讀】 我佛道を成ずるに至らば、名聲十方に超ん、究竟して聞ふる所靡んば、誓て正覺を成ぜじ。

【和解】 佛道を成ずとは成佛するとの意味で、我れ成佛せしならば其名聲十方世界の如何なる所にも聞き知らるゝ事を得べく、若し聞知られざる所有らば正覺を取らじとの誓ひで、聞知られんとは徒に名聞名譽を望む義にはあらで、十方衆生を漏らす事無く教化救濟せんが爲めに、其名を知らせたしとの意である。

離欲深正念淨慧修梵行志求無上道爲諸天人師

【訓讀】 離欲と深正念と、淨慧との修梵行をもつて、無上道を志求て、諸の天人師と爲ん。

【句義】 離欲とは菩薩の修行である六波羅蜜の中の布施、持戒、忍辱の三を云ひ、深正念は禪定にて、淨慧を智慧とし、之を精進堅固に修行するを修梵行と云ひて、卽ち菩薩六波羅蜜の修行である。天人師とは佛德十號の一で、佛と云ふ意味。

【和解】 是より以下の頌文は佛德に順求するとて、世自在王佛の佛德を讃へて、我れ法藏比丘も亦た其如くならん事を順求られたので、さても正覺を取つて成佛するには、何れの佛にても其れに相應せる因行を要する、其因行としては菩薩に在つて六波羅蜜の功德を積み、無上道とある無上の佛果を志求て、一切世間天人師と呼ばるゝ佛と成り給ふので、我も亦其如くに天人師たらん事を期すとの意味である。

神力演大光普照無際土消除三垢冥廣濟衆厄難

【訓讀】 神力大光を演て、普く無際の土を照し、三垢の冥を消除して、廣く衆の厄難を濟はん。

【句義】 神力とは佛身光明の威德力にて、無際土とは際限無き無數の國土と云ふ義、三垢は貪欲、瞋恚、愚痴の三を云ふ。

【和解】 爾れば佛身威德の大光明は、普く無限の國土を照して、一切衆生が常に身心を勞されつゝ在る三垢煩惱の冥を消除て衆の厄難を濟ひ給ふ、厄難とは三塗八難等の許多の苦難を意味するのである。

開彼智慧眼滅此昏盲闇閉塞諸惡道通達善趣門

【訓讀】 彼の智慧の眼を開きて、此の昏盲の闇を滅し、諸の惡道を閉塞て、善趣の門に通達せしむ。

【句義】 昏盲闇とは所知障、煩惱障と菩提の智慧を昏すべき二の障り有るを闇に喩へ惡道とは地獄餓鬼畜生の三惡道にて、善趣とは天上人間の二善道を云ふ。

【和解】 爾かも許多の苦難を受けるは、煩惱二障の闇に因つて菩提の智慧を昏盲さるゝ故で有るから、其昏盲の闇を滅して彼の智慧の眼を開かしめ、惡道苦難の根本を閉塞て善道に通達べき門を開かる、卽ち佛の德である。

功祚成滿足威曜朗十方日月戢重暉天光隱不現

【訓讀】 功祚滿足することを成じて、威曜十方に朗かなり、日月重暉を戢て、天光も隱れて現ぜず。

【和解】 功祚とは佛の功德と云ふ義にて、佛德滿足し給ふに因つて、其威德の光り十方に朗かなれば、日月も重暉を戢止て、天人の光明も隱れて現はれぬ程なりとて、佛光の熾盛なるを讃へられた。

爲衆開法藏廣施功德寶常於大衆中說法師子吼

【訓讀】 衆の爲に法藏を開きて、廣く功德の寶を施し、常に大衆の中に於て、說法師子吼したまふ。

【和解】 佛は大乘小乘無盡の法を貯へ給ふと云ふ義を法藏と稱し、其法藏を開きて廣く功德の寶を施し、常に大衆の爲めに無盡の法を說きて敎化を施し給ふので、それを說法獅子吼と云ひ、獅子吼とは佛の說敎には一切畏るゝ事無きを、百獸の王たる獅子に喩へたのである。

供養一切佛具足衆德本願慧悉成滿得爲三界雄

【訓讀】 一切の佛を供養し、衆德の本を具足し、願慧悉く成滿して、三界の雄と爲ることを得たまへり。

【和解】 衆德の本とは佛を供養する功德と云ふ意味にて、一切の佛を供養して功德を具足すれば、願慧と云ひて功德の福と其れより得たる智慧とを成滿して、卽ち三界の雄と爲るのである、雄とは雄猛世尊と云ふ義にて、有ゆる世界に於ける雄猛世尊、卽ち佛世尊との意味で、我が世自在王佛は是の如き勝德を以て、三界の雄と爲り給へりと讃へられたのである。

如佛無礙智通達靡不照願我功慧力等此最勝尊

【訓讀】 佛の無礙智の如きは、通達して照したまはずといふことなし、願くは我が功慧の力、此の最勝尊に等からん。

【和解】 されば佛智は無礙である、何事も知り給はぬこと無ければ、我れ法藏比丘の志願も通達して知り給ふ可く、願はくは我が功慧の力とて、功德と智慧の力も亦た此の最勝尊なる世自在王佛に等しからん事を願求られた。

斯願若剋果大千應感動虛空諸天人當雨珍妙華

【訓讀】 斯願若し剋果せば、大千應に感動すべし、虛空の諸の天人、當に珍妙華を雨らすべし。

【和解】 斯願とは四十八願にて、剋果とは果し遂げると云ふ意味で、四十八願果して成滿剋果する事なれば、大千世界も感動すべく、虛空の諸天人も珍妙の華を雨らすべしと、重ねて懇に誓願せられた。此一行の頌と初の三行の頌文とに、各誓願の意味が有るので、之を四誓偈とも云ふのである。

大千の感動空中の讃言

佛告阿難法藏比丘說此頌已應時普地六種震動天雨妙華以散其上自然音樂空中讃言決定必成無上正覺

【訓讀】 佛阿難に告たまはく、法藏比丘此頌を說已るに、時に應じて普地六種に震動し、天より妙華を雨らして以て其上に散ず、自然の音樂あつて空中に讃して言く、決定して必ず無上正覺を成ぜんと。

【和解】 法藏比丘此頌を說き已るや否や、其時忽ち大地に六種の震動あり、天よりは妙華を雨らして其上に散らした、是れこそ頌文の大千感動すべく亦た珍妙華を雨らすべしとの、誓言に反應が有つたので、爾かも空中には讃言の聲が有つて、決定して必ず此願を成滿し、當に無上正覺を得らるべしとて證明された。

於是法藏比丘具足修滿如是大願誠諦不虛超出世間深樂寂滅

【訓讀】 是に於て法藏比丘、是の如きの大願を具足し修滿して、

誠諦虛しからず世間を超出して、深く寂滅を樂へり。

【和解】 是に於て法藏比丘は、是の如き大願とて、四十八願を成滿すべく有ゆる功德を修行し具足せられたので有るから、誠諦虛しからずと既に其反應が有つて證明されたので卽ち一切世間に超絕して、深く寂滅を樂へりとて、いよ〳〵其意志を勵まされた。

阿難時彼比丘於其佛所諸天魔梵龍神八部大衆之中發斯弘誓建此願已一向專志莊嚴妙土

【訓讀】 阿難、時に彼比丘其佛の所の、諸天と魔梵と、龍神との八部大衆の中に於て、斯弘誓を發し此願を建て已りて、一向に志を專にして、妙土を莊嚴す。

【句義】 諸天とは欲界色界の天人にて、其欲界の天主を魔王とし、色界の天主を梵天王とするので、之を魔梵と云ひ、龍神とは難陀、跋難陀等の諸龍を稱し、八部とは天龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人の八にて、諸天魔梵龍神皆其の一部である、大衆とは菩薩聲聞等其他多數の衆類を云ふ。

【和解】 彼の比丘卽ち法藏比丘が、其佛とある世自在王佛の所にして、斯の四十八願及び四誓の頌に因つて重ねて誓言を陳べられたは、唯だ佛に對しての告白のみならず、諸天魔梵龍神八部菩薩聲聞大衆の中に於て、所謂る公衆に對する宣言であつたので、此の誓願を建て已りて後は、其宣言を實現すべく一向專志にして妙土卽ち極樂淨土を莊嚴せん事に努められた。

所修佛國恢廓廣大超勝獨妙建立常然無衰無變

【訓讀】 修する所の佛國は恢廓廣大にして超勝獨妙なり、建立常然にして無衰無變なり。

【和解】 恢廓廣大とは廣大にして邊際無しとの意味で、さても法藏比丘の努力に因つて修構たる佛國卽ち極樂淨土は、廣大無邊にして有ゆる諸佛の淨土に超勝し、然も一たび建立せられてより、永く衰變せぬのである。

於不可思議兆載永劫積植菩薩無量德行不生欲覺瞋覺害覺不起欲想瞋想害想不著色聲香味觸法忍力成就不計衆苦少欲知足無染恚痴三昧常寂智慧無礙

【訓讀】 不可思議兆載永劫に於て、菩薩無量の德行を積植し、欲覺瞋覺害覺を生ぜず、欲想瞋想害想を起さず、色聲香味觸法に著せず、忍力成就して衆苦を計せず、少欲知足にして染恚痴無し、三昧常寂にして智慧無礙なり。

【和解】 是より以下は法藏比丘が其本願を成就し淨土を莊嚴せんが爲めには、如何に精進努力せられたかと云ふ事を說き給ふたので、其修行の年限を云へば不可思議兆載永劫にて、數ふべからざる長年月の間に於て、無量の德行を積重ねて欲覺瞋覺害覺を生せずと、貪欲、瞋恚、殺害の感覺を生せず、亦其の慾想思念も起さず、斯かる惡覺惡想無ければ、色聲香味觸法とて、眼耳鼻舌身等に於ける欲念執着も亦たある事無し、忍力成就と如何なる迫害苦難に遇ふとも、其の忍耐力を有したれば、衆多の苦にも克つことを得て、欲少く足る事を知れば、染恚痴も亦無しと、染恚痴とは染は欲にて貪瞋痴の三毒煩惱無しとの意味で、其等の煩惱慾相無ければ、三昧常寂と心意常に澄み渡りて、智慧も亦た無礙にてある。

無有虛僞諂曲之心和顏愛語先意承問勇猛精進志願無倦

専求清白之法以惠利群生

【訓讀】 虛僞諂曲の心有ること無く、和顏愛語して意に先ちて承問す、勇猛精進にして志願倦ること無く、專ら清白の法を求て以て群生を惠利す。

【和解】 されば虛僞り諂曲の心ある事無く、和顏愛語とて優しく溫かき言葉と顏色とを以て人に接し、假令ひ他よりの求め無くとも、能く其意を知りて其事を辨じ、然も勇猛精進にして總ての志願に倦む事無く、專ら清白き法を求めて、それを一切衆生に施し惠みて利益を與へん事を期せらる。

恭敬三寶奉事師長以大莊嚴具足衆行令諸衆生功德成就住空無相無願之法無作無起觀法如化

【訓讀】 三寶を恭敬し師長に奉事し、大莊嚴を以て衆行を具足し諸の衆生をして功德を成就せしむ、空無相無願の法に住して、作も無く起も無く、法は化の如しと觀ず。

【句義】 三寶とは佛と法と僧との三にて、其貴重なる義を寶に喩へ、師長とは父母師範等の尊長の人を稱し、大莊嚴とは福嚴智嚴とて功德と智慧との意味、空無相無願とは三解脫の法を云ふ。

【和解】 佛法僧の三寶を恭敬ひ、父母を孝養し及び尊長に奉事をば、福智の方便と稱して、其功德智慧あるを大莊嚴と云ひ、其莊嚴に因つて有ゆる善行を具備せらるゝので、唯だ法藏比丘が自己の善行を具備せらるゝのみならず、それを衆生に施して功德を成就せしめらる、然も當經前段にもあるが如くに空無相無願なれば、總てを解脫して作も無く起も無しと、一切空無我にて何等の執着も何等の固執も無き義を證得るゝを、法は化の如しと觀ずと云ふのである。

遠離麤言自害害彼彼此俱害修習善語自利利人人我兼利
棄國捐王絶去財色自行六波羅密教人令行無央數却積功
累德

【訓讀】 麤言と自害と、害彼と彼此俱害とを遠離し、善語と自利と利人と人我兼利とを修習す、國を棄て王を捐て財色を絶去し、自ら六波羅密を行じて人を教て行ぜしむ、無央數却に功を積み德を累ぬ。

【和解】 麤言とは麤惡語とも稱し口に四過有る中の惡口にて、尙は他の妄語 綺語、兩舌をも兼たる意味で、自害害彼とは身に三過有る中の殺生業を意味して、尙は他の偷盜、邪婬をも兼ね、斯く身に於ける惡業を以て自己を害し他を害し、且つ自他共に害するのが彼此俱害で、其の身口二業の惡事を爲さぬを遠離すと云ひて、卽ち惡を遠離るので有つて扨て善業の方にては、善語とて口の四過を遠離し、自利利人とて身を以て自己及び他の利を計り、且つ自他共に利するをば人我兼利と云ひて、それを修習するとは卽ち一切の惡を止めて善を修するので、其の自利善業の一としては既に國を棄て王位を捨て、財欲色欲を絶去て六波羅密を行せられた、亦た利他の善業としては人を教へて行せしむと、自己の廢惡修善や六波羅密を、他にも教へて行せしめられた、それが無量劫の期間で有つたのを、無央數劫に功を積み德を累ぬと云ふのである。

隨其生處在意所欲無量寶藏自然發應教化安立無數衆生
住於無上正眞之道

【訓讀】 其生處に隨ひ意の所欲に在て、無量の寶藏自然に發應し

無數の衆生を敎化し安立して、無上正眞の道に住せしむ。

【和解】 さても法藏比丘が無央數劫に功を積み德を累ねられたに因つて、其無央數劫の期間には衆生敎化の爲めに處々に生を受けられたが、何なる處に生れても、意の所欲に在てとて、思ひの儘に功德無量の寶藏より無量の法財を施さる、それが自然の發應として自然に發現するので有つて、其法財を以て濟世利物の利益を與へ、無數の衆生を敎化して無上正眞菩提の道に入らしめられた。

或爲長者居士豪姓尊貴或爲刹利國君轉輪聖帝或爲六欲天主乃至梵王常以四事供養恭敬一切諸佛如是功德不可稱說

【訓讀】 或は長者居士、豪姓尊貴と爲り、或は刹利國君、轉輪聖帝と爲り、或は六欲天主、乃至梵王と爲り、常に四事を以て一切の諸佛を供養し恭敬したてまつる、是の如きの功德稱說すべからず。

【和解】 亦た法藏比丘の修行の期間には、無論種々の身を受けられたので、或は長者居士豪姓尊貴と、學者富豪貴族の身と爲り、或は刹利國君轉輪聖帝と、國主國王亦は勝れし帝王とも爲り、或は六欲天や梵天王の欲界色界の天主とも爲られたが、常に四事として飲食衣服、臥具、醫藥の供養を爲して一切諸佛を恭敬された、其等の功德は無量にして、說く事能はぬ程なりとて、それを稱說す可からずと云ふのである。

口氣香潔如優盌羅華身諸毛孔出栴檀香其香普薰無量世界容色端正相好殊妙

【訓讀】 口氣香潔にして優盌羅華の如く、身の諸の毛孔より栴檀香を出す、其香普く無量の世界に薰ず、容色端正にして相好殊妙なり。

【和解】 優盌羅華とは青蓮華の梵名にて、法藏比丘法身の德に因つては、口氣の香潔こと青色の蓮華の如く、身の諸の毛孔よりも栴檀の香を放ちて、其香普く無量の世界に薰じ、容色端正にして三十二相の相好殊妙られたりと、是こそ前段の麤言を遠離して自利々人の法を修習された善因に依つて、其感果として得られた身と口との德である。

其手常出無盡之寶衣服飲食珍妙華香繒蓋幢旛莊嚴之具

如是等事超諸天人於一切法而得自在

【訓讀】 其手より常に無盡の寶、衣服飲食珍妙華香、繒蓋幢旛莊嚴の具を出せり、是の如き等の事諸の天人に超ゑ、一切の法に於て自在を得たり。

【和解】 其手裏よりは常に無盡の寶を出す事を得て、衣服飲食亦は繒蓋幢旗等の莊嚴の具を現出する事も隨意にして、其れを以て上は諸佛に供養し、下は衆生に施さるゝ、是の如き等の功德何れも諸の天人に超絶して、一切の法に於て自在を得られた。

以上の經文は法藏比丘の因位の華報として、發心出家の初めより兆載永劫の間に於て、無量の行願を修して、無量の勝報感果を得られた有樣を說き給ふたので、是より以下は其勝報感果に因つて、法藏比丘が成佛して阿彌陀如來と成り給ひ、四十八願を成就して建立された極樂淨土の功德莊嚴を說き給ふのである。

阿難白佛法藏菩薩爲已成佛而取滅度爲未成佛爲今現在佛告阿難法藏菩薩今已成佛現在西方去此十萬億刹其佛世界名曰安樂

【訓讀】 阿難佛に白く、法藏菩薩已に成佛して滅度を取たまふとや爲ん、未だ成佛したまはずとや爲ん、今現に在すとや爲んと、佛阿難に告たまはく、法藏菩薩今已に成佛して現に西方に在す、此を去ること十萬億刹なり、其佛の世界を名けて安樂と曰ふ。

【和解】 爾時阿難尊者、釋迦牟尼佛に問奉るには、今迄長々と勝報感果を說き給ふた法藏比丘は、過去世に於て成佛して、已に涅槃に入り給ひ、今は此世に在さぬ佛なりや、亦は未來世に於て成佛したまふべき佛なりや、將た現在此世に在せる佛なりやと、假令ひ勝德有りとも毘婆尸佛の如く既に涅槃に入り給ふとか、亦た彌勒菩薩の如く未だ成佛し給はぬとの事なれば、纔に敬慕渴仰するのみにて、現在の利益には疎かるべしとの意味を以て問ふたのである、其れに對して佛の告給ふには、否な法藏比丘は已に成佛して、阿彌陀如來と成り給ふた、而も過去でも未來でも無い、今現に西方淨土に在すので、此を去ること十萬億刹にして、其佛の世界を安樂と曰ふと、安樂とは一切の苦み無く安心して樂みを受ける意味で、卽ち極樂淨土である。

阿難又問其佛成道已來爲逕幾時佛言成佛已來凡歷十劫

【訓讀】 阿難又問たてまつる、其佛成道より已來、幾時を逕ぎや爲ん、佛の言はく、成佛より已來凡そ十劫を歷たり。

【和解】 前段の如く今現在し給ふ義に就き、阿難尊者は又た問ひ奉りて、今現在し給ふならば、其佛の成道とて正覺を成じて佛と成り給うてより、幾何の年數を經やと、其れに對して釋迦牟尼佛の答へには、いかにも其佛の成道よりと阿彌陀如來の成佛より、既に十劫を歷たのであると。

二祖鎭西正宗國師の傳へらるゝ處に依れば、元祖大師は常に此の今已に成佛して現に西方に在すの文に對し給ふ毎に、感涙を流して歡び給ふたと、何故歡び給ふかと云へば、何なる深重大悲を以て四十八願を發し、特に念佛往生を誓ひ給ひても、正覺をも取らず佛にも成り給はずば、十方衆生の爲めに何の所詮も無き事なれども、一々の誓願成就してこそ既に正覺を取りて佛と成り今現に西方に在すので有るから、其成佛こそ十方衆生が往生すべき證據であるのを歡び給ふたので、是に依つて御法語にも『一々の願の終りに若爾らずば正覺を取らじと云へり、然るに阿彌陀佛成佛してより已來、今におきて十劫なり、成佛の誓ひ已にもて成就し給へり、當に知るべし一々の願むなしく設くべからず、故に善導の宣給く彼の佛今現に世に在して成佛し給へり、當に知るべし本誓の重願虛しからず、衆生稱念すれば必ず往生を得ることを』と示してある。

極樂淨土の七寶莊嚴

其佛國土自然七寶金銀瑠璃珊瑚琥珀硨磲碼碯合成爲地恢廓曠蕩不可限極悉相雜廁轉相入間光赫焜耀微妙奇麗清淨莊嚴超踰十方一切世界衆寶中精其寶猶如第六天寶

【訓讀】 其佛の國土は自然の七寶、金銀、瑠璃、珊瑚、琥珀、硨磲、碼碯をもつて、合成して地と爲り、恢廓曠蕩として限極す可からず、悉く相雜廁し轉た相入間せり、光赫焜耀として微妙奇麗なり清淨の莊嚴十方一切の世界に超踰たり、猶し第六天寶の如し。

【句義】 恢廓曠蕩とは廣大開闊として國土の廣き意味にて、雜廁入間とは七寶互に入交りたる義、第六天寶とは欲界の寶中には第六天の寶が最勝なるに因りて、それに喩へて衆寶中に勝れたるを表示する意味。

【和解】 此の一段は四十八願の中で第三十二國土嚴飾の願を成就されたので、其佛の國土とは無論阿彌陀佛の極樂淨土にして、其國土は人爲の造作を借らずして自然に合成せる

金銀瑠璃等の七寶を以て地と爲し、其面積の廣大なる事は恢廓曠蕩として限極が無い、爾も七寶互に雜廁入間て光赫焜耀たれば、微妙綺麗なる事云ふ迄も無く、皆是れ阿彌陀如來の清淨慈悲の誓願より現出せる處なれば、それを清淨の莊嚴と云ひて十方一切の世界に超え、彼の第六天の寶を以て最勝の寶とすれば、此國土の寶も猶其れの如くに、衆寶の中の精妙を極めて有る。

又其國土無二須彌山及金剛鐵圍一切諸山一亦無二大海小海谿渠井谷一佛神力故欲レ見則現

【訓讀】 又其國土には、須彌山及び金剛鐵圍一切の諸山無く、亦大海小海谿渠井谷無し、佛神力の故に見んと欲すれば則ち現ず。

【和解】 又た極樂國土には、須彌山等の諸山及び大海小海谿渠井谷も有る事無し、けれども見んと欲すれば、佛神力を以て現せらるべしと、由來印度古傳の天文學には須彌山說と云ふのが有つて、此世界の中心に須彌山在つて其外に金剛鐵圍等の諸山と、大海小海が有る其れを九山八海と稱するので、此處に其等の山海無しと說き給ふたは、强て須彌山說に拘泥されたのでは無い、唯だ極樂淨土には是等の山海無しと云ふ義を、說明された一例に過ぎぬのである。

極樂淨土の不寒不熱

亦無二地獄餓鬼蓄生諸難之趣一亦無二四時春秋冬夏一不レ寒不レ熱常和調適

【訓讀】 亦地獄餓鬼蓄生、諸難の趣無く、亦四時春秋冬夏無く、寒からず熱からずして、常和調適なり。

【和解】 亦た極樂には地獄餓鬼等の三惡道、及び其他所有る苦難の趣無しと、此一段は四十八願の第一無三惡趣の願を成就されたので、亦た其國土には春秋冬夏の四時有る事無く、何れの時にても寒からず熱からずして、常に寒暑が調和されてあるのを、常和調適と云ふのである。

爾時阿難白レ佛言世尊若彼國土無二須彌山一其四天王及忉利天依レ何而住佛語二阿難一第三燄天乃至色究竟天皆依レ何住阿難白レ佛行業果報不可思議佛語二阿難一行業果報不可思議諸佛世界亦不可思議其諸衆生功德善力住二行業之地一故能爾

耳阿難白佛我不疑此法但爲將來衆生欲除其疑惑故問斯義

【訓讀】 爾時阿難、佛に白して言く、世尊若し彼國土に須彌山無んば、其四天王及び忉利天は何に依て住するや、佛阿難に語はく第三餘天乃至色究竟天は皆何に依て住するや、阿難佛に白く、行業果報不可思議なればなり、佛阿難に語はく、行業果報不可思議なれば、諸佛世界も亦不可思議なり、其諸の衆生功德善力を以て行業の地に住す、故に能爾る耳、阿難佛に白く、我此法を疑はず但だ將來の衆生の爲に、其疑惑を除んと欲して、故らに斯義を問たてまつりしと。

【句義】 四天王及忉利天とは、須彌山の半腹及び頂上に在る天にて、第三餘天は夜摩天亦は快樂天とも云ひ、色究竟天とは梵語に阿迦尼吒天と稱して、二天俱に須彌山以外に超絶せり、行業果報とは善惡の行業に因つて感ずる所の果報と云ふ義。

【和解】 此一段は極樂淨土に須彌山無しと說給ふたに就て、阿難尊者と釋迦牟尼佛との問答にて、爾時阿難は須彌山說に因つて、若し彼の國土に須彌山無くば、其半腹及び頂上に在るべき四天王忉利天は何に依つて住するや、是等の諸天有ればこそ極樂にも天人が在るので、若し須彌山無ければ其等も亦た無き理ならずやと問ひ奉つたのである、それに對して佛の宣給はくには、彼の第三餘天及び色究竟天の如きは須彌山以外である、爾も其れが住して有るのは如何にと反問されたので、阿難尊者の答ふるには、それは行業果報不可思議で有つて、善惡の行業に因つて感ずる所の果報には思議すべからざるものが有るからなりと、それで佛の告給ふには、されば諸佛の淨土も不可思議で無ければならぬ、況んや極樂淨土は彌陀如來の不思議の德に因つて感じ給ふ所にして、其諸の衆生も亦た功德善力の行業にて感じた果報であるから、故に能く爾る耳と須彌山の有無に關するが如き、尋常普通の理を以て判斷すべき國土で無いと答へ給ふた之を聞いて更に阿難の白すには、我れ此法を疑はざれども、將來の衆生の爲めに其疑惑を除かんとて、故ら斯義を問奉りしと。

佛告阿難無量壽佛威神光明最尊第一諸佛光明所不能及

或有佛光照百佛世界或千佛世界取要言之乃照東方恒沙佛刹南西北方四維上下亦復如是或有佛光照于七尺或照一由旬二三四五由旬如是轉倍乃至照於一佛刹土

【訓讀】　佛阿難に告はく、無量壽佛の威神光明は最尊第一にして諸佛の光明も及ぶこと能ざる所なり、或は佛光あり百佛世界、或は千佛世界を照す、要を取て之を言ば乃ち東方恒沙の佛刹を照す、南西北方四維上下も亦復是の如し、或は佛光有り七尺を照し或は一由旬二三四五由旬を照す、是の如く轉倍して乃至一佛刹土を照す。

【和解】　是より以下は四十八願の中の第十二光明無量の願を成就されたので、無量壽佛の光明は最勝第一にして、無量無邊で有るから如何なる諸佛の光明も及ぶ事能はざる所にして、諸佛の光明には邊際が有れども阿彌陀如來の光明は無量である、されば諸佛の光明は或は佛光有りと、某佛の光明は百佛世界千佛世界乃至東西南北四維上下の十方を照し給へども、既に百千と云ふ限りが有つて彌陀の光明の無限には及ばぬ、亦或は佛光有つて七尺乃至一由旬、二三四五由旬の遠きを照し、それを轉倍して一佛刹土を照し給ふとも、是亦た一佛刹土と云ふ邊際が有つて、彌陀の光明の邊際無きには及ばぬ、是に依つて阿彌陀如來の威神光明は最勝第一である。

是故無量壽佛號無量光佛無邊光佛無礙光佛無對光佛燄王光佛清淨光佛歡喜光佛智慧光佛不斷光佛難思光佛超日月光佛

【訓讀】　是故に無量壽佛をば、無量光佛、無邊光佛、無礙光佛、無對光佛、燄王光佛、清淨光佛、歡喜光佛、智慧光佛、不斷光佛、難思光佛、超日月光佛と號したてまつる。

【和解】　前段の如く阿彌陀如來の光明は、諸佛に勝れ給ふに因つて十二光佛の稱號を得給ふたので、是故に無量壽佛を無量光佛とて、其光明に量り無く、無邊光とて亦た邊際も有る事無く、無礙光とて如何なる千重萬山の隔てが有つて、如何なる障碍が有るとても尚能く無礙に照らし給ひ、無對光とて之を諸佛諸菩薩の光明に對比んとしても、更に對比る事が出來ぬ、燄王光とて燄王とは光中の王なりとの意味で、彌陀の光明は卽ち光中の王に

して、清淨光とは元來無貪の善根とて、貪欲煩惱の穢れの無き中より得給ふた光明である から、清淨き光りと稱するので、歡喜光とは無瞋の善根とて、瞋恚の煩惱無き中よりの光明なれば歡喜と名け、智慧光とは無痴の善根とて、愚痴の煩惱無き中よりの光明にて、不斷光とは其光明は如何なる場所如何なる時にも斷絶せざる意味にして、難思光とは不思議の光德有るに因り、無稱光とは假令ひ如何なる辯舌にても、稱說べからざる德益有つて、超日月光とは日月の光りにも超絶せりとの義で、卽ち阿彌陀如來は其光明の德に因つて、斯く十二光佛の稱號を得給ふたのである。

其有衆生遇斯光者三垢消滅身意柔軟歡喜踊躍善心生焉

【訓讀】 其れ衆生有て斯光に遇者は、三垢消滅して身意柔軟なり歡喜踊躍して善心生ず。

【和解】 斯く阿彌陀如來の無量の光明を得給ふたは、十方衆生に其照益を與へられん爲めにして、如何なる衆生にても斯の光明に遇ふ者は、三垢消滅として自然に貪瞋恚三毒の煩惱を消滅せらる、元來佛の光明は前段の如く淸淨光として無貪の善根、歡喜光として無瞋の善根、智慧光として無痴の善根より得給ふたので有るから、其光明に觸れる者が三毒煩惱を消滅するのは當然にて、三垢消滅するに因つて身意柔軟とて、身も意も柔和となりて卽ち善心生ずるに至る、是こそ吾人が現在に受ける光明の德である。

若在三塗勤苦之處見此光明皆得休息無復苦惱壽終之後皆蒙解脫

【訓讀】 若し三塗勤苦の處に在て、此光明を見たてまつれば、皆な休息を得て復た苦惱無し、壽終の後皆な解脫を蒙る。

【句義】 三塗とは三惡道にて、地獄を火塗、餓鬼を刀塗、畜生を血塗と稱し、塗とは塗炭とて勤苦の義を云ふ。

【和解】 阿彌陀如來光明の得益は、僅かに吾人の現在に於けるのみならず、若し死者にして三塗勤苦の所に在ても三惡道にて勤苦を受ける者でも、此の光明を見奉れば其苦休息ることを得て、皆な解脫を蒙るとて卽ち極樂淨土へ救濟るゝのである、是に依つて元祖大師法然上人の御法語には、此文を以て念佛追善の依據として『亡人の爲めに念佛を廻向し候へば、阿彌陀佛光明を放ちて、地獄餓鬼畜生を照らし給ひ候へば、此三惡道に沈みて苦を受くる者、其苦休まりて命終つて後解脫すべきにて候』と示し給ふた、されば如

何なる勤苦の所に在る者にても、念佛追善の功德に因つては、此の光明の照益を受けて必ず其苦を免る可く、況んや善道に在る者にしては其善を增進こと疑ひ無し、此一段は四十八願の中で第三十三觸光柔軟の願を成就されたのである。

無量壽佛光明顯赫照曜十方諸佛國土莫不聞焉不但我今稱其光明一切諸佛聲聞緣覺諸菩薩衆咸共歎譽亦復如是

【訓讀】 無量壽佛の光明顯赫にして十方を照曜す、諸佛の國土に聞るずこいふこと莫し、但だ我今其光明を稱するのみにあらず、一切の諸佛聲聞緣覺諸の菩薩衆も、咸く共に歎譽したまふこと、亦復た是の如し。

【和解】 此一段は四十八願の中で第十七諸佛稱揚の願を成就されたので、阿彌陀如來の光明は十方世界に照耀き、諸佛の國土に在る者にして、其光明の德を聞き知らぬ者は無い但だ我釋迦牟尼佛が、それを稱揚讃嘆のみならず、一切の諸佛聲聞緣覺の聖者も亦た諸の菩薩衆も、咸共に嘆譽らるゝこと、亦復た是の如くなるべしと。

若有衆生聞其光明威神功德日夜稱說至心不斷隨意所願得生其國爲諸菩薩聲聞大衆所共歎譽稱其功德至其然後得佛道時普爲十方諸佛菩薩歎其光明亦如今也

【訓讀】 若し衆生有て其光明の威神功德を聞て、日夜に稱說して至心不斷なれば、意の所願に隨ひて其國に生ることを得、諸の菩薩聲聞大衆の爲に、共に歎譽して其功德を稱せられ、其然る後佛道を得る時に至りて、普く十方の諸佛菩薩の爲に、其光明を歎ぜられんこと、亦今の如くならん。

【和解】 されば諸の衆生にして其光明の威神功德を聞きて、日夜稱說至心不斷と常に光明の德を仰ぎて、至誠に念佛するならば、其所願の如く極樂淨土に生るゝ事を得て、諸の菩薩聲聞等に念佛の功德を稱讃らる可く、其然る後頓て佛道を得る時には、其身も光明を得て有るので、十方諸佛菩薩の爲めに、其光明を讃譽らるゝは、亦今の如くならんとて今此の阿彌陀如來が讃嘆られ給ふが如くなるべしと、阿彌陀如來の光明は唯だ自己一佛の德のみならず、それを平等に一切衆生に頒て其成佛の時には、諸佛普通の光明ならで均しく自己の如くに超絕して、諸佛菩薩に讃嘆さるべき光明を、得せしめ給ふのである。

佛言我説無量壽佛光明威神巍々殊妙晝夜一劫尚未能盡

【訓讀】 佛の言く、我れ無量壽佛の光明威神の、巍々殊妙なるを説こと、晝夜一劫すとも尚未だ盡すこと能ず。

【和解】 此一段は阿彌陀如來の光明讃嘆の結文で、無量壽佛の威神光明の巍々として殊妙たるは、我れ釋迦牟尼佛が一劫の間、晝夜不斷に之を説くとも、尚其れを説き盡す事能はずと、卽ち前段よりの結文として、功德利益の無量無邊なる事を示し給ふたのである。

佛語阿難又無量壽佛壽命長久不可稱計汝寧知乎仮使十方世界無量衆生皆得人身悉令成就聲聞緣覺都共集會禪思一心竭其智力於百千萬劫悉共推算計其壽命長遠之數不能窮盡知其限極聲聞菩薩天人之衆壽命長短亦復如是非算數譬喩所能知也

【訓讀】 佛阿難に語はく、又無量壽佛の壽命長久にして稱計べからず、汝寧ろ知ん乎、仮使十方世界の無量の衆生をして皆人身を得せしめ、悉く聲聞緣覺都共に集會し禪思一心に其智力を竭して、百千萬劫に於て悉く共に推算して、其壽命の長遠の數を計るとも、窮盡して其限極を知こと能じ、聲聞菩薩天人の衆の壽命の長短も亦復是の如く、算數譬喩の能知る所に非ず。

【和解】 又た阿彌陀如來の壽命は長久にて稱計べからず、阿難汝之を知れりや、假使十方世界の衆生をして悉く人身を得せしめ、それをして皆悉く聲聞緣覺の聖者たらしめ其聖者を集會して禪思一心と、證得の智力を竭し百千萬劫の間、計算させやうとも其限極を知るべからざるのが阿彌陀如來の壽命にして、是れこそ十劫以前の成佛より今に至るまで現在し給ふ理由で、亦た無量壽佛と稱する所以である、此一段は四十八願の中で第十三壽命無量の願成就で、亦た其國に在る聲聞菩薩天人の壽命も、佛と同樣にして異り無く、假令ひ其の長短を計らんとするとも、元より算數も及ばざれば、譬喩を取らんとしても更に譬へるものが無い、亦是れ無量の壽命で有ると此一段は四十八願の中で第十五眷屬長壽の願を成就されたのである。

又聲聞菩薩其數難量不可稱説神智洞達威力自在能於掌

中持一切世界佛語阿難彼佛初會聲聞衆數不可稱計菩薩亦然

【和解】又た極樂淨土に在る聲聞菩薩聖者の數も無量にして、其數を稱說べからず、それが悉く神智洞達とて不思議の神通に達し、能く掌中に一切世界を持すと、世界を手の裡に塊はす程の威力自在の聖者にして、其聖者が阿彌陀如來成佛の初會の時、既に無數で有つたから、今は其數實に稱計難いので、唯だ聲聞の數のみならず、菩薩の數も亦然りであると、此一段は四十八願の中で第十四聲聞無數の願を成就して、菩薩も其れに兼ねられたのである。

如今大目犍連百千萬億無量無數於阿僧祇那由他劫乃至滅度悉共計校不能究了多少之數

【訓讀】今、大目犍連の如き、百千萬億無量無數あつて、阿僧祇那由他劫に於て、乃至滅度まで悉く共に計校とも、多少の數を究了こと能じ。

【和解】大目犍連とは目連尊者で佛弟子中に神通第一を以て稱せらる、其神通第一の目連尊者の如きが、百千萬億無量無數に集つて、阿僧祇劫の長年月を經て乃至涅槃の滅度を取るまで、悉く共に計校とも、彼の初會だけの聲聞菩薩の數を究了ことは能ふまじと。

譬如大海深廣無量仮使有人折其一毛以爲百分以一分毛沾取一滴於意云何其所滴者於彼大海何所爲多阿難白佛彼所滴水比於大海多少之量非巧曆算數言辭譬類所能知也

【訓讀】譬ば大海の深廣して無量ならんに、仮使人有て其一毛を折て以て百分と爲し、一分の毛を以て一滴を沾取せんが如き、意に於て云何ぞ、其滴る所のものを彼大海に於てするに、何か多しと爲

る所ぞ、阿難佛に白く、彼の滴る所の水を大海に比るに多少の量、巧曆算數言辭譬類の、能く知る處に非ず。

【和解】 此一段は尙ほ初會聲聞菩薩の數に就き、譬喩を以て阿難尊者に告げ給ふので、譬へば大海の深廣なるに、人有つて其毛髮の一筋を折て百分と爲し、其百分の一毛にて大海の水を沾取るとして、其滴る所の一滴を彼の大海の水に比べなば、阿難よ汝の意に於て如何ぞ、彼の大海の水と此の一滴と、何れを多しと思ふやと、阿難佛に白すには、それは元より一滴の少くして、大海の水の多きは其量計るべからずして、如何に巧なる曆算術も、言辭も譬類も及ばざる所であると。

佛語阿難如目連等於百千萬億那由他劫計彼初會聲聞菩薩所知數者猶如一滴其所不知如大海水

【訓讀】 佛阿難に語はく、目連等の如き百千萬億那由他劫に於て彼初會の聲聞菩薩を計りて、知る所の數は猶し一滴の如く、其知ざる所は大海の水の如し。

【和解】 阿難尊者の答に因り、それで佛の告げ給ふには、彼の目連の如きが假りに百千

萬劫に於て、初會の聲聞菩薩の數を知つたとしても、其知る所は一毛の一滴の如く、知らざる所は大海の水の如しと、極樂淨土には聲聞菩薩の無數なるを示し給ふた。

又其國土七寶諸樹周滿世界金樹銀樹瑠璃樹玻瓈樹珊瑚樹碼碯樹硨磲樹或有二寶三寶乃至七寶轉共合成

【訓讀】 又其國土には七寶の諸樹あつて、世界に周滿せり、金樹銀樹、瑠璃樹、玻瓈樹、珊瑚樹、碼碯樹、硨磲樹あり、或は二寶三寶乃至七寶、轉た共に合成せるあり。

【和解】 又た極樂淨土には七寶の樹木が國中に周滿して有る、其七寶樹とは金、銀、瑠璃、玻、珊瑚、碼碯、硨磲樹にして、それが七寶各別になつたのも有れば、亦た一樹にして二寶三寶乃至七寶が、合成されたのも有る。

或有金樹銀葉華果或有銀樹金葉華果或瑠璃樹玻瓈爲葉華果亦然或水精樹瑠璃爲葉華果亦然或珊瑚樹碼碯爲葉華果亦然或碼碯樹瑠璃爲葉華果亦然或硨磲樹衆寶爲葉

華果亦然

【訓讀】 或は金樹にして銀葉華果なるあり、或は銀樹にして金葉華果なるあり、或は瑠璃樹あり玻璃を葉と爲す華果亦然なり、或は珊瑚樹あり碼碯を葉水精樹あり瑠璃を葉と爲す華果亦然なり、或は碼碯樹あり瑠璃を葉と爲す華果亦然なり。

と爲す華果亦然なり、或は碼碯樹あり瑠璃を葉と爲す華果亦然なり

或は硨磲樹あり衆寶を葉と爲す華果亦然なり。

【句義】 華果とは華と果にして、亦然とは例へば瑠璃を葉とせる樹は華も果も瑠璃なりと云ふ意味にて、水精樹とは梵名玻璃の漢譯にて玻璃樹を云ひ、衆寶とは二寶三寶乃至四五寶の義にて、前段の二寶三寶合成の意味。

或有二寶樹一紫金爲レ本白銀爲レ莖瑠璃爲レ枝水精爲レ條珊瑚爲レ葉碼碯爲レ華硨磲爲レ實或有二寶樹一白銀爲レ本瑠璃爲レ莖水精爲レ枝珊瑚爲レ條碼碯爲レ葉硨磲爲レ華紫金爲レ實或有二寶樹一瑠璃爲レ本水精爲レ莖珊瑚爲レ枝碼碯爲レ條硨磲爲レ葉紫金爲レ華白銀爲レ實

【訓讀】 或は寶樹あり紫金を本とし白銀を莖とし、瑠璃を枝とし水精を條とし、珊瑚を葉とし碼碯を華とし硨磲を實とす、或は寶樹あり白銀を本とし瑠璃を莖とし、水精を枝とし珊瑚を條とし、碼碯を葉とし硨磲を華とし紫金を實とす、或は寶樹あり瑠璃を本とし水精を莖とし、珊瑚を枝とし碼碯を條とし、硨磲を葉とし紫金を華とし白銀を實とす。

或有二寶樹一水精爲レ本珊瑚爲レ莖碼碯爲レ枝硨磲爲レ條紫金爲レ葉白銀爲レ華瑠璃爲レ實或有二寶樹一珊瑚爲レ本碼碯爲レ莖硨磲爲レ枝紫金爲レ條白銀爲レ葉瑠璃爲レ華水精爲レ實或有二寶樹一碼碯爲レ本紫金爲レ莖白銀爲レ枝瑠璃爲レ條水精爲レ葉或有二寶樹一硨磲爲レ本紫金爲レ莖白銀爲レ枝瑠璃爲レ條水精爲レ葉珊瑚爲レ華珊瑚爲レ實

【訓讀】 或は寶樹あり水精を本とし珊瑚を莖とし、碼碯を枝とし

硨渠を條こし、紫金を葉こし白銀を華こし瑠璃を實とす、或は寶樹あり珊瑚を本こし碼碯を莖こし、硨渠を枝こし紫金を條こし、白銀を葉こし瑠璃を華こし水精を實とす、或は寶樹あり碼碯を本こし硨渠を莖こし紫金を枝こし、白銀を條こし、瑠璃を葉こし水精を華こし珊瑚を實とす、或は寶樹あり硨渠を本こし紫金を莖こし、白銀を枝こし瑠璃を條こし、水精を葉こし珊瑚を華こし碼碯を實とす。

【和解】本とは根本にて、莖とは枝の生ずる本を云ひ、條とは枝より生ずる小枝にして是れに枝葉華果を合して七のものが、各〻七寶を以て合成されて有るのである。

此諸寶樹行々相値莖々相望枝々相準葉々相向華々相順實々相當榮色光曜不ㇾ可ニ勝視一

【訓讀】此諸の寶樹、行々相値ひ莖々相望み、枝枝相準び葉々相向ひ、華々相順ひ實々相當り、榮色光曜として勝視すべからず。

【和解】此諸の二寶三寶及び七寶合成せる寶樹は、枝と枝と華と華とが、互に相向ひ相準びて、整然として雜亂せず、爾かも榮色とて變色亦は枯落する事無くて常に榮ある色を有し、七寶各〻微妙の色彩を以て光耀くのであるから、勝視すべからずと看るも眩き有樣である。

自然の音樂

清風時發出ニ五音聲一微妙宮商自然相和

【訓讀】清風時に發りて五音の聲を出すに、微妙の宮商自然に相和せり。

【和解】亦彼の七寶の寶樹林よりは、時として清風を發すことが有て、其聲自然に五音を調和して、最も微妙の音樂を奏するので、五音とは一切音聲の本にして宮音、商音、角音、徵音、羽音の五で、それが自然に調和されて在るのである。

道場樹

又無量壽佛其道場樹高四百萬里其本周圍五十由旬枝葉四布二十萬里一切衆寶自然合成以ニ月光摩尼持海輪寶一衆寶之王而莊嚴之一

【訓讀】又無量壽佛の其道場樹は、高さ四百萬里にして、其本周

圍五十由旬枝葉四に布ること二十萬里なり、一切の衆寶自然に合成せり、月光摩尼持海輪寶衆寶の王たるを以て、之を莊嚴れり。

【句義】 摩尼とは珠玉の梵語にて、月光、持海、輪寶、何れも摩尼寶玉の一種にして、其等は皆な寶玉中の最上なりとて、衆寶の王と云。

【和解】 此一段は四十八願の中で第二十八見道場樹の願を主として、兼ては第四十八得三法忍の願を成就されたので、其第二十八願成就に因つて、十方衆生が極樂淨土に於て見る事を得べき、道場樹の高さは四百萬里にして、其樹根の周圍は五十由旬枝葉四方に布る事二十萬里なるが、それが悉く皆一切衆寶自然の合成にして、衆寶とは云ひ乍ら其衆寶は寶中の王とも謂ふ可き、月光持海輪寶の如き最上の摩尼を以て、莊嚴されたのである。

周市條間垂寶瓔珞百千萬色種々異變無量光燄照耀無極珍妙寶網羅覆其上一切莊嚴隨應而現

【訓讀】 條の間を周市て寶瓔珞を垂たり、百千萬の色種々に異變し、無量の光燄照耀すること極無く珍妙の寶網其上に羅覆せり、一切の莊嚴應に隨ひて現ず。

【和解】 亦其の道場樹の條間を周市て瓔珞を垂たるが、其瓔珞の色彩百千萬種にして、互に相映じて種々に異つた色を現はし、それに無量の光燄が有て照輝くこと極まり無く亦珍妙の寶網とて珠玉を貫く網が有て、其樹の上を絆覆てある、其他種々樣々の莊嚴が應に隨ふとて、現はるべき時有れば隨時自然に現ずるのである。

微風徐動吹諸枝葉演出無量妙法音聲其聲流布徧諸佛國其聞音者得深法忍住不退轉至成佛道耳根清徹不遭苦患

【訓讀】 微風徐く動て諸の枝葉を吹に、無量の妙法の音聲を演出す、其聲流布して諸佛の國に徧く、其音を聞く者は深法忍を得て不退轉に住し、佛道を成ずるに至るまで耳根清徹にして苦患に遭ず。

【和解】 微風徐く動きて道場樹の枝葉を吹けば、風聲宛然に法音にして無量の妙法を演べ、其聲徧く諸佛の國々にも聞ゑて、それを聞く者は深法忍なる證を得て永く修行を退轉せず、其成佛に至るまで耳根清徹くして苦患に遭ざるべしと。

目覩其色耳聞其音鼻知其香舌嘗其味身觸其光心以法緣

一切皆得甚深法忍住不退轉至成佛道六根清徹無諸惱患

【訓讀】 目に其色を覩、耳に其音を聞き鼻に其香を知り、舌に其味を嘗め身に其光を觸れ、心に法を以て緣ずるに、一切皆甚深法忍を得て不退轉に住し、佛道を成ずるに至るまで六根清徹にして、諸の惱患無し。

【和解】 目に道場樹の色を覩、耳に其樹の音を聞き、鼻に其華の香を嗅ぎ、舌に其果實の味を嘗め、身に其樹の光明を觸れ、心に其樹の德を感ずる者は、皆な俱に深法忍なる證を得て不退轉に住し、成佛に至るまで是等の六根清徹にして、更に諸の惱患無き事を得るのである。

阿難若彼國人天見此樹者得三法忍一者音響忍二者柔順忍三者無忍法忍此皆無量壽佛威神力故本願力故滿足願故明了願故堅固願故究竟願故

【訓讀】 阿難、若彼國の人天此樹を見る者は、三法忍を得、一には音響忍、二には柔順忍、三には無生法忍なり、此皆な無量壽佛の威神力の故に、本願力の故に滿足願の故に、明了願の故に堅固願の故に究竟願の故なり。

【和解】 彼國とは極樂淨土にて、其淨土の人天にして此の道場樹を見る者は、三法忍と云ふ法位を得べし、三法忍とは音響忍、柔順忍、無生法忍にして、第四十八願に第一第二第三法忍と有るのと同意味にて、三賢と云ふ菩薩の法位を得る義で有つて、唯だ道場樹を見るだけにても、斯る法德を得らるゝのは皆是れ阿彌陀如來大誓悲願の然らしむる處で、即ち最勝なる威神力である本願力である、亦二百一十億諸佛淨土の中より選び取り給ふた善妙なるものを圓備し滿足されたが故で、亦其本願成就の證として明了なる瑞祥を得給ふたが故で、亦身を諸の苦毒の中に止とも、忍びて終に悔ひ給はぬ堅固の誓願なる故で、亦此の大誓願を究竟して遂に成滿し給ひたる故にてある。

佛告阿難世間帝王有百千音樂自轉輪聖王乃至第六天上伎樂音聲展轉相勝千億萬倍第六天上萬種樂音不如無量壽國諸七寶樹一種音聲千億萬倍也

和雅の音樂

【訓讀】 佛阿難に告はく、世間の帝王に百千の音樂有り、轉輪聖王より乃至第六天上の伎樂の音聲は、展轉して相勝ること千億萬倍なり、第六天上の萬種の樂音は、無量壽國の諸の七寶樹の一種の音聲に如ざること、千億萬倍なり。

【和解】 扨亦極樂淨土の寶樹音樂の德に就ては、世間の帝王に百千種の音樂が有りとして、それを轉輪聖王と呼ぶ勝れた帝王より、乃至第六天上の伎樂の聲に比較ぶれば、世間の帝王よりは轉輪聖王の音樂が優れ、轉輪聖王よりは第六天上の方が勝るゝ事、展轉して千億萬倍である、けれども其勝れし第六天上萬種の樂音を、無量壽國卽ち極樂淨土の七寶樹の、僅に一種の音聲に比較れば、其如ざること千億萬倍である。

亦有二自然萬種伎樂一又其樂聲無レ非二法音一清揚哀亮微妙和雅十方世界音聲之中最爲第一

【訓讀】 亦た自然の萬種の伎樂有り、又其の樂聲法音に非ずこいふこと無く、清揚哀亮にして微妙和雅なり、十方世界の音聲の中に最も第一と爲す。

【和解】 亦極樂淨土には寶樹清風の外に、尙ほ自然萬種の伎樂が有つて、其樂聲も亦法音に非ずと云ふ事無く、爾も其聲清揚哀亮とて、いと清らかに澄渡りて微妙和雅なること十方世界に有ゆる音聲の中で、最も第一なるのである。

講堂精舍宮殿樓觀

又講堂精舍宮殿樓觀皆七寶莊嚴自然化成復以眞珠明月摩尼衆寶以爲交露覆二蓋其上一

【訓讀】 又た講堂精舍、宮樓殿觀あり、皆七寶莊嚴自然の化成なり、復た眞珠明月摩尼の衆寶を以て、以て交露と爲して其上に覆蓋り。

【句義】 講堂は說法の場所にて、精舍は修養硏學の屋舍、宮殿は堂宇の廣大なる居室にて、觀樓は展望好き二階亦は三階等の高樓を云ひ、眞珠明月は摩尼寶玉の一種にて、交露とは玉垂簾の如く珠玉を綴りし幔幕の類を云。

【和解】 是より以下は四十八願の中で、第三十二國土嚴飾の願成就にして、極樂淨土の講堂精舍宮殿樓觀は、皆な自然に化成し七寶を以て莊嚴られたるが、復た眞珠明月等と稱